

寺裏遺跡 第3次調査

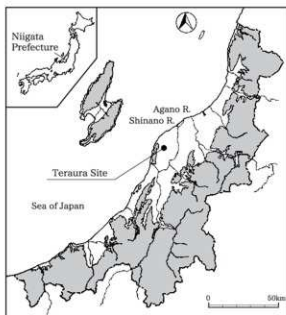
－ 経営体育成基盤整備事業（馬堀地区）に伴う寺裏遺跡第3次発掘調査報告書 －

2024

新潟市教育委員会

寺裏遺跡 第3次調査

— 経営体育成基盤整備事業（馬堀地区）に伴う寺裏遺跡第3次発掘調査報告書 —



2024

新潟市教育委員会

例 言


- 1 本書は新潟県新潟市西蒲区馬場 2830 番ほか^{（以下略）}に所在する寺裏遺跡^{（以下略）}（新潟市遺跡番号 810）の発掘調査報告書である。
- 2 調査は経営体育成基盤整備事業（馬場地区）に伴い、新潟市教育委員会（以下、「市教委」）が調査主体となり、新潟市歴史文化課文化財センター（以下、「市文化財センター」という）が補助執行した。
- 3 本書で報告する発掘調査は、第 3 次調査（令和 4 年度 本発掘調査）である。
- 4 令和 4 年度に本発掘調査と整理作業を行い、令和 5 年度に報告書刊行を行った。発掘調査・整理作業の体制・経過については第 3 章に記した。
- 5 出土遺物及び発掘・整理作業に係る記録類は、市文化財センターで收藏・保管している。
- 6 本書の執筆は、I・II・VII 章と III 章 1・2 節は長谷川凱志（市文化財センター）が、III 章 3 節と IV・V 章は武部喜光（株式会社ノガミ）が担当した。編集は長谷川が行った。
- 7 第 VI 章の自然科学分析は、株式会社古環境研究所に執筆を含めて委託した。第 VI 章第 2 節は金原美奈子、第 3 節は高橋敦、第 1・4・5 節は松田陸二（いずれも株式会社古環境研究所）による分析結果を編集して掲載した。
- 8 調査における遺構図面は（株）イビソクに委託して作成した。
- 9 本書に用いた写真のうち、遺構写真は遠藤恭雄（市文化財センター）・長谷川・武部が、空中写真は小寺政徳（株式会社イビソク）が、遺物写真は武部が撮影した。
- 10 遺物実測図のデジタルトレース、各種図版の作成・編集に関しては有限会社不二出版に委託し、完成データを印刷業者へ入稿して印刷した。
- 11 本書で報告する寺裏遺跡発掘調査の調査成果の一部については、これまで現地説明会や令和 4 年度新潟市遺跡発掘調査速報会等で既に公表されているが、本報告書と齟齬がある場合は、本書の記載内容をもって正とする。
- 12 調査から本書の作成に至るまで下記の方々・諸機関よりご指導・ご協力を賜った。ここに記して厚く御礼申し上げます。

（所属・敬称略、五十音順）

亀井 巧・鎌田 誓・鈴木俊成・鶴巻康志・梨本重雄・水澤幸一

新潟市立歴史図書館・新潟県新潟地域振興局巻農業振興部・新潟県立文書館・新潟市文書館・
西蒲土地改良区・馬場地区圃場整備実行委員会

凡 例

- 1 本書は本文・別表と巻末図版（四面図版・写真図版）からなる。
- 2 本書で示す方位はすべて真北である。磁北は真北から西偏約8度である。掲載した図面のうち、既存の地形図等を使用したものについては、原因の製作者・製作年を示した。
- 3 本書掲載図はすべて東日本大震災後の測量座標データによる。
- 4 引用・参考文献は、著者と発行年（西暦）を〔 〕中に示し、巻末に一括して掲載した。
- 5 遺構番号は発掘調査の際に付したものをそのまま用いたものが大半だが、ピットや掘立柱建物については、整理時に遺構番号を変更したものも存在する。また、試掘・確認調査で確認された遺構は、番号の重複を避けるため、新たに番号を付け直している。
- 6 土層観察の色調は『新版 標準土色帖』（小山・竹原 1967）2005 年度版を用いた。
- 7 遺物番号は、種別を問わず通し番号とした。
- 8 遺物実測図は1/3を基本とし、これと異なる場合は各図面に明記した。
- 9 遺物実測図において、包含層及び排土出土遺物については遺構外出土遺物として掲載した。また、遺構出土とした遺物のうち、近代以降としたSD9の出土遺物は流れ込みと考えられるため、包含層出土遺物として扱った。
- 10 土器実測図の断面は白抜きとした。
- 11 遺物図版で用いるスクリーントーンは以下のとおりとする。
石製品  磁面・磨面
- 12 石製品実測図に示す矢印は摩耗範囲を示す。
- 13 本文・観察表における遺構の記述は、井戸（SE）、土坑（SK）、溝（SD）、性格不明遺構（SX）、耕作関連遺構（SN）、柱列（SA）、掘立柱建物（SB）、柱穴（P）の順に記述した。ただし、柱列や掘立柱建物に伴う柱穴は、構成する柱列、掘立柱建物に続いて記載している。
- 14 遺構観察表における（ ）付きの値は残存値を意味し、遺物観察表中における（ ）付の値は推定値を意味する。
- 15 遺構平面図で切り合い関係のある遺構については、上端・下端の復元が可能ならば破線で示した。
- 16 遺構観察表において、切り合い関係にある遺構は不等号で示した。例えば「A>B」「B<A」のように表示した。この場合はAが新しく、Bが古い。
- 17 遺物観察表のうち、第三章第1節の第3表、第4表については、それぞれ別表2、別表4の凡例を参照すること。
- 18 本文中の挿図に用いた地形図、遺構・遺物図の縮尺は各図に示した。
- 19 第4図については、②が新潟県立図書館、①③④⑤が新潟市立歴史図書館所蔵資料であり、許可を得て越後佐渡デジタルライブラリー掲載の画像をデジタルトレースしたものである。
- 20 第13図は新潟市文書館所蔵の土地更正図（「高南村大字高道廿三番橋向」「馬堀村 拾四番字金塚甲」「馬堀村 拾六番字江戸橋」）、「馬堀村 拾七番字古屋敷」「馬堀村大字榎林ノ内式拾七番字川井切」「馬堀村大字榎林ノ内式拾六番字字前田」「馬堀村大字榎林ノ内式拾八番字田田」の写真から合成したものを新潟市地形図（1：2,500 2007年）と重ねた図である。
- 21 遺物の注記は、発掘調査年度である2022年の下2ケタ「22」と寺裏遺跡の略記号「寺ウラ」とし、出土地点や層位を続けて記した。

目 次

第I章 序 章

第1節 遺跡概観	1
第2節 発掘調査に至る経緯	1

第II章 遺跡の位置と環境

第1節 遺跡の位置と地理的環境	3
第2節 周辺の遺跡	3
第3節 歴史的環境	7

第III章 調査の概要

第1節 試掘・確認調査（第1・2次調査）	10
第2節 本発掘調査（第3次調査）	12
A 調査方法	12
1) 現 況	12
2) グリッドの設定	12
3) 調査方法	12
B 調査経過	13
C 調査体制	13
第3節 整理作業	14
A 整理方法	14
1) 遺 物	14
2) 遺 構	14
B 整理経過	14
C 整理体制	14

第IV章 遺 跡

第1節 概 要	15
第2節 基本層序	15
第3節 遺 構	16
A 遺構の概要	16
B 遺構各説	16
1) 井 戸 (SE)	16
2) 土 坑 (SK)	17
3) 溝 (SD)	17
4) 性格不明遺構 (SX)	18
5) 耕作関連遺構 (SN)	19
6) 柱 列 (SA)	19
7) 掘立柱建物 (SB)	19
8) 柱 穴 (P)	19

第V章 遺 物

第1節 概 要	21
第2節 土器・陶磁器	21
1) 遺構出土土器・陶磁器	21
2) 包含層出土土器・陶磁器	22
第3節 石 製 品	22
第4節 木 製 品	23

第VI章 自然科学分析

第1節 自然科学分析の概要	24
第2節 種 実 同 定	25
A 試 料	25
B 方 法	25
C 結 果	25
D 推定される植生と農耕	27
第3節 樹 種 同 定	28
A 試 料	28
B 分 析 方 法	28
C 結 果	28
D 考 察	28
第4節 放射性炭素年代測定	29
A 試 料	29
B 方 法	29
C 結 果	30
D 所 見	31
第5節 プラント・オパール分析	31
A 試 料	31
B 方 法	31
C 結 果	32
D 考 察	34

第VII章 総 括

第1節 寺裏遺跡の時代	35
第2節 寺裏遺跡の位置づけ	36
引用・参考文献	40
別 表	42
報告書抄録・奥付	巻末

挿図目次

第 1 図 馬堀地区ほ場整備事業に関連する 発掘調査位置図 (1/40,000) …………… 2	第 7 図 寺裏遺跡 自然科学分析サンプル採取地点 …… 24
第 2 図 寺裏遺跡周辺の地形分類図 (1/150,000) …… 4	第 8 図 寺裏遺跡の種実 …………… 26
第 3 図 寺裏遺跡周辺の中世～近世の遺跡分布図 (1/100,000) …………… 5	第 9 図 寺裏遺跡の木材 …………… 28
第 4 図 寺裏遺跡周辺古地図の比較 …………… 9	第 10 図 暦年較正年代図 …………… 30
第 5 図 試掘・確認調査出土遺物実測図 …………… 10	第 11 図 寺裏遺跡のプラント・オパール分析結果 …… 33
第 6 図 試掘・確認調査トレンチ位置図・土層柱状図 …… 11	第 12 図 寺裏遺跡のプラント・オパール …… 33
	第 13 図 寺裏遺跡周辺の旧土地利用図 …………… 37
	第 14 図 寺裏遺跡周辺のIV層分布図 …………… 38

表目次

第 1 表 寺裏遺跡及び馬堀地区ほ場整備事業に関連する 発掘調査履歴 …………… 2	第 7 表 寺裏遺跡における種実同定結果 …………… 25
第 2 表 寺裏遺跡周辺の中世～近世を含む遺跡一覧表 …… 6	第 8 表 樹種同定結果 …………… 28
第 3 表 第 1 次調査出土土器観察表 …………… 10	第 9 表 測定試料及び処理 …………… 29
第 4 表 第 2 次調査出土木製品観察表 …………… 10	第 10 表 測定結果 …………… 30
第 5 表 試掘・確認調査 遺構計測表 …………… 11	第 11 表 寺裏遺跡におけるプラント・オパール 分析結果 …………… 32
第 6 表 寺裏遺跡自然科学分析一覧表 …………… 24	

別表目次

別表 1 遺構計測表 …………… 42	別表 3 石製品観察表 …………… 45
別表 2 土器・陶磁器観察表 …………… 44	別表 4 木製品観察表 …………… 45

図版目次

図版 1 周辺の旧地形図 (1/25,000)	図版 9 遺構平面部分図 3 (1/80)
図版 2 ほ場整備事業に伴う試掘・確認調査位置図 (1/15,000)	図版 10 遺構個別図 2 (1/40)
図版 3 調査地位位置図 (1/10,000)	図版 11 遺構個別図 3 (1/40)
図版 4 グリッド設定図 (1/2,500)	図版 12 遺構個別図 4 (1/40)
図版 5 調査区全体図 (1/400)	図版 13 遺構個別図 5 (1/40)
図版 6 小グリッド別土器重量分布図 (1/400)	図版 14 遺構個別図 6 (1/40)
図版 7 遺構平面部分図 1 (1/80)、基本層序 A (1/80)、 基本層序 B (1/40)、遺構個別図 1 (1/40)	図版 15 遺構個別図 7 (1/40)
図版 8 遺構平面部分図 2 (1/80)、基本層序 C～E (1/80)	図版 16 出土遺物 1 陶磁器 1
	図版 17 出土遺物 2 陶磁器 2、石製品 1
	図版 18 出土遺物 3 石製品 2、木製品

写真図版目次

<p>写真図版 1 寺裏遺跡周辺空中写真</p> <p>写真図版 2 寺裏遺跡遠景・弥彦山を望む 寺裏遺跡全景</p> <p>写真図版 3 調査前現況 基本層序 A 基本層序 B 基本層序 C 基本層序 D 基本層序 E</p> <p>写真図版 4 SE12 上部断面 SE12 上部完掘 SE12 下部断面 SE13 上部断面 SE13 曲げ物底板 (45) 出土状況 SE13 上部完掘 SE13 下部断面 SE14 上部断面</p> <p>写真図版 5 SE14 上部完掘 SE14 下部断面 SE20 上部断面 SE20 上部完掘 SE20 下部断面 SE23 上部断面 SE23 榿木出土状況 SE23 下部断面</p> <p>写真図版 6 SE29 珠洲焼壺 (3) 出土状況 SE29 木製部材 (46) 出土状況 SE29 上部完掘 SE41 上部断面 SD25 土層断面 SE41 石臼 (38 ~ 40) 出土状況 SE41 下部断面 SK24 土層断面 SK24 完掘</p> <p>写真図版 7 SK32 土層断面 SK32 完掘 SD1 土層断面 SD1 完掘 SD8 土層断面 SD8 瀬戸・美濃焼小壺 (8) 出土状況 SD8 完掘</p>	<p>SD9・11 完掘</p> <p>写真図版 8 SD16 土層断面 SD16・44 完掘 SD17 土層断面 SD19 土層断面 SD17・19 完掘 SD22 土層断面 SD22・25 完掘 SD25 唐津焼皿 (13) 出土状況 SD25 完掘 SD30 土層断面 SD30 完掘 SD34 土層断面 SD34 樹皮検出状況 SD34 完掘 SD43 土層断面 SD9・22・43 完掘</p> <p>写真図版 10 SX38 土層断面 SX38 唐津焼椀 (23) 出土状況 SX38 完掘 SN2 完掘 SN5 完掘 SA46 完掘 SB15・66 完掘 SB15-P59 断面</p> <p>写真図版 11 P18 土層断面 P27 土層断面 P26・27 完掘 P35・45 土層断面 P35・45 完掘 P36 完掘 P39 完掘 P40 完掘</p> <p>写真図版 12 出土遺物 1 遺構出土陶磁器 (1 ~ 24)・包含層出土陶磁器 1 (25・26)</p> <p>写真図版 13 出土遺物 2 包含層出土陶磁器 2 (27 ~ 37)・石製品 1 (38 ~ 41)</p> <p>写真図版 14 出土遺物 3 石製品 2 (42・43)・木製品 (44 ~ 48)</p>
---	---

第I章 序 章

第1節 遺跡概観

寺裏遺跡は新潟県西蒲区(旧巻町)馬場寺裏2876ほかに所在する。西の角田山麓と、東の信濃川に挟まれ、中小の河川と自然堤防が点在する沖積平野に位置している。寺裏遺跡の西にも飛落川が南北に流れ、北へ約3km離れた場所にはかつて鵜潟が存在していた。地表面の海拔は2.2～2.6m前後であり、現況は調査地を含めた周辺一帯に水田が広がる。

寺裏遺跡は、令和2(2020)年に行われた経営体育成基盤整備事業馬場地区の県営ほ場整備事業に伴う試掘調査で新たに発見された遺跡である。令和3(2021)年には遺跡範囲を明らかにすべく確認調査が行われた結果、南北約90m×東西約70mの範囲に遺跡が広がると推定された。

令和2年度の発見時には、性格不明遺構1基とともに、室町時代の珠洲焼が発見された。また、令和3年度の調査においては、土坑1基、小土坑2基、溝1条、性格不明遺構2基とともに柱根が確認されている。

鵜潟南方の自然堤防上では古くから遺跡が確認されていたほか、寺裏遺跡と同様にほ場整備事業に伴う試掘調査において、新たに沖積地で発見された遺跡も数多くある。ただし、寺裏遺跡と同じ中世の遺跡として馬場上組遺跡、馬場中組遺跡などがある一方で、潟頭新田遺跡(寺裏遺跡の北方1km)や赤鈴砂山遺跡(北西方1.5km)は古代の遺跡であり、萱中遺跡(東方1.6km)は古墳時代の遺跡であるなど、時代は一律ではない。近接する遺跡であっても時代がそれぞれ異なる点は、自然環境や人間の生活圏が時代ごとに変化していった結果と考えられる。

第2節 発掘調査に至る経緯

新潟県新潟地域振興局巻農業振興部(以下「巻農業振興部」という)が市域で行うほ場整備事業予定地については、埋蔵文化財に関する取扱いについて歴史文化課と協議を行い、事業前に埋蔵文化財の試掘・確認調査を行うこととしてきた。

経営体育成基盤整備事業馬場地区については、県道佐渡山・巻線沿いの水田約938,000㎡について、平成30年に照会があった(30公10678)。歴史文化課では巻農業振興部との協議を重ね、整備予定地区を3ブロックに分けたうえで、平成30年度から順次試掘調査に着手することとした。

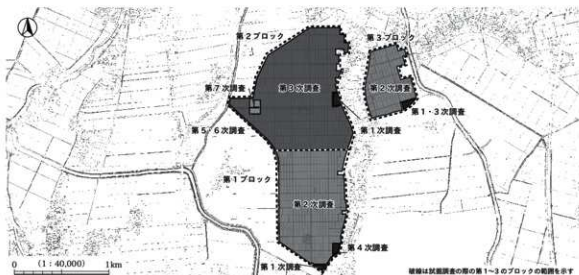
第1次調査は、揚水機場の建設予定地3か所について試掘調査(調査番号:2018173)を行った。平成30年10月23日から25日までの3日間の調査では、3つの調査地のうち、東側の揚水機場予定地から古墳時代の土器がまわって出土したため、萱中遺跡として周知化した。

令和元年度は整備予定の農地のうち第1ブロック及び第3ブロックについて、調査地南側に地蔵腰遺跡を含むことから、同遺跡の確認調査(調査番号:2019168)として発掘調査を行った。また、前年度に新発見された萱中遺跡については追加の確認調査(調査番号:2019213)を行った。令和元年10月7日から11月5日まで行われた地蔵腰遺跡確認調査では、地蔵腰遺跡に関わる遺構・遺物は確認されなかったが、新たに馬場上組遺跡と馬場中組遺跡が発見され、周知化した(調査番号:地蔵腰遺跡確認調査2019168・馬場上組遺跡試掘調査2019199・馬場中組遺跡試掘調査2019198)。両遺跡とも中世の遺跡であり、馬場上組遺跡では井戸・土坑・性格不明遺構と白磁が、馬場中組遺跡では井戸と珠洲焼・土製品・木製品が確認されている。萱中遺跡確認調査は令和2年1月28日から1月30日に行われ、古墳時代の土師器が新たに発見されたため、遺跡範囲を拡大した。

令和2年度は、第2ブロックを試掘調査(調査番号:2020180)するとともに、前年度新発見された馬場上組遺跡の追加確認調査(調査番号:2020178)を行った。令和2年10月7日に行った馬場上組遺跡確認調査では、遺物は認められなかったが、複数の試掘坑で遺構を検出し、遺跡範囲を拡大した。第2ブロックの試掘調査は令和2年10月13日から10月30日にかけて行い、性格不明遺構が検出され、珠洲焼の出土した168Tを中心に寺裏遺跡を新たに周知化した。

新発見された寺裏遺跡について、追加の確認調査が必要となり、令和3年10月1日から10月4日にかけて行った(調査番号:2021175)。この確認調査では土坑や性格不明遺構と共に木製品も発見され、遺跡範囲を一部変更することとなった。

以上のように令和3年度の確認調査によって寺裏遺跡の範囲が確定したことから、歴史文化課と巻農業振興部の間で整備工事が寺裏遺跡に与える影響について協議が行われ、保護層を確保できないと考えられた水路開削工事部分と、削平を伴う面工事の範囲について本発掘調査で対応することとなった。このため巻農業振興部から新潟県教育委員会教育長宛に文化財保護法94条に定める通知(令和4年2月8日付新振巻第708号の2「埋蔵文化財包蔵地の発掘の通知について」)を提出し、県教育長から巻農業振興部にて本発掘調査の勧告が行われた(令和4年3月2日付教文1361号の2)。その後、新潟市教育委員会教育長宛に本発掘調査の依頼が提出され(令和4年3月16日付新振巻第794号「経営体育成基盤整備事業(馬場地区)予定箇所における埋蔵文化財の発掘調査(本発掘調査)について(依頼)」)、これに対して令和3年度中に受託の旨の回答を送付した(令和4年3月16日付新振B第247号の8「経営体育成基盤整備事業(馬場地区)予定箇所における埋蔵文化財の発掘調査(本発掘調査)について(回答)」)。以後、調査範囲や調査に伴う農道迂回工事などについて巻農業振興部と詳細な協議を重ね、令和4年7月20日付で県知事宛に発掘調査の着手を通知し、本発掘調査を開始した。



第1図 馬場地区は場整備事業に関連する発掘調査位置図

第1表 寺裏遺跡及び馬場地区は場整備事業に関連する発掘調査履歴

発掘調査 調査番号 調査発掘開始日	調査年度	調査期間	主な成果	調査種別	調査施設	調査担当	調査面積 (㎡)内 発掘面積	トレンチ 番号	文庫	前年度 調査番号
1次	平成30 (2018)年	H30/10/23 ~ H30/10/25 (3日間)	古墳時代Ⅰ期出土、 伴中遺跡として新発見。	試掘調査	は島熱帯事業 (巻水場建設)	新潟市文化財センター	104.24㎡ (2.2ha)	1 ~ 14T (14ヶ所)	-	2018173
2次	令和元 (2019)年	R 1/10/7 ~ R 1/11/5 (19日間)	調査地帯内の埋蔵文化財の埋蔵調査として 発見、中野遺跡の併し、馬場上組遺跡・ 包蔵中野遺跡として新発見。	確認調査	は島熱帯事業 北越地区 牧野耕作	新潟市歴史文化課	675.20㎡ (1,600ha)	1 ~ 120T (120ヶ所)	-	2019158 2019159 2019199
3次	令和元 (2019)年	R 2/1/20 ~ R 2/1/30 (9日間)	新発見された伴中遺跡の追加確認調査。 古墳時代Ⅰ期・石塚出土。遺跡範囲 拡大。	確認調査	は島熱帯事業 北越地区 (巻水場建設)	新潟市歴史文化課 牧野耕作	38.10㎡ (1.0ha)	127 ~ 130T (10ヶ所)	-	2019213
4次	令和2 (2020)年	R 2/10/7 (1日間)	前年新発見された包蔵土壌層の追加確認 調査。遺構を検出し、遺跡範囲拡大。	確認調査	は島熱帯事業 北越地区	新潟市歴史文化課 牧野耕作	39.55㎡ (0.9ha)	242 ~ 247T (6ヶ所)	-	2020178
5次	令和2 (2020)年	R 2/10/13 ~ R 2/10/20 (14日間)	中野の遺構が出土。 伴中遺跡として新発見。	試掘調査	は島熱帯事業 北越地区	新潟市歴史文化課 牧野耕作	731.13㎡ (92.8ha)	127 ~ 241T (115ヶ所)	-	2020180
6次	令和3 (2021)年	R 3/10/4 ~ R 3/10/4 (2日間)	前年新発見された寺裏遺跡の追加確認 調査を検出し、遺跡範囲変更。	確認調査	は島熱帯事業 北越地区	新潟市歴史文化課 牧野耕作	49.23㎡ (1.77ha)	248 ~ 252T (5ヶ所)	-	2021175
7次	令和4 (2022)年	R 4/10/1 ~ R 4/10/11 (4日間)	室野時代Ⅰ・Ⅱ時代初期の遺構・遺物が 確認された。	本発掘調査	は島熱帯事業 北越地区	新潟市文化財センター 巻水場	948.76㎡ (1.72ha)	-	本庫	2022001

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

第1節 遺跡の位置と地理的環境

寺裏遺跡は新潟市西蒲区馬堀地区に所在する。西蒲区は平成17(2005)年に新潟市と合併する以前は、巻町・西川町・岩室村・潟東村・中之口村から構成された。このうち寺裏遺跡の所在する馬堀地区は旧巻町に相当する。

旧巻町は西に日本海に面した角田山とその裾野の丘陵地帯を有し、北側の旧新潟市との境界には砂丘列が連なっている。一方、南側の岩室村・中之口村、及び東側の西川町との旧市町村界は沖積地が広がり、多くが水田として利用されてきた。馬堀地区は巻町の中でも内陸部に位置しており、西に200mほどで飛落川が、東には約2km離れて大通川が流れており、こうした河川によって形成された旧自然堤防上に馬堀・漆山・河井などの集落が立地している。

この地域を流れる飛落川・大通川・新木山川・旧木山川といった河川は、寺裏遺跡の北約3kmにかつて存在した鰐淵に注いでいた。日本海へは直線距離で9kmほどだが、西方には角田山麓が控え、北方には砂丘列が存在したこと、江戸時代に新川が開削されるまで鰐淵から海へ通じる主だった水路は存在せず、たびたび水害をもたらしたことが知られている。昭和43(1968)年に鰐淵が干拓され、現在はほぼ全域が水田として利用されている。

寺裏遺跡の立地する、西蒲区内陸部の沖積地では、中世の遺跡と古代の遺跡に立地傾向の差がみられる。巻館跡、和納館跡などの居館跡や河井前遺跡や馬堀上組遺跡、馬堀中組遺跡など、中世の遺跡は現集落の立地する自然堤防とその縁辺に存在している。現集落と離れた水田地帯に存在する遺跡もあるが、遺物の採集のみで発掘調査が実施されていない遺跡が大半を占め、その性格等は不明である。一方、古代以前の遺跡は現集落とは離れた水田地帯で多数確認されている。潟頭新田遺跡や島瀬瀬遺跡、茶院A遺跡、下新田遺跡、林付遺跡などの古代の遺跡のほか、古墳時代の萱中遺跡などである。この立地の違いは、河川の流路の変化や氾濫、地盤沈下により、微高地の位置が古墳時代から中世にかけて変化した可能性を示唆している。

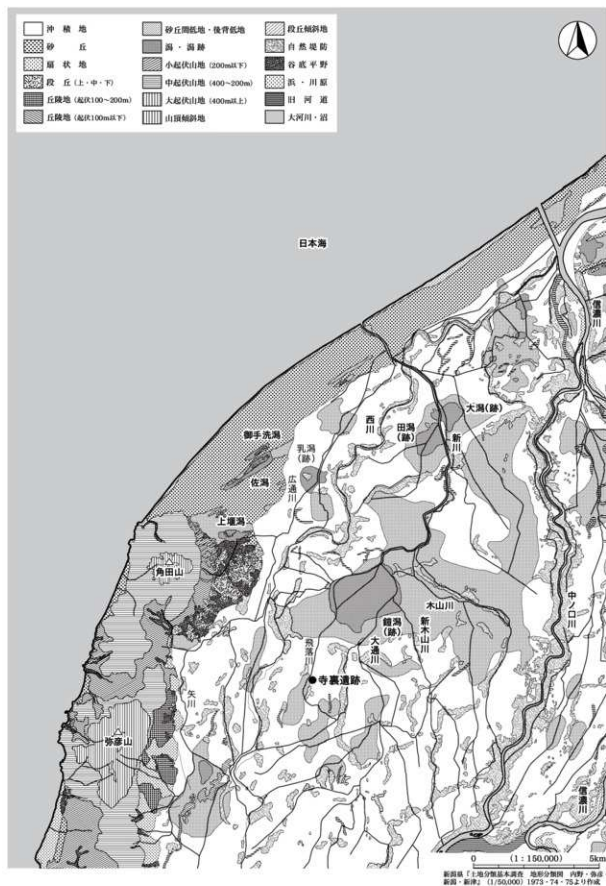
第2節 周辺の遺跡

寺裏遺跡周辺の遺跡の動態について、遺跡の属する中世を中心に述べる。()内は第3図での遺跡番号を示す。寺裏遺跡は58である。)

縄文時代の遺跡 縄文時代には御井戸遺跡(36・37)や大沢遺跡(23)を筆頭として角田山麓を中心に多くの遺跡が確認されている。また、四十石遺跡や大藪遺跡(9)など、砂丘地上で確認された遺跡も存在する。沖積地での遺跡の確認例は少なく、山地へ丘陵部と砂丘上が当期の中心地だったとする見方がある。一方で、旧味方村の味方排水機場遺跡では地表下約19mから遺物が出土しているため、沖積地では地下深くに埋没し未発見になっている縄文時代の遺跡が一定数あると考えられる。

弥生時代の遺跡 角田山麓に加え、四十石遺跡や六地山遺跡、緒立遺跡など、砂丘上で確認された遺跡が増加する。しかし遺跡の総数としては、縄文時代や古墳時代に比較して少数である。

古墳時代の遺跡 角田山麓では御井戸遺跡などの集落遺跡に加え、複数の古墳が確認されている。また、砂丘上でも引き続き多数の遺跡が営まれた。沖積地でも一定数の遺跡が確認される。寺裏遺跡から東方約1.6kmの萱中遺跡では地表下2.0～2.7mで、東方約3kmの茶院A遺跡(83)では地表下0.5mほどでそれぞれ古墳時



第2図 寺裏遺跡周辺の地形分類図



第3図 寺裏遺跡周辺の中世～近世の遺跡分布図

代の遺物が出土している。

古代の遺跡 古代以降になると様相が変化する。砂丘上では引き続き遺跡が確認される一方、角田山麓で確認された遺跡数は減少し、平野部では増加する。先述の茶院A遺跡では「宅」、寺裏遺跡北東約4.5kmの林付遺跡(48)では「川合」「□井庄」などの墨書土器が出土しており、それぞれ荘園経営と関係していた遺跡と考えられる。ただし、茶院A遺跡は奈良時代を主体とし、平安時代の遺物は乏しい一方で、林付遺跡は平安時代に形成された遺跡である。新潟市内ではこの時期、江南区で駒首湯遺跡や道正遺跡などの大規模な集落が見られるほか、西区の的場遺跡では官衙関連の遺物・遺構が確認される。寺裏遺跡の所在する馬屋集落と同一自然堤防上の南方の佐渡山集落(燕市(旧古田町))には中祖遺跡が存在し、9～10世紀の須恵器・土師器のほか、緑釉陶器などが確

第2表 寺裏遺跡周辺の中世～近世を含む遺跡一覧表

No.	名称	時代	No.	名称	時代	No.	名称	時代	No.	名称	時代
1	吉野山遺跡	平・鎌	32	上城跡	室	44	堀内城跡	中世	87	西谷寺遺跡	古～平・中世
2	木山遺跡	平・鎌	33	香取跡	室	45	城平遺跡	鎌	88	上段遺跡	平・中世
3	仏念阿毛遺跡	鎌	34	千早遺跡	平・鎌	46	湊寺跡	中世	89	藤寺跡	中世
4	新田遺跡	鎌～平・中世	35	新田川遺跡	鎌～古～古～平・江	47	石塚跡	中世	100	善九郎寺内入道跡	平・中世
5	千早千早遺跡	鎌～平・中世	36	新田川A遺跡	鎌～古～古～平・中世	48	石塚寺跡	中世	101	神野寺内入道跡	平・中世
6	木山町の石段瓦葺遺跡	古	37	新田川B遺跡	鎌～古～古～平・中世	49	西ノ千早遺跡	室	102	江沼寺遺跡	平～中世・古世
7	宮田遺跡	鎌～古～古～平・鎌・古～平・江	38	新田川C遺跡	鎌～古～古～平・中世	50	天神遺跡	室	103	八人屋遺跡	平～中世・古世
8	山崎の甲山園地遺跡	鎌	39	下城跡	鎌～古代・中世	71	石鳥居跡	室	104	江沼寺遺跡	平～中世・古世
9	八幡遺跡	鎌～古～古～平・鎌	39	西ノ千早A遺跡	古代・中世	72	寺内城跡	室	105	江沼寺遺跡	平～中世・古世
10	藤城山遺跡	古～室	40	八幡遺跡	古	74	高橋遺跡	室	107	高橋遺跡	平～中世・古世
11	西川大塚遺跡	中世	41	西ノ千早B遺跡	鎌～古代・中世	75	上城遺跡	中世	108	上ノ千早遺跡	平・中世
12	南河原遺跡	鎌～平・鎌	42	藤城山遺跡	古～平・鎌	76	石塚跡	室	109	神野寺内入道跡	平・中世
13	南河原遺跡	鎌～平・鎌	43	一心寺遺跡	古代・中世	77	石塚跡	室	110	神田山遺跡	平・鎌
14	坂田遺跡	平・中世	44	河内山遺跡	鎌	78	志ノ寺遺跡	中世	111	神田山遺跡	平・鎌
15	石塚跡	室	45	石塚跡	鎌	79	三ノ新田遺跡	室	112	上城遺跡	平・鎌
16	藤城山～古石塚	中世	46	藤城山遺跡	江	80	新田跡	鎌～古～室	113	寺崎遺跡	平・中世
17	松葉尾城遺跡	中世	47	寺崎遺跡	古～平・中世	81	寺崎遺跡	室	114	新保寺遺跡	平・古世
18	松葉尾城遺跡	中世	49	林付遺跡	平・中世	82	高橋山新田跡	室	115	本城山新田跡	平代・中世
19	長尾遺跡	中世	50	石塚跡1号跡跡	江	83	赤松山遺跡	古～古～平・鎌・古	116	赤松山遺跡	古～古～平・中世
20	長尾遺跡	平・室	52	天狗山城	中世	84	石塚跡	室	117	大塚遺跡	古～古～平・中世
21	岩ノ内遺跡	江	53	赤松山城	室	86	寺崎遺跡	古代・中世	120	中塚遺跡	平・中世
22	二ノ石塚跡	鎌～古～室	54	赤松山城	室	87	高橋山遺跡	平・江	121	新保遺跡	平～中世
23	大石遺跡	鎌～平・鎌～古～室	55	下城跡	中世	88	上城遺跡	中世	122	新保遺跡	平～中世
24	上ノ千早遺跡	鎌	56	下城跡	中世	89	赤松山城	室	123	千早川新田跡	平・中世
25	古坂1～7号跡	中世・古世	57	岩ノ内遺跡	鎌～室	90	上ノ千早遺跡	古代・中世	124	赤松山城遺跡	古代・中世
26	古石塚	室	58	寺裏遺跡	鎌～古～室	91	長尾山遺跡	平・鎌	125	高橋山遺跡	平・鎌
27	石塚跡	中世	59	藤城山遺跡	鎌～古～室	92	赤松山城	平・江	126	千早川新田跡	平・鎌
28	神田山遺跡	古～古～平・室・江	60	神田山遺跡	古～古～室	93	赤松山城	室	127	赤松山城	鎌～古～室
29	坊ノ内遺跡	江	61	方石川遺跡	平・鎌～室	94	夏井跡	室	128	丸尾寺遺跡	鎌～古～室
30	神田山遺跡	鎌～平・中世	62	方石川跡	室	95	丸尾寺跡	室	129	八人屋遺跡	平・中世
31	下城跡	室	63	新保寺跡	江	96	夏井跡	江			

認められている〔本間ほか2000b〕。寺裏遺跡周辺の古代の遺跡としては、湧頭新田遺跡や高知遺跡、燕市の江添C遺跡(104)や野沖遺跡(122)など沖積地の遺跡が多数存在するが、その中には現集落の立地する自然堤防から離れた水田中の遺跡も多いため、現況地形では認識できない埋没した旧地形の存在を窺わせるものである。

中世の遺跡 中世になると、寺裏遺跡周辺では複数の居館跡が見られる。遺跡西方の西川の自然堤防上に巻館跡(33)や和納館跡(77)、原館跡(80)、本町城跡、程ヶ崎館跡などが、東方の萱刈川の自然堤防上に館ノ腰(45)、長所館跡、佐佐山城跡などが存在する。西川・萱刈川の間、現在の米納津・鴻巣といった集落のある東西方向に伸びる自然堤防上にも、鴻巣城館跡や天竺堂城跡、新保館跡などの城館跡が存在する。少し離れた角田～弥彦山麓には、角田山東麓に上城跡・下城跡や松岳山城跡、天神山城跡などの山城跡が分布している。いずれの城館も、南北朝～戦国時代に築かれたものと考えられている。これら山城・城館のほか、集落跡と考えられる遺跡も点在しており、赤館砂山遺跡(42)や林付遺跡など、古代の遺跡と重複して営まれた遺跡も存在する。

周辺の沖積地で本発掘調査が行われた中世の遺跡として、和納館跡、馬場屋敷遺跡、浦廻遺跡、小坂居付遺跡などが存在する。和納館跡からは二重に設けられた同濶やピット・井戸などとともに、珠洲焼・石製品・木製品などが出土し、文献にも記されている中世城館の一端を垣間見ることができる〔川上1997〕。旧白根市の信濃川左岸に位置する馬場屋敷遺跡では鎌倉時代の建物跡や室町時代の井戸などが確認され、珠洲焼、中世陶器、金属製品のほか、多数の木製品と木簡などが出土している。低湿で人の営みが古くから始まった土地ではないと考えられていた地域の歴史を覆す結果を示した遺跡である〔川上1983〕。同じく旧白根市の中ノ川右岸の浦廻遺跡は、土坑、瓦跡とともに卒塔婆などの木簡や木製品のほか、人骨・獣骨が見つかった鎌倉時代の遺跡である。中世における畑作と一般民衆の葬送を窺える遺跡である〔本間ほか2003〕。小坂居付遺跡も旧白根市の遺跡であり、中ノ川右岸の自然堤防上で、区画溝を伴う屋敷地と、その周囲に広がる水田跡が見つかった。珠洲焼や青磁のほか、金属製品や多数の木製品などが出土し、鎌倉時代末～室町時代の屋敷地と水田耕作の様子が明らかになった〔佐藤ほか2012〕。

寺裏遺跡周辺では、ほかにも河井前遺跡(44)や馬堀上組遺跡(82)、馬堀中組遺跡(59)など本発掘調査が行われておらず、詳細は不明な遺跡も多数存在するほか、燕市域(旧吉田町)でも珠洲焼の表採された遺跡が多数存在している。中世の遺跡も古代の遺跡と同様に、現在の自然堤防上に位置する遺跡もあれば、自然堤防から離れた低地でも見つかった。

第3節 歴史的環境

ここでは主に文字資料や文献を基に、寺裏遺跡周辺に関わる古代・中世・近世の歴史的環境について、主に新潟県史通史編、巻町史通史編及び吉田町史通史編からの引用を中心に述べる。

寺裏遺跡を含む、角田山麓とその東の平野部は、古代の蒲原郡に属していたと考えられる。承平年間（931～938）に撰進された『倭名類聚抄』には、桜井・勇礼・青海・小伏・日置の五郷が見られる。本遺跡の東方約5.6kmに所在する下新田遺跡（龍田ほか2015）から、「日置」と書かれた墨書土器が出土しており、日置郷がこの周辺にあった可能性がある。また、延長五（927）年の『延喜式』神名帳には、「青海（2座）・宇都良波志・伊久礼・榎田・小布施・伊加良志・伊夜比古・長瀬・中山・旦那野・船江・土生田」の蒲原郡の式内社（12社・13座）が記されているが、所在については諸説ある。

古代以降、弥彦・角田山麓周辺は弥彦荘に含まれていたとされる〔荻野ほか1986〕。寺裏遺跡周辺も弥彦荘に属していたと推測される。文治元（1185）年に越後国は源頼朝の知行国となり、越後国守護の座は様々な人物が務めた。承久三（1221）年に起きた承久の乱では、北条朝時率いる幕府軍が越後国を経て西へ向かい、乱以後は北条氏の子孫が越後を含む北陸道の守護を代々務めた〔田村ほか1987〕。

元弘三／正慶二（1333）年に鎌倉幕府と共に北条氏が滅亡したことで、新たに上野を本拠とする新田義貞が越後守・越後守護職となった。建武二（1335）年に南北朝の対立が生じた際は、阿賀北の氏族は足利方に、阿賀野川以南の氏族は南朝方に属したものが多かった。この時南朝側について小国氏は、現在の西蒲区岩室の天神山城を拠点にしていたという。両軍は蒲原津や松崎で戦ったと文献に残っている。新田義貞や後醍醐天皇の死後、興国二／暦応四（1341）年、義貞の三男である新田義宗や宗良親王を擁した南朝方が蒲原津や信濃国地で蜂起したため、足利尊氏は上杉憲顕に越後入りを命じた。こののち憲顕によって南朝側は平定され、憲顕は前後して越後国守護となり、数年ののち鎌倉へと帰った。正平六／観応二（1351）年に足利尊氏・高師直と足利直義が衝突し、最終的に直義は上杉憲顕を頼り関東へ赴く。憲顕は尊氏率いる軍勢と関東各地の尊氏方の武士によって苦戦し、信濃へ敗走した。このとき、阿賀北の氏族は尊氏に従うものが多い一方、かつて南朝側として戦った新田一族や小国氏などは尊氏打倒を掲げて上野で蜂起した。このとき憲顕は反尊氏側として越後・信濃で戦いに参加しているが、正平十八／貞治二（1363）年には越後国守護として復帰し、南朝側の残党を平定し越後での内乱は終息した〔赤沢ほか1987〕。

応永二十三（1416）年、前関東管領の上杉氏憲が鎌倉で、幕府に対して挙兵したものの敗れて滅んだ。これを機に幕府と鎌倉府の関係は悪化した。応永三十（1423）年、幕府方である越後守護の上杉頼方と、鎌倉府方である越後国守護代の長尾邦景が衝突する応永の大乱がおこる。邦景方の山吉氏の籠る三条城を巡って戦いが起きるものの、応永三十四（1427）年に頼方が降伏したことでこの内乱は終息した〔山田ほか1987〕。

永正四（1507）年、越後国守護上杉房能は、守護代長尾為景に攻撃され自害した。反為景の阿賀北氏族は上杉頼定に援軍を求めたが、頼定も討死している。こののちも上杉氏と長尾氏との対立が続くが、最終的に越後国守護の上杉定実が嗣子のないまま没したため、天文十九（1550）年、長尾景虎が越後国主となり、また永禄四（1560）年に関東管領の座も引き継いだ〔池上ほか1987〕。

これらと同時期の天正五（1577）年の書状において、先述の応永の大乱でも記録の残る三条城主山吉氏の所領を記した『三条同名同心家風給分帳』には、寺裏遺跡の東に位置する馬堀が、名塚分として「間堀村・漆山・てんちくと村・押付村」として登場する。同じ文書で遺跡南西の和納村は本田善左衛門尉分となっている〔金子1994〕。このため、当時遺跡周辺は三条城の影響下にあったと推測される。天正三（1575）年の上杉家軍役帳では、山吉弥次郎（豊守）は旗本、鎧235、手明40、鉄砲20、大小旗30、馬上52、計377と記されている。この軍役帳に上杉家すべての部隊が掲載されているかなど問題があるにせよ、掲載されている中で諸兵科の合計数

が最も多いのが山吉氏であることから、山吉氏はそれを維持できるだけの経済力を有していたと推測できる。

天正七(1579)年に上杉謙信が没したことで生じた御館の乱では、三条城に拠った神余親綱が上杉景虎方として、景勝側と戦っているほか、天神山城の小国氏は景勝側についている。天正八(1580)年4月に上杉景勝が栃尾・三条方面へ出陣した際の書状には、「仍河中島悉一変、向橋尾進馬、彼領中不残一宇焼払成墟候。」との記述があるが〔巻町史〕、この河中島とは、西川と中ノ口川の間の川中島と呼ばれる地域を指すと考えられる。寺裏遺跡周辺が相当するかは不明であるが、この川中島とされた地域は戦火の影響を被ったことが伺える。また、同年6月9日に、小国石見守の要請に応じて安部二介を派遣し、和納城を攻めた時の景勝の書状には「和納及調儀、二之廻輪迄取破、巢城計成之引除之由簡要候。」との記述がある。なお、同年6月20日には、景勝は「仍三条落居之儀」と記された、三条城落城についての書状を出している。これらに前後して、先述の川中島の所領についての書状も複数存在している〔巻町史編さん委員会1988〕。

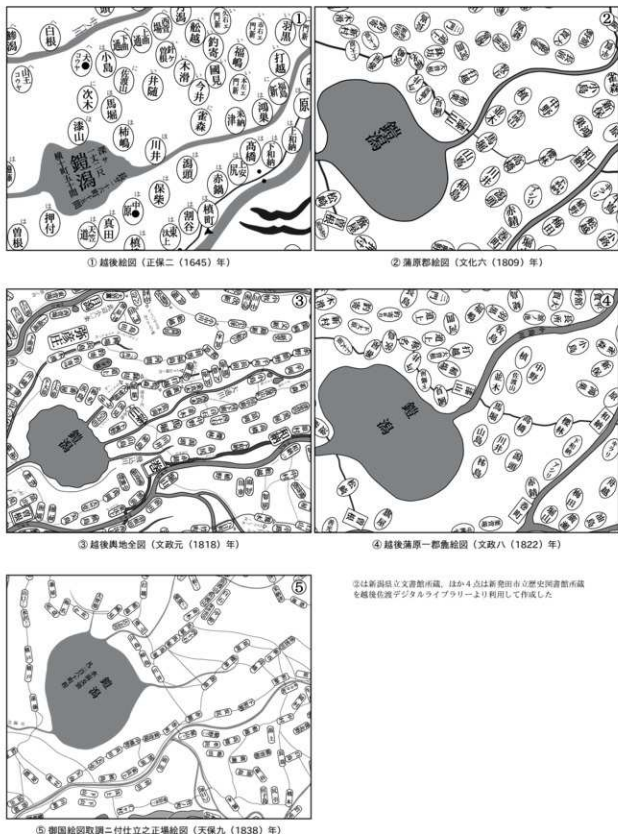
御館の乱以降、織田信長と結んだ新発田重家が上杉景勝と戦った際に「此間從新発田、弥彦筋・其外川辺放火之由申候」という記述もあるが、寺裏遺跡周辺でどのような影響があったかは不明である〔巻町史編さん委員会1988・金子1994〕。

上杉景勝の会津移封後、寺裏遺跡周辺の馬堀などの村々は2年間の堀氏の支配ののち、元和四(1618)年、牧野家の治める長岡藩となった。寛永十一(1634)年に長岡藩から三根山藩が分知した際には、本道跡周辺では河井、潟頭、馬堀、漆山などが三根山藩領となった。その後、宝永五(1708)年に長岡藩と三根山藩との村替えて、川井、漆山などは再び長岡藩領に戻り、馬堀、潟頭などは三根山藩領でありつづけた。馬堀村では、三根山藩の統治下で、枝郷として中野新村・桜林村・白穀新村が成立した〔佐藤・中村1994〕。

文献には、こうした村々が用排水を巡りしばしば対立していた様子が登場する。具体的には、正保元(1644)年に築かれた馬堀用水と付随する土手が上流からの排水を阻んだことで、用水の恩恵を受けた馬堀村と、排水を阻害された上流の吉田村や米納津村との対立が生じた。また、嘉永元(1848)年、桜林村が自村の飛落川の用水筒を塞いだため、馬堀村などの耕地は排水ができず湛水し、村人が押しかけ排水筒を破壊したとの記録も残る。こうした事例は飛落川流域に限らず、西川左岸の矢川や広通江(現在の広通川)の流域でも類似の記録が残る。18世紀以降には御封印野と呼ばれた早通川と中ノ口川の間広がる低湿地の干拓や、新川開削による鵜沼、田潟、大潟の三潟干拓などが行われ、水害防止と新田開発が進められていった〔亀井・本間1994〕。

寺裏遺跡周辺の古地図を参照すると、正保二(1645)年の越後絵図(第4図-①)には馬堀と漆山が描かれている。文化六(1809)年の「蒲原郡絵図」(第4図-②)で桜林が登場するものの、文政元(1818)年「越後輿地全図」(第4図-③)、文政八(1822)年「越後蒲原一部籠絵図」(第4図-④)、天保九(1838)年「御国絵図取調二付仕立之正場絵図」(第4図-⑤)ではそれぞれ桜林と高橋の位置が入れ替わっている。これらは製作時の誤りと推測する。地図によって赤尻・安尻、川井・河井、真木岡・植岡など表記が変わりながら現在でも残る地名がある一方で、百石(馬堀枝郷の白穀新村か)や中野など、明治以降の地図では所在が確認できなくなった地名も存在する。

第IV章第13図に示した明治20年代の土地更正図では寺裏遺跡周辺は西蒲原郡馬堀村古字屋敷とされている。遺跡名となった寺裏という小字の由来は不明であるが、遅くとも昭和20～30年代の耕地整理後には字寺裏という表記が変わったようである。遺跡の所在する馬堀村は明治34年まで存続し、同年潟南村・佐渡山村の一部と漆山村が合併し漆山村となった。そののち、昭和30年に周辺の峰岡村・角田村・松野尾村・浦浜村とともに漆山村も巻町と合併した。巻町はその後平成17年に新潟市に合併し、新潟市西蒲区の一地域となり、現在にいたる。



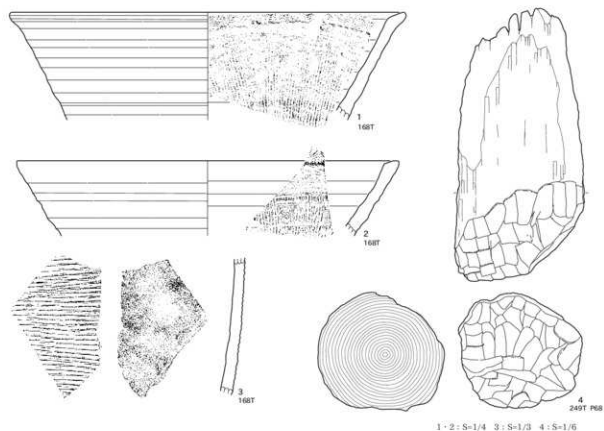
第4図 寺裏遺跡周辺古地図の比較

第Ⅲ章 調査の概要

第1節 試掘・確認調査(第1・2次調査)

寺裏遺跡では、これまで馬堀地区のほか整備事業に伴い、本発掘調査前に2度の試掘・確認調査が行われている(第1表)。

第1次調査 令和2年10月13日から10月30日にかけて、経営体育成基盤整備事業馬堀地区に伴い、新潟市教育委員会が行った試掘調査である。事業面積938,000m²に対し、115か所のトレンチ(127~241T)を発掘調査し、1か所(168T)で遺構(性格不明遺構)や遺物(珠洲焼酎・片口鉢)が確認され、寺裏遺跡として周知化した(第6図)。



第5図 試掘・確認調査出土遺物実測図

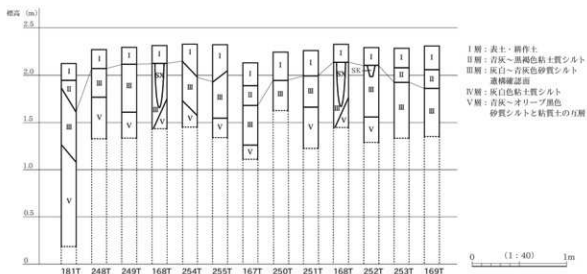
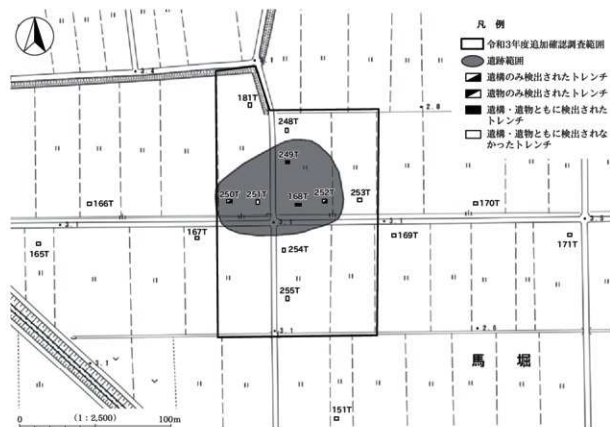
第3表 第1次調査出土土器観察表

※表記については、43ページ別表2の凡例を参照

No.	出土位置	種類	器種	法量 (cm)			産地	胎土	色調	時期	成形・文様・調整ほか	残存部位	残存率	備考	
				口径	底径	器高									
1	168T-SX67	陶器	片口鉢	42.0			珠洲	石・長・白・濁	に赤い黄地(10YR7/3)	珠洲VI期	内面刷し目	外面イキ料薬性庄痕	口縁部	6/36	
2	168T-SX67	陶器	片口鉢	39.5			珠洲	石・白・陶	黄灰(2.5Y5/1)	珠洲V期	内面刷し目		口縁部	1/36	
3	168T-SX67	陶器	甕				珠洲	石・白・陶	灰(N5/7)				外面平打ち身キズ、内面無文で長儀	体部	

第4表 第2次調査出土木製品観察表

No.	出土位置	時期	器種	法量 (cm)			木取り	樹種	備考
				長さ	幅	厚さ(径)			
4	240T-P68	中世	木柱	42.0	20.0	18.0	丸木	ハンノキ	AMS法で1301-1371 cal AD



第6図 試掘・確認調査トレンチ位置図・土層柱状図

第5表 試掘・確認調査 遺構計測表

順序は本発掘調査ではなく、試掘・確認調査の順のもの

遺構	グリッド	トレンチ名	時代	確認 解位	主軸 方向	規模 (m) 長軸 長軸 短軸 短軸	坑面標高 (m)	形状	層土	埋積状況	出土遺物	備考
SK	70	7G9-14	168T	-	Ⅱa層	-	-	隅丸方形	弧状	2	ブロック状	試掘調査168T (SK1)
P	71	4G11	249T	-	Ⅱa層	-	-	円形	弧状	3	柱状	本柱 (ハンノキ・AMS法で1301-1371calAD) 確認調査249T (P91)
P	72	4G6	249T	-	Ⅱa層	-	-	円形	U字状	1	単層状	確認調査249T (P92)
SK	73	7C1	250T	-	Ⅱa層	-	-	楕円形	弧状	1	単層状	確認調査250T (SK3)
SK	74	713	252T	-	Ⅱa層	-	-	-	弧状	1	単層状	試掘坑断面 (垂壁) で検出 確認調査252T (SK4)

第2次調査 令和3年10月1日から10月4日にかけて、前年に新発見された寺裏遺跡の内容を確認するために行った追加の確認調査である。8か所のトレンチ(248～255T)を発掘調査し、3か所(249・250・252T)で遺構(土坑・小土坑・性格不明遺構)が、1か所(249T)で遺物(木柱)が確認された。

出土遺物について 第1次調査では168Tより珠洲焼3点(573.26g)、第2次調査では249T内の柱穴から木柱1点が出土した(第5図)。1・2は珠洲焼片口鉢である。1は外側に屈曲した口縁内端に面を取り、櫛描波状文が施されるため、e9類・珠洲VI期と考えられる。外面にはイネ科植物の葉体の圧痕が見られる。2は器壁から口縁までほぼ一定の厚みで、口縁端が三角頭の内端面に櫛描波状文が施されており、e4類・珠洲V期(吉岡1994)に比定される。割口断面に漆継の痕が残る。3は珠洲焼甕で、体部の破片資料である。4は木柱で、底面は手斧による加工痕が見られる。

第2節 本発掘調査(第3次調査)

A 調査方法

1) 現況

調査地周辺は主に水田として利用されている。遺跡内には、水田と、農道、農業用の排水路が存在する。

2) グリッドの設定(図版3・4)

グリッドは東西南北軸にXY軸を合わせて設定した。基点は「1A」杭で、X座標193200.000、Y座標35400.000(世界測地系平面直角座標第8系)、緯度37°44′25.5069″、経度138°54′06.0042″である。基点に対し10m方眼の大グリッド、さらにその中を2m方眼の小グリッドに分割した。

名称について、大グリッドは「1A」杭を基点として東西方向にA～Jのアルファベット、南北方向を1～10のアラビア数字で示した。小グリッドは、大グリッド内を2m方眼で25のグリッドに分割し、1～25のアラビア数字を付けた(図版3・4)。表記は、「1A1」、「10J25」のように、「大グリッド小グリッド」としている。

調査区中央部付近のグリッド杭の座標は、6F杭(X座標:193150.000、Y座標:35450.000、経度37°44′23.8781″、経度138°54′08.0377″)、9D杭(X座標:193120.000、Y座標:35430.000、経度37°44′22.9077″、経度138°54′07.2156″)、9I杭(X座標:193120.000、Y座標:35480.000、経度37°44′22.9008″、経度138°54′09.2579″)であり、6F杭で座標北は真北に対し0度14分46秒東偏し、磁北は真北に対し8度43分西偏する。

3) 調査方法

試掘・確認調査では、中世の遺構確認のみ確認され、遺物包含層は既に削平されていると考えられた。また、試掘調査・確認調査では、最大で地表下約3mまで掘削しているが、中世以前の遺構・遺物は確認されていない。

①表土除去 試掘・確認調査から、遺構確認面(Ⅲa層)の標高がおおむね把握されていたため、I層(表土・耕作土・床土)・Ⅱ層(粘土質シルト)を遺物の出土に注意しながら、Ⅲ層上面まで重機(バックホウ)により除去した。また、湛水防止のため、表土除去と並行して調査区の周囲に土側溝を掘り2時のポンプで強制排水を行った。土側溝は幅30cm程の溝で、壁面を垂直に掘ると崩落する恐れがあったため、壁面下端から50cmの間隔をあげたうえで、人力によりV字の溝を掘削した。

②包含層調査・遺構検出・遺構調査 表土除去の後、ジョレン等を用いて人力で遺構の検出を行った。なお、調査区南側で東西方向に延びる溝状の攪乱については、攪乱下の遺構の有無を確認するため一部重機で掘削した。調査区北側の農道部分を中心に、試掘・確認調査では検出されなかった遺物包含層が確認された。以後、本発掘調査に関する文章では、遺物包含層をⅢ層、遺構確認面をⅣ層と表記する。遺構確認は、Ⅲ層上面及びⅣ層上面で行った。なお、Ⅲ層は南側では削平されていたため、Ⅳ層で検出した遺構についても、遺構の重複関係と出土遺物から時期を判断した。遺構覆土は調査区外へ搬出するか、攪乱を掘削した際の埋め戻しに用いた。井戸については、地山が砂質で湧水も多く崩落の危険があることから、人力での掘削は中止した。なお、井戸など一部遺

構については覆土を回収した後、土壌水洗によって微細遺物の抽出を行った。

③遺物の取り上げ 包含層出土遺物は基本的に小グリッド単位で取り上げた。遺構からの出土遺物は可能な限り層位・小グリッド単位で取り上げたほか、一部遺物についてはトータルステーションにより出土地点を記録した。

④遺構断面図・遺物微細図の作成 いずれも測量業者に委託して行い、調査員が現場で図面チェックを行った。平面図・各種測量点はトータルステーションを用いて取得した点群データを基に作成し、遺構断面図は点群データに加えて写真測量から作成した。それぞれCAD形式で作成した。

⑤写真撮影 層序・遺構・遺物出土状況などの写真撮影は、35mmリバーサルフィルム・モノクロフィルム、デジタルカメラを使用した。このうち特に重要と判断されるものについては6×7 版リバーサルフィルムを併用した。高所作業車を用いた高所からの俯瞰写真のほか、業者に委託して、無人航空機(ドローン)を用いた空撮も行った。

⑥自然科学分析 業者に委託し、土壌分析(植物珪酸体分析・花粉分析)、種実同定、樹種同定、放射線炭素年代測定を行った。

B 調査経過

令和4年7月15日から現場にて事前準備工事を開始した。はじめにプレハブと駐車場、排土搬出路のため盛砂・敷鉄板の設置作業を開始した。その後、プレハブ事務所・機材庫、仮設トイレ、発電機、器材類を順次搬入した。8月2日からは現場で各種準備を開始した。8月5日から重機による表土除去作業を行う。調査区北側から除去作業を行い、終わった範囲から作業員によって法面仕上げと排水路掘削を行った。8月22日に表土除去作業が完了した。なお、包含層が削平されている範囲ではこの段階で遺構や遺物が確認されたため、写真撮影と出土位置の計測を併せて行っている。表土除去後は人力により、遺構精査作業及び遺構掘削作業を行った。9月25日には遺構の精査が完了し、清掃後の10月1日に高所作業車を用いた高所撮影と、ドローンによる空中写真撮影を行った。なお、9月23日には現地説明会を開催し、68人の参加があった。各種の写真撮影と測量が完了したのち、崩落の危険から掘削を中止していた井戸について、10月3日から重機による掘削を行った。また、ほ場工事に伴う管路部分の工事のうち、掘削規模が小さく、本発掘調査対象外とした部分について管路設置工事があり、10月31日に職員が工事立会いし、記録と遺物の回収を行った。

最終的な発掘調査面積は、上端面積 948.76m²、下端面積 899.20m²である(工事立会い分面積は含まない)。

C 調査体制

令和4年度 本発掘調査

調査・整理期間	令和4年7月20日～令和5年3月15日
調査主体	新潟市教育委員会(教育長 井嶋規之)
所管課・事務局	新潟市文化スポーツ部歴史文化課 (課長: 遠藤和典 課長補佐: 廣野耕造 埋蔵文化財担当係長: 朝岡政康) 新潟市文化スポーツ部歴史文化課文化財センター (所長: 佐藤敏宏 主幹: 遠藤恭雄)
調査担当	遠藤恭雄 (新潟市文化財センター 主幹)
調査員	長谷川眞志 (新潟市文化財センター 主事) 武部喜充 (株式会社ノガミ)

第3節 整理作業

A 整理方法

1) 遺物

遺物量はコンテナ（内径54.5×33.6×10.0cm）にして7箱である。内訳は土器・陶磁器2箱、石製品2箱、木製品3箱である。遺物の整理作業にあたっては次の手順で行った。洗浄→注記→遺構及び包含層グリッドごとに重量計測→遺構出土遺物の器種別の重量・個体数計測→接合→報告書掲載遺物の抽出→実測図・観察表作成→トレース図作成→仮割付け作成→版下作成。このうちトレース図作成と版下作成は業者に委託してデジタル編集した。

2) 遺構

平面図を作成するにあたっては、測量業者に委託した1/20の遺構平面図と断面図との校正作業を行った。報告書掲載の1/40と1/80の遺構平面図と断面図は測量業者が作成したものである。

B 整理経過

発掘調査と並行して整理作業を行った。出土遺物の洗浄・注記・計測・接合・実測作業と写真・図面整理を行い、併せて測量業者に委託した遺構平面図と断面図の校正作業を行った。遺構平面図と断面図は測量業者作成のデジタルデータを用いた。調査員は遺物写真撮影、図版のレイアウト、報告書の執筆・編集にあたった。

C 整理体制

令和4年度

調査・整理期間	令和4年10月1日～令和5年3月31日
調査主体	新潟市教育委員会（教育長 井崎規之）
所管課・事務局	新潟市文化スポーツ歴史文化課 （課長：遠藤和典 課長補佐：廣野耕造 埋蔵文化財担当係長：朝岡政康） 新潟市文化スポーツ歴史文化課文化財センター （所長：佐藤敏宏 主幹：遠藤恭雄）
調査担当	遠藤恭雄（新潟市文化財センター 主幹）
調査員	長谷川眞志（新潟市文化財センター 主事） 武部喜充（株式会社ノガミ）

令和5年度

調査・整理期間	令和5年4月1日～令和6年3月31日
調査主体	新潟市教育委員会（教育長 井崎規之）
所管課・事務局	新潟市文化スポーツ歴史文化課 （課長：萬歳真紀 課長補佐：廣野耕造 埋蔵文化財担当係長：遠藤恭雄） 新潟市文化スポーツ歴史文化課文化財センター （所長：村山 明 主幹：朝岡政康）
調査担当	長谷川眞志（新潟市文化財センター 主事）

第IV章 遺 跡

第1節 概 要

寺裏遺跡は西蒲区馬堀地内に位置し、大通川右岸の沖積地内に形成された自然堤防である微高地上に立地する。現在、調査区は農道と水田として利用されており、標高は2.2～2.6mである。遺構は井戸が7基、土坑が2基、溝13条、性格不明遺構1基、耕作跡2枚、柱穴30基、掘立柱建物2棟、柱列1条が検出された。

出土遺物は発掘調査終了時でコンテナ（内寸54.5×33.6×10.0cm）換算で7箱となる。内訳は室町時代から江戸時代の土器・陶磁器2箱、石製品2箱、木製品3箱である。

第2節 基本層序

寺裏遺跡の基本層序は試掘調査の成果をもとに、I～V層まで分層した。以下に今回の本発掘調査での土層について記載した。なお、V層以下の層序についてはSE23の土層断面で簡単なが触れている。I層は農道造成に伴う盛土及び現水田耕作土である。II層は近代以降の旧水田耕作土である。III層は近世以前の旧水田耕作土で、中世～近世の遺物包含層で、珠洲焼養や石白が出土している。調査区の南側では大半が削平されている。III層上面で確認された遺構はSD19・22、P26・27・35・45で、近世以降の所産と考えられる。本書ではIII・IV層上面から掘り込まれている落ち込みを遺構と認定した。IV層は基盤層で、IVa層上面が中世～近世初期の遺構確認面である。また、IV層はV層に近いほど砂質の度合いが強くなる。V層は粘土質と砂質のシルトがラミナ状に堆積し、周辺河川の氾濫が何度もあったことが窺える。

- I a 層 黄灰色 (2.5YR5/1) シルト 粘性ややあり、しまりややあり。表土、現水田耕作土で未分解植物根多量を含む。試掘・確認調査のI層に相当する。
- I b 層 灰色 (5YR4/1) シルト 粘性ややあり、しまりあり。IV層灰黄色シルトをブロック状に多く含む。農道部分盛土。
- II a 層 褐灰色 (10YR4/1) 粘土質シルト 粘性ややあり、しまりあり。近代以降の旧水田耕作土。試掘・確認調査のI層に相当する。
- II b 層 褐灰色 (10YR4/1) シルト 粘性ややあり、しまりあり。褐鉄含む。近代以降の旧水田耕作土及び床土。確認調査では未確認。
- III a 層 黒褐色 (2.5Y3/1) 粘土質シルト 粘性ややあり、しまりややあり。中世～近世初期の遺物包含層。試掘・確認調査では未確認。旧水田耕作面と推定される。上面は江戸時代中期以降の遺構確認面である。
- III b 層 黄灰色 (2.5Y4/1) 粘土質シルト 粘性ややあり、しまりあり。中世～近世初期の遺物包含層。試掘・確認調査では未確認。上面は江戸時代中期以降の遺構確認面である。
- IV a 層 灰黄色 (2.5Y6/2) シルト 粘性ややあり、しまりややあり。褐鉄斑状に含み、下部砂質強くなる。上面が中世～近世初期の遺構確認面である。基盤層。試掘・確認調査のIII・IV層に相当する。
- IV b 層 灰黄褐色 (10YR6/2) 砂質シルト 粘性・しまり弱い。柱状の褐鉄を含む。試掘・確認調査のIII・IV層に相当する。
- V a 層 暗緑灰色 (7.5GY4/1) 砂 粘性なし、しまり弱い。10Y4/1 灰色シルトをラミナ状に多く含む。試掘・

確認調査のV層に相当する。

第3節 遺 構

A 遺構の概要

遺構は出土遺物と層位から、室町時代～江戸時代初期までのものと、江戸時代中期以降のものに分けられる。このうち、前者はIVa層を、後者はIIIa層を確認面としているが、削平によってIII層が失われ、IVa層を遺構確認面としながらも、江戸時代中期以降の遺物が出土した遺構も存在する。

B 遺構各説

1) 井 戸 (SE)

SE12 (図版5・10, 写真図版4)

8I11・16に位置する。IVa層上面で検出した。平面形は円形、断面形は箱状で、埋土は10層に分れる。主軸方向は、N-39°-Eである。規模は長軸1.42m、短軸1.31m、深さ1.59mを測る。遺物は炭が出土している。層位から室町時代から江戸時代初期の遺構である。

SE13 (図版5・10, 写真図版4)

8H25、8I21に位置する。IVa層上面で検出した。平面形は楕円形、断面形は箱状で、埋土は10層に分れる。主軸方向はN-74°-Wである。規模は長軸1.30m、短軸1.06m、深さ1.05mを測る。遺物は珠洲焼壺(1)、曲物底板(45)が出土した。室町時代から江戸時代初期の遺構である。

SE14 (図版5・10, 写真図版4)

8H18に位置する。IVa層上面で検出した。平面形は円形、断面形は箱状で、埋土は6層に分れる。主軸方向はN-88°-Wである。規模は長軸0.93m、短軸0.92m、深さ1.35mを測る。遺物は出土していないが、層位から室町時代から江戸時代初期の遺構である。

SE20 (図版5・10, 写真図版5)

8F11・12・16・17に位置し、西側は部分的に調査区外になる。IVa層上面で検出した。SD22に本遺構が切られる。平面形は楕円形と推定される。断面形は箱状で、埋土は7層に分れる。主軸方向はN-14°-Wである。規模は長軸1.10m、短軸0.94m、深さ1.50mを測る。遺物は出土していないが、層位から室町時代から江戸時代初期の遺構である。

SE23 (図版5・11, 写真図版5)

8E19に位置する。IVa層上面で検出したが、III層が削平されているため、本来の遺構確認面はより上位の可能性がある。平面形は円形、断面形は箱状で、埋土は9層に分れる。主軸方向はN-39°-Wである。規模は長軸1.00m、短軸0.89m、深さ1.41mを測る。遺物は3層から唐津焼椀・皿、柿木、肥前系磁器碗(2)が出土した。3層出土の磁器碗から江戸時代中期以降の遺構と判断したが、AMS法により最下層の炭化物から鎌倉時代の年代が得られたため、遺構の形成と3層の堆積の間に大きな時間差が存在する可能性も否定できない。

SE29 (図版5・9・11, 写真図版6)

8B25、9B4・5・9・10、9C1・6に位置する。IVa層上面で検出した。平面形は楕円形、断面形は箱状で、埋土は8層に分れる。主軸方向はN-86°-Eである。規模は長軸4.08m、短軸2.56m、深さ1.70mを測る。遺物は珠洲焼壺(3)、板材(46)が出土した。室町時代から江戸時代初期の遺構である。

SE41 (図版5・11, 写真図版6)

9F1に位置する。IVa層上面で検出した。SD25に本遺構が切られる。平面形は円形、断面形は箱状で、埋土は5層に分れる。主軸方向は、N-2°-Wである。規模は長軸1.00m、短軸0.92m、深さ1.56mを測る。遺物

は珠洲焼片口鉢(4)・壺(5)、石臼(38~41)が出土した。室町時代から江戸時代初期の遺構である。

2) 土 坑 (SK)

SK24 (図版8・12, 写真図版6)

8E18・19に位置する。IVa層上面で検出した。平面形は円形、断面形は箱状で、埋土は3層に分れる。主軸方向は、N-3°-Wである。規模は長軸0.70m、短軸0.59m、深さ0.58mを測る。遺物は唐津焼皿が出土した。室町時代から江戸時代初期の遺構である。

SK32 (図版9・12, 写真図版7)

9C6に位置する。IVa層上面で検出した。現代の用水溝に切れ南半が失われている。平面形は円形と推定される。断面形は弧状で、埋土は2層に分れる。主軸方向は、N-86°-Wである。規模は長軸0.96m、短軸0.48m、深さ0.08mを測る。遺物は出土していないが、層位から室町時代から江戸時代初期の遺構である。

3) 溝 (SD)

SD1 (図版5・7, 写真図版7)

4F6・7・11・12・16・17・22, 5F2に位置し、両端が調査区外へ延びる。IVa層上面で検出した。断面形は台形状で埋土は2層に分れる。主軸方向はN-20°-Wである。検出した範囲での規模は長さ9.06m、幅0.90m、深さ0.28mを測る。SN2, SN5, SA46と重複し、いずれも本遺構と同時期で一体の遺構と考えられる。遺物は珠洲焼壺(6・7)が出土した。室町時代から江戸時代初期の遺構である。

SD8 (図版5・7, 写真図版7・8)

5F6・7・11・12・16・17・21・22, 6F2・7に位置する。IVa層上面で検出した。断面形は台形状である。主軸方向はN-24°-Wである。検出した範囲での規模は長さ8.68m、幅1.20m、深さ0.64mを測る。本遺構がSN5を切る。遺物は瀬戸美濃焼小壺(8)、珠洲焼片口鉢(9)が出土した。室町時代から江戸時代初期の遺構である。

SD9 (図版5・7・8・13, 写真図版7・9)

5F21・22, 6F1・2・6・7・12・17・22, 7F2・7・12・17・22, 8F7・12・13・18・23・24, 9F3・4・9・10・14・15に位置する。IIIa層上面で検出した。断面形は台形状で埋土は5層に分れる。走行方位が「く」の字状に緩やかに屈曲するため、主軸方向はN-11°-W, N-26°-Wである。検出した範囲での規模は長さ38.6m、幅1.24m、深さ0.40~0.78mを測る。本遺構がSN5, SD11・43を切る。遺物は珠洲焼片口鉢(31・32・33・35)、唐津焼(皿・椀・甕)、下駄、軽石、ガラス製薬瓶が出土したほか、ヒューム管等の沈下防止用と考えられる枠木が確認された。上部が農道部分の盛土工によって攪乱されている近代以降の遺構であり、遺物の多くは流れ込みと考えられる。

SD11 (図版5・7, 写真図版7)

6F6・11・16・17・22, 7F2・7・12に位置する。IVa層上面で検出した。断面形は半円状で埋土は単層である。主軸方向はN-15°-Wである。検出した範囲での規模は長さ10.4m、深さ0.11mを測る。SD9に切られる。遺物は出土していないが、層位から室町時代から江戸時代初期の遺構である。

SD16 (図版5・8・12, 写真図版8)

8G12・13・17・18・23・24, 9G3・4に位置する。IIIa層上面で検出した。断面形は弧状で埋土は2層に分れる。主軸方向はN-19°-Wである。検出した範囲での規模は長さ5.98m、幅1.66m、深さ0.17mを測る。本遺構がSD44を切る。遺物は出土していないが、層位から江戸時代中期以降の遺構である。

SD17 (図版7・11, 写真図版8)

8F15・20・25, 8G11・16・21, 9F5・10・15, 9G1・6・11に位置する。IIIb層上面で検出した。断面形は台形状で埋土は4層に分れる。主軸方向はN-3°-Wである。検出した範囲での規模は長さ10.6m、幅1.70m、深さ0.50mを測る。本遺構がSD44を切る。遺物は珠洲焼片口鉢(10)が出土した。層位から江戸時

代中期以降の遺構である。

SD19 (図版5・8・12, 写真図版8)

8F9・10・14・15・20・25, 9F5に位置する。Ⅲb層上面で検出した。直線的に延び、断面形は弧状、埋土は5層に分れる。主軸方向はN-4°-Wである。検出した範囲での規模は長さ8.60m、幅1.30m、深さ0.26mを測る。SD44を切る。遺物は唐津焼・皿、磁石、金属製の毛抜きが出土した。層位から江戸時代中期以降の遺構である。

SD22 (図版5・8・10・13, 写真図版9)

8F6・11・12・16・17・21・22, 9F2・3・7・8・13に位置する。Ⅲa層上面で検出した。断面形は半円状、埋土は2層に分れる。主軸方向はN-14°~23°-Wである。検出した範囲での規模は長さ12.16m、幅0.50m、深さ0.29mを測る。SE20を切る。ガラス製品が確認され、近代以降の遺構と考えられる。

SD25 (図版5・8・11・13, 写真図版6・8)

8E20・25, 8F16・21, 9E5, 9F1・2・6・7・11・12・13に位置する。Ⅲa層上面で検出した。断面形は台形状、埋土は3層に分れる。主軸方向が「く」の字に緩やかに屈曲するため、主軸方向はN-4°-W、N-32°-Wである。検出した範囲での規模は長さ10.20m、幅1.74m、深さ1.50mを測る。本遺構がSE41を切る。遺物は珠洲焼片口鉢(11・12)、唐津焼碗(17)・皿(13・16)・壺(14)、肥前系染付碗(15)・皿が出土した。江戸時代中期以降の遺構である。

SD30 (図版5・13, 写真図版9)

8B10, 8C6・16・17・18・22・23, 9C3・8・13に位置する。Ⅳa層上面で検出したが、Ⅲ層が削平されているため、本来の遺構確認面はより上位の可能性がある。断面形は台形状。走行が「く」の字に緩やかに屈曲するため、主軸方向はN-43°-WとN-3°-Wである。検出した範囲での規模は長さ10.15m、幅1.38m、深さ0.64mを測る。SX38を切る。遺物は珠洲焼甕(18)、肥前系染付碗が出土した。江戸時代中期以降の遺構である。

SD34 (図版5・12, 写真図版9)

9B6・7・12に位置する。Ⅳa層上面で検出したが、Ⅲ層が削平されているため、本来の遺構確認面はより上位の可能性がある。断面形は台形状、埋土は4層に分れる。走行が「く」の字状に強く屈曲するため、主軸方向はN-6°-WとN-80°-Wである。検出した範囲での規模は長さ3.54m、幅1.15m、深さ0.43mを測る。本跡の底面に樹皮が4~8cmの厚さで敷かれている。遺物は杭(47)と柵木(48)が出土した。江戸時代中期以降の遺構であると考えられる。

SD43 (図版5・8・13, 写真図版9・10)

8F13・14・18・19・23・24, 9F3・4・9・14に位置する。Ⅲb層上面で検出した。断面形は弧状、埋土は2層に分れる。主軸方向はN-10°-Wである。検出した範囲での規模は長さ10.92m、幅0.96m、深さ0.22mを測る。SD9に切られる。遺物は出土していないが、層位から江戸時代中期以降の遺構である。

SD44 (図版5・12, 写真図版8)

8G16・17に位置する。Ⅳa層上面で検出した。断面形は弧状、埋土は単層。主軸方向はN-19°-Wである。検出した範囲での規模は長さ9.40m、幅0.64m、深さ0.12mを測る。SD16・17に本遺構が切られる。遺物は出土していないが、層位から室町時代から江戸時代初期の遺構である。

4) 性格不明遺構(SX)

SX38 (図版5・13, 写真図版7)

8C18・19・22・23・24・25, 9C2・3・4に位置する。Ⅳa層上面で検出した。SD30に切られる。平面形は楕円形と推定され、断面形は台形状、埋土は5層に分れる。主軸方向はN-93°-Wである。規模は長軸4.56m、短軸3.20m、深さ0.30mを測る。遺物は唐津焼碗(20・21・23)・皿(22)、瀬戸美濃焼皿、磁石(43)、木皮が出土した。層位から室町時代から江戸時代初期の遺構である。

5) 耕作関連遺構 (SN)

SN2 (図版5・7, 写真図版10)

3F6・7・11・12・16・17・21・22, 4F1・2・6・7・12・17に位置する。IVa層上面で検出した。断面は凹凸状で、鋤込みか踏み抜きの痕跡とみられる。深さ0.20mを測る。SD1, SA46と重複し、いずれも本跡と同時期で一体の遺構と考えられる。遺物は瀬戸美濃焼香炉、種実が出土した。層位から室町時代から江戸時代初期の遺構である。

SN5 (図版5・7, 写真図版10)

4F21・22, 5F1・2・6・7・12・17, 6F2・7・12・17・22, 7F2・7に位置する。IVa層上面で検出した。断面は凹凸状で、鋤込みか踏み抜きの痕跡とみられる。埋土は3層に分れる。深さ0.29～0.32mを測る。SD8・9に本遺構が切られ、SD1とは同時期で一体の遺構である。遺物は出土していない。層位から室町時代から江戸時代初期の遺構である。

6) 柱 列 (SA)

SA46 (図版5・7, 写真図版10)

4F7・8・12・13・18・23に位置する。直線的に並ぶP68・P3・P69・P4により構成され、両端が調査区外へ延びる。IV層上面で検出した。柱穴断面はU字状、埋土は単層、主軸方向はN-64°-Wである。検出した範囲での規模は長さ4.65mである。柱穴の間隔はP4を起点として、南東から1.91m・1.00m・1.74mを測る。SD1, SN2と重複し、いずれも本遺構と同時期で一体の遺構とみられる。遺物は出土していない。室町時代から江戸時代初期の遺構である。

P4 (図版7)

4F17・22に位置する。IVa層上面で検出した。柱列SA46を構成するピットである。平面形は円形、断面形はU字状、埋土は単層である。主軸方向はN-7°-Eである。規模は長軸0.30m、短軸0.30m、深さ0.25mを測る。遺物は出土していない。室町時代から江戸時代初期の遺構である。

7) 掘立柱建物 (SB)

SB15 (図版5・14, 写真図版10)

8G14・15・20, 8H7・8・11・12・13・16・17グリッドに位置し、調査区外の北側に延びる。IV層上面で検出した。P63・P59・P60・P61・P64・P62の6基により構成され、現状では桁行3間×梁間1間以上の側柱建物である。桁行5.27m、梁間2.50mで、東西を主軸とする棟方位はN-71°-W、面積は不明である。

柱穴の間隔はP63-P59が2.50m、P59-P60が0.68m、P60-P61が3.26m、P61-P64が0.80m、P64-P62が0.53mを測る。SB66と位置的には重複するが、切り合いがなく前後関係は不明である。遺物はP59から柱根が出土している。層位から室町時代から江戸時代初期の遺構である。

SB66 (図版5・14, 写真図版10)

8G14・15・20, 8H7・8・11・12・13・16グリッドに位置し、大半が調査区外の北側に延びるとみられる。IV層上面で検出した。P54・P55・P56・P53・P50の5基により構成され、現状では桁行3間×梁間1間以上の側柱建物である。桁行6.10m、梁間2.60mで、東西を主軸とする棟方位はN-68°-W、面積は不明である。

柱穴の間隔はP54-P55が2.60m、P55-P56が2.20m、P56-P53が1.75m、P53-P50が2.15mを測る。SB15と位置的には重複するが、切り合いがなく前後関係は不明である。遺物は出土していない。層位から室町時代から江戸時代初期の遺構である。

8) 柱 穴 (P)

P18 (図版8・15, 写真図版9)

8G11に位置する。調査区壁面で検出され、IVa層上面を遺構確認面とする。遺構精査前に設けた土側溝に壊され、平面の形状は不明である。断面形はU字状、埋土は2層に分れる。深さ0.4mを測る。遺物は出土して

いないが、層位から室町時代から江戸時代初期の遺構である。

P26 (図版 15, 写真図版 11)

8G12に位置する。Ⅲa層上面で検出した。平面形は楕円形、断面形はU字状、埋土は2層に分れる。主軸方向はN-30°-Eである。規模は長軸0.65m、幅0.52m、深さ0.37mを測る。遺物は出土していないが、層位から江戸時代中期以降の遺構である。

P27 (図版 15, 写真図版 11)

8G12に位置する。Ⅲa層上面で検出した。平面形は楕円形、断面形はU字状、埋土は6層に分れる。主軸方向は、N-21°-Eである。規模は長軸1.13m、短軸0.80m、深さ0.79mを測る。遺物は肥前系染付碗が出土している。江戸時代中期以降の遺構である。

P35 (図版 15, 写真図版 11)

8G17・22に位置する。Ⅲa層上面で検出した。P45を切る。平面形は円形、断面形はU字状、埋土は2層に分れる。主軸方向はN-71°-Eである。規模は長軸0.73m、短軸0.64m、深さ0.59mを測る。遺物は珠洲焼甕、瀬戸美濃焼皿、唐津焼皿が出土している。層位から江戸時代中期以降の遺構である。

P36 (図版 15, 写真図版 11)

8D19に位置する。Ⅲa層上面で検出した。平面形は楕円形、断面形は台形状、埋土は3層。主軸方向は、N-80°-Eである。規模は長軸0.56m、短軸0.28m、深さ0.28mを測る。遺物は珠洲焼甕が出土している。層位から江戸時代中期以降の遺構である。

P39 (図版 15, 写真図版 11)

8E16に位置する。Ⅳa層上面で検出した。平面形は円形、断面形はU字状、埋土は4層である。主軸方向はN-34°-Wである。規模は長軸0.42m、短軸0.35m、深さ0.37mを測る。遺物は出土していないが、層位から室町時代から江戸時代初期の遺構である。

P40 (図版 15, 写真図版 11)

8D20に位置する。Ⅳa層上面で検出した。平面形は楕円形、断面形はU字状、埋土は1層である。主軸方向はN-38°-Eである。規模は長軸0.22m、短軸0.21m、深さ0.13mを測る。遺物は出土していないが、層位から室町時代から江戸時代初期の遺構である。

P45 (図版 15, 写真図版 11)

8G22に位置する。Ⅳa層上面で検出した。P35に本遺構が切られる。平面形は円形と推定される。断面形はU字状、埋土は3層である。主軸方向はN-70°-Eである。規模は長軸0.45m、短軸0.36m、深さ0.12mを測る。遺物は出土していないが、層位から室町時代から江戸時代初期の遺構である。

第V章 遺 物

第1節 概 要

寺裏遺跡の調査では中世から近世以降の遺物が出土した。遺物総量はコンテナ換算で7箱である。内訳は土器・陶磁器2箱、石製品2箱、木製品3箱である。このほか種実等の自然遺物が出土している。本節では土器・陶磁器、石製品、木製品の順に項を設け、各項では非掲載分を含んだ概要を述べた後、掲載遺物について観察表に記載されない点を中心に個別に記述した。

第2節 土器・陶磁器

本発掘調査・工事立会で出土した中世から近世の土器・陶磁器の総破片数は81点である。大多数を陶器が占めており、産地別では珠洲焼25点、肥前系陶器（唐津）45点、瀬戸・美濃焼4点、越前焼1点を数える。

珠洲焼は本発掘調査（以下略）で壺4点、甕8点、片口鉢12点を、工事立会で片口鉢1点を確認した。甕の体部など時期を特定できない破片が多いもの、片口鉢や壺については珠洲Ⅳ・Ⅵ期に比定される（吉岡1994）。

肥前系陶器は皿14点、碗27点、壺2点、甕2点を確認した。肥前Ⅰ-1・Ⅰ-2・Ⅱ期（九州近世陶磁学会編2000）に比定されるものがある一方、より新しい時期のものも含まれる。

瀬戸・美濃焼は小壺1点、香炉1点、皿2点を確認した。時期はいずれも古瀬戸後期様式（藤澤2008）に比定される。

磁器は3点出土しており、いずれも近世の所産である。

土器・陶磁器は遺構出土、包含層出土に大別し、遺構出土は遺構別、包含層出土は産地別に記述した。またSD9は出土遺物から近現代の所産と考えられる。そのためSD9から出土した土器・陶磁器は遺構に伴わない包含層出土として扱った。

1) 遺構出土土器・陶磁器（図版16 写真図版12）

SE13（図版16 写真図版12）

珠洲焼甕（1）を図化した。体部の破片資料である。

SE23（図版16 写真図版12）

肥前系磁器碗（2）を図化した。高台まで施軸されている。18世紀の所産である。

SE29（図版16 写真図版12）

珠洲焼壺（3）を図化した。ロク口成形による壺R種の肩部である。珠洲Ⅴ期以前と考える。

SE41（図版16 写真図版12）

珠洲焼片口鉢（4）、同壺（5）を図化した。4の底部内面は使用による摩耗が著しい。底部外面に静止糸切りの痕が残るほか、イネ科植物の葉体の圧痕が複数観察できる。体部下半にはとり上げ時の指頭痕が凹んで残っている。5は壺R種の肩部である。珠洲Ⅴ期以前と考える。

SD1（図版16 写真図版12）

珠洲焼壺（6・7）を図化した。いずれも壺R種で、6は体部上半、7は頸部である。いずれも珠洲Ⅴ期以前と考える。

SDB（図版16 写真図版12）

瀬戸・美濃焼小壺（8）、珠洲焼片口鉢（9）を図化した。8は肩の張りが強く、頸部が直立し口縁端部が尖る。

内外面に灰軸が施軸されており、古瀬戸後期様式に比定される。9の口縁形態は肥大せず直線的な形状で、端部は外傾した方頭である。b5類に相当し、珠洲Ⅳ₁期と考えられる。10や31に比べ精緻な胎土である。

SD17 (図版16 写真図版12)

珠洲焼片口鉢(10)を図化した。口縁形態は外側に屈曲した口縁内端に約2cmの面を取り、櫛描波状文が施される。e9類に相当し、珠洲Ⅵ期と考えられる。

SD25 (図版16 写真図版12)

珠洲焼片口鉢(11・12)、肥前系陶器皿(13・16)、同碗(17)、同壺(14)、肥前系磁器椀(15)を図化した。11・12は体部の破片資料で、内面に卸目が見られる。13・16は共に端反形の皿である。13の見込みには胎土目が見られ、肥前Ⅰ-2期に比定される。14は体部外面上半に鉄軸が施される。内面には同心円状の当て具痕が見られ、肥前Ⅰ~Ⅱ期のものである。15は見込みにコンニャク印判と二重網目文が描かれる。18世紀の所産である。

SD30 (図版16 写真図版12)

珠洲焼甕(18)を図化した。体部の破片資料である。

SN2 (図版16 写真図版12)

瀬戸・美濃焼香炉(19)を図化した。袴腰形香炉の底部で、底面に三足が付くものと考えられる。

SX38 (図版16 写真図版12)

肥前系陶器椀(20・21・23)、同皿(22)を図化した。20は体部下半に稜を持って立ち上がる器形で、畳付けに砂床の砂が付着していることから肥前Ⅰ-1期と考えられる。22の畳付けには胎土目が三か所残っていることから肥前Ⅰ-2期と考えられる。23は高台部にも施軸されており、肥前Ⅱ期以降と考えられる。

P35 (図版16 写真図版12)

珠洲焼甕(24)を図化した。体部の破片資料である。

2) 包含層出土土器・陶磁器 (図版16・17 写真図版12・13)

瀬戸・美濃焼皿(25)、珠洲焼甕(26~30)、同片口鉢(31~37)を図化した。25は内外面に灰軸が施されているが、風化が著しく剥落している箇所も見られる。28~30の外面は平行タタキ目で綾杉状に叩く。29の割口には漆継ぎの痕跡が見られる。31は外側に屈曲した口縁内端に面を取り、櫛描波状文が施されるため、e9類・珠洲Ⅵ期と考えられる。32の口縁形態は方頭である。注口部を作る際に強く押さええた部位のため歪んでおり、本来の口縁端部の傾斜は不明である。b5類またはb6類であり、珠洲Ⅳ₁期と考えられる。

第3節 石製品

石製品の総個体数は13点である。内訳は本調査で石臼5点、砥石7点、工事立会で石臼1点を数える。中世~近世の遺構出土の石臼4点、砥石2点を図化した。

SE41 (図版17 写真図版13)

石臼(38~41)を図化した。いずれも別個体の上臼である。破片状態で出土しており、意図的に打ち欠かれた後井戸に投棄されたと考えられる。38・39の使用面には比熱による煤が付着しているが、打ち欠かれた箇所には付着しておらず、打ち欠く前に被熱したことが想定される。SE41は珠洲焼(4・5)が出土しており、室町時代の遺物と考えられる。

SD19 (図版18 写真図版13)

砥石(42)を図化した。表裏二面が砥面となる中砥石である。SD19の層位から江戸時代中期以降の遺物と考えられる。

SX38 (図版 18 写真図版 13)

砥石 (43) を図化した。砥面が四面の中砥石である。SX38 は肥前1期の陶器 (20・22) が出土しており江戸時代初期の遺物と考えられる。

第4節 木製品

木製品の総点数は16点を数える。内訳は木柱1点、曲物底板1点、下駄1点 (近現代の所産)、残りは用途不明の部材である。中世～近世の遺構出土の木柱1点、曲物底板1点、部材3点を図化した。

P59 (図版 18 写真図版 14)

木柱 (44) を図化した。掘立柱建物の柱と考えられ、上部にほぞ穴が見られる。

SE13 (図版 18 写真図版 14)

曲物底板 (45) を図化した。SE13 は珠洲焼 (1) が出土しており、室町時代の遺物と考えられる。

SE29 (図版 18 写真図版 14)

部材 (46) を図化した。板状で端部には穿孔、側面には目釘痕が見られる。SE29 は珠洲焼 (3) が出土しており、室町時代の遺物と考えられる。

SD34 (図版 18 写真図版 14)

部材 (47・48) を図化した。47 は角材で、ほぞ穴が4か所開けられる。48 は手箕等の枠木の可能性がある。

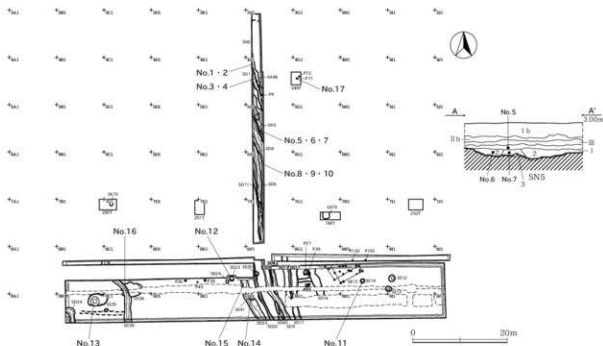
第VI章 自然科学分析

株式会社古環境研究所

第1節 自然科学分析の概要

新潟市西蒲区馬堀に所在する寺裏遺跡の発掘調査では、中世の井戸や建物跡のほかには水田跡と溝が検出されている。

今回の分析調査では、井戸跡より出土した種実について、当時の植生と植物利用を検討するために種実同定を、また出土した木柱について、用材選択を検討するために樹種同定を実施する。また、これらを対象に放射性炭素年代測定を行い、遺構の構築年代を検討する。さらに、検出された耕作関連遺構における稲作の検証を目的にプラント・オパール分析を実施する。



第7図 寺裏遺跡 自然科学分析サンプル採取地点

第6表 寺裏遺跡自然科学分析一覧表

試料No.	名称	グリッド	遺構名	層位	プラントオパール分析	年代測定	樹種同定	種実同定	時代	備考
1	北区西壁土壌サンプル	4F-1	SN2	1	1				室町～江戸期	耕作土（畦畔たるみ部）
2	北区西壁土壌サンプル	4F-1	SN2	1	1				室町～江戸期	畦畔盛土
3	北区西壁土壌サンプル	4F-11	SD1	1	1				室町～江戸期	
4	北区西壁土壌サンプル	4F-11	SD1	2	1				室町～江戸期	
5	北区東壁土壌サンプル	6F-12	SN5	1	1				室町～江戸期	耕作土
6	北区東壁土壌サンプル	6F-12	SN5	2	1				室町～江戸期	耕作土（畦畔たるみ部）
7	北区東壁土壌サンプル	6F-12	SN5	3	1				室町～江戸期	畦畔盛土
8	北区東壁土壌サンプル	6F-2	SD8	2	1				室町～江戸期	
9	北区東壁土壌サンプル	6F-2	SD8	3	1				室町～江戸期	
10	北区東壁土壌サンプル	6F-2	SD8	5	1				室町～江戸期	
11	南区井戸土壌サンプル	8H-18	SE14	7				1	室町～江戸期	
12	南区井戸土壌サンプル	8E-19	SE23	9		1		1	室町～江戸期	
13	南区井戸土壌サンプル	9B-4・5	SE29	8				1	室町～江戸期	
14	南区井戸土壌サンプル	9F1	SE41	5		1		1	室町～江戸期	
15	南区溝状遺構サンプル	8E-20・25	SD25	3		1			室町～江戸期	
16	南区不明遺構サンプル	8C-22・23	SD38	2		1			室町～江戸期	
17	本社	249T	P68			1	1	1	室町～江戸期	確認調査249T P68
小計					10	5	1	4		

第2節 種実同定

A 試料

試料は、SE14 6層(試料No.11)、SE23 9層(試料No.12)、SE29 8層(試料No.13)、SE41 5層(試料No.14)から検出された種実である。各遺構の時期は、室町時代から江戸時代初期及び江戸時代中期以降である。

B 方法

試料を肉眼及び双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴および現生標本との対比によって同定を行う。結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示す。

C 結果

(1) 分類群

樹木5、草本12の計17分類群が同定された。学名、和名および粒数を第7表に示し、主要な分類群の写真を第8図に示す。以下に同定根拠となる形態的特徴、写真に示したものの形状(サイズ)を記載する。

〔樹木〕

・ハンノキ属 *Alnus* 果実 カバノキ科

種子は広卵形や卵形、倒卵形を呈し、扁平である。暗褐色で表面は平滑である。

・クマシデ属 *Carpinus* 果実(完形・破片) カバノキ科

灰褐色で狭卵形や狭楕円形を呈し、光沢はない。この分類群は表面に縦の筋があることで同定するが、ここでは保存状態が悪く縦の筋の確認が出来なかったため、属レベルまでの同定に留まる。

・スモモ *Prunus salicina* Lindley 核バラ科

淡褐色で楕円形を呈し、側面に縦合線が走る。表面には不明瞭で微細な凸凹がある。断面は扁平である。

・サンショウ *Zanthoxylum piperitum* DC. 種子 ミカン科

黒色で楕円形を呈し、側面に短いへそがある。表面には網目模様がある。

・アカメガシワ *Mallotus japonicus* Muell. et Arg. 種子(破片) トウダイグサ科

黒色で球形を呈し、「Y」字状の

へそがある。表面にはいぼ状の突起が密に分布する。

〔草本〕

・ミクリ属 *Sparganium* 果実

ミクリ科

淡褐色で側面観は倒卵形、上面観は円形。表面には縦方向に5本程度の筋が走る。

・イネ *Oryza sativa* L. 穎・果実

イネ科

穎は茶褐色で扁平楕円形を呈し、下端に枝梗が残る。表面には微細な顆粒状突起がある。未炭化である。

果実は炭化しているため黒色であ

第7表 寺裏遺跡における種実同定結果

学名	和名	部位	備考	SE14	SE23	SE29	SE41
				6層	9層	8層	5層
Arbor	樹木						
<i>Alnus</i>	ハンノキ属	果実		1			
<i>Carpinus</i>	クマシデ属	果実			1		
		果実 破片			1		
		核			1		
<i>Prunus salicina</i> Lindley	スモモ	核					
<i>Zanthoxylum piperitum</i> DC.	サンショウ	種子				1	
<i>Mallotus japonicus</i> Muell. et Arg.	アカメガシワ	種子 破片			2		2
Herb	草本						
<i>Sparganium</i>	ミクリ属	果実					2
<i>Oryza sativa</i> L.	イネ	穎	炭化		1		
	イネ	果実	炭化	5		1	1
<i>Holcus vulgare</i> L.	ホオムギ	果実		7			3
<i>Commelina</i>	ツクシ属	種子					
<i>Consubia sativa</i> L.	アサ	種子		1	6		1
	アサ	種子 破片		6	164	2	20
<i>Chamaecrista</i>	カワラケツメイ属	種子			1		
<i>Aeschynomene indica</i>	クサネム	豆果					6
<i>Vigna</i>	ササゲ属	子葉	炭化	1	1		1
	ササゲ属	果実	炭化				
	マメ科	子葉	炭化		1		
		子葉					
<i>Solanum melongena</i> L.	ナス	種子		1			1
<i>Cucumis melo</i> L.	ウリ類	種子		2	41	4	3
	ウリ類	種子 破片		5	32	4	2
<i>Lagenaria siceraria</i> Standl.	ヒョウタン類	種子		1		11	
	ヒョウタン類	種子 破片					1
Unknown seeds	不明種実		炭化		2		
Total	合計			18	259	30	35

る。長楕円形を呈し、胚の部分がくぼむ。表面には数本の筋が走る。

・オオムギ *Hordeum vulgare* L. 果実 イネ科

炭化しているため黒色で、楕円形を呈す。腹部の端には胚がある。背面には縦に一本の溝がある。側面の形は曲率が大きく、胚と胚乳との接する輪郭線は山形である。

・ツクサ属 *Commelina* 種子 ツクサ科

茶褐色で楕円形を呈し、一端は切形である。表面には「一」字状のヘソがあり、切形の端まで達する。一側面にくぼんだ発芽孔がある。

・アサ *Cannabis sativa* L. 種子 (完形・破片) クワ科

茶褐色で広卵形を呈す。一端には円形のヘソ部がある。

・カワラケツメイ属 *Chamaecrista* 種子

黒褐色でほぼ菱形を呈し、ヘソは形に添わず長細く斜めに走る。

・クサネム *Aeschynomene indica* L. 豆果 (破片) マメ科

豆果は広線形を呈し、4～8個の小節果からなる。無毛である。

・ササゲ属 *Vigna* 子葉 (完形・破片) マメ科

炭化しているため黒色で楕円形を呈す。ヘソは縦に細長い。

・マメ科 Leguminosae 子葉 マメ科

子葉は炭化しているため黒色で楕円形を呈し、縦に一本の溝状の筋が走る。

・ナス *Solanum melongera* L. 種子 ナス科

黄褐色で扁平楕円形を呈し、一端にくぼんだヘソがある。表面には網目模様がある。

・ウリ類 *Cucumis melo* L. 種子 ウリ科

淡褐色～黄褐色で長楕円形を呈し、上端は

「ハ」字状にくぼむ。

・ヒョウタン類 *Lagenaria siceraria* Standl.

種子・果皮 ウリ科

淡褐色で楕円形を呈す。上端にはヘソと発芽孔があり、下端は波うつ切形を呈す。表面には縦に2本の低い稜が走る。

・不明炭化種実 Unknown seeds

黒色で卵形を呈す。表面には縞状の模様がある。

炭化しているため変形が著しい。

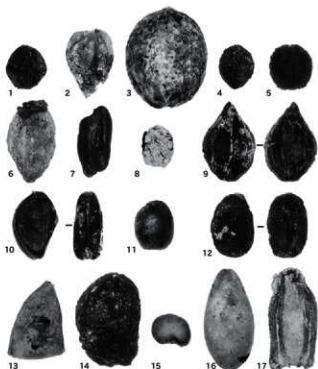
(2) 種実群集の特徴

1) 8H-18 グリッド出土 SE14 6層

樹木種実のハンノキ属果実1個、草本種実のアサ種子1個、破片6個、ササゲ属炭化子葉1個、ナス種子1個、ウリ類種子2個、破片5個、ヒョウタン類種子1個が同定された。

2) 8E-19 グリッド出土 SE23 9層

樹木種実のクマシデ属果実1個、破片1個、スモモ核1個、サンショウ種子1個、アカメガシワ種子破片2個、草本種実のイネ類1個、炭化果実5個、オオムギ炭化果実1個、ツク



1 ハンノキ属果実 (SE14) 2 クマシデ属果実 (SE23) 3 スモモ核 (SE23) 4 サンショウ種子 (SE23) 5 アカメガシワ種子破片 (SE23) 6 ミクリ属果実 (SE29) 7 イネ果実 (SE23) 8 ツクサ属種子 (SE23) 9 オオムギ果実 (SE23) 10 カワラケツメイシ属種子 (SE23) 11 アサ種子破片 (SE23) 12 ササゲ属子葉 (SE23) 13 マメ科豆果 (SE29) 14 マメ科子葉 (SE23) 15 ナス種子 (SE14) 16 ウリ類種子 (SE41) 17 ヒョウタン類種子 (SE29)

第8図 寺裏遺跡の種実

クサ属種子 1 個、アサ種子 6 個、破片 154 個、カワラケツメイ属種子 1 個、ササゲ属炭化子葉 1 個、破片 1 個、マメ科炭化子葉 1 個、ウリ類種子 41 個、破片 32 個、不明炭化種実 2 個が同定された。

3) 9B-4・5 グリッド出土 SE29 8 層

草本種実のミクリ属果実 2 個、イネ炭化果実 1 個、アサ種子破片 2 個、クサネム豆果破片 6 個、ウリ類種子 4 個、破片 4 個、ヒョウタン類種子 11 個が同定された。

4) 8F-16 グリッド出土 SE41 5 層

樹木種実のカメガシワ種子破片 2 個、草本種実のイネ炭化果実 1 個、オオムギ炭化果実 3 個、アサ種子 1 個、破片 20 個、ササゲ属炭化子葉 1 個、ナス種子 1 個、ウリ類種子 3 個、破片 2 個、ヒョウタン類種子破片 1 個が同定された。

D 推定される植生と農耕

1) 8H-18 グリッド出土 SE14 6 層

ハンノキ属は温帯を中心に広く分布し、沢泊いなどの湿原や水湿のある低地に生育し、ときには湿地林を形成する樹木である。アサは一年草で、生育速度と環境順応性が高い栽培植物である。ササゲ属、ナス、ウリ類、ヒョウタン類は畑作の栽培植物であり食用になる。

2) 8E-19 グリッド出土 SE23 9 層

クマシデ属は日当たりの良い山地に自生する落葉高木である。スモモは落葉広葉樹で食用になる栽培植物で、薬用にもなる有用植物である。サンショウ、アカメガシワは山地、丘陵などの林内から人為環境に接する林縁に自生する落葉低木であり、二次林種でもある。また、サンショウは有用植物でもあり食用にもなる。イネは水田の作物であり、オオムギは畑作物である。アサ、ササゲ属、ウリ類は一年草の栽培植物で、種実も食用になり、アサは茎皮から繊維が採取される。ツユクサ属、カワラケツメイ属、マメ科は人里周辺に生育する雑草であり、日当たりの良い乾燥地に生育する。以上から、食用となる栽培植物のスモモ、イネ、オオムギ、アサ、ササゲ属、ウリ類が同定された。またカワラケツメイ属はお茶または薬用に利用される有用植物である。

3) 9B-4・5 グリッド出土 SE29 8 層

イネは水田の作物であり、ミクリ属は水生植物で、クサネムは一年草の水田雑草である。アサは一年草であり、生育速度と環境順応性が高く、ウリ類、ヒョウタン類は栽培植物であり畑作物である。イネ、アサ、ウリ類、ヒョウタン類は食用になる栽培植物である。

4) 8F-16 グリッド出土 SE41 5 層

アカメガシワは林内から人為環境に接する林縁に自生する落葉低木であり、二次林種でもある。イネは水田の作物で、オオムギ、ササゲ属、ナス、ウリ類、ヒョウタン類は畑作物である。アサは一年草であり、生育速度と環境順応性が高く、種実も食用になり茎皮から繊維がとれる。栽培植物はイネ、オオムギ、アサ、ササゲ属、ナス、ウリ類、ヒョウタン類が同定され、いずれも食用になる。

寺裏遺跡において種実同定を行った結果、樹木種実のハンノキ属、クマシデ属、スモモ、サンショウ、アカメガシワ、草本種実のミクリ属、イネ、オオムギ、ツユクサ属、アサ、カワラケツメイ属、クサネム、ササゲ属、マメ科、ナス、ウリ類、ヒョウタン類が同定された。栽培植物が多いことが特徴であり、水田作物のイネをはじめ、オオムギ、アサ、カワラケツメイ属、ササゲ属、ナス、ウリ類、ヒョウタン類の畑作物が同定された。樹木ではスモモが栽培植物であり、他のハンノキ属、クマシデ属、サンショウ、アカメガシワの樹木は、集落など人為地周辺に多く、周辺に生育していたと推定される。カワラケツメイ属は薬用やお茶になり、サンショウは食用になり、ともに有用植物である。アサが特徴的に多く、生育速度と環境順応性が高く、繊維用植物として利用される。種子は食用にもなり、実が油がとれる有用植物であり、様々な形で用いられる作物である。これらの種実も周囲に生育する植物が井戸へ落ちたものか、食用とした後に投棄されたものと考えられる。

第3節 樹種同定

A 試料

試料は、確認調査 249T-P71 から出土した木柱 1 点（試料 No.17）である。

B 分析方法

剃刀を用いて、木片から横断面（木口）、放射断面（柀目）、接線断面（板目）の 3 断面について徒手切片を作製する。切片をガム・クロラール（抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入してプレパラートとする。プレパラートは、生物顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類（分類群）を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、鳥地・伊東 [1982] や Wheeler 他 [1998] を参考にする。

C 結果

木柱は広葉樹のハンノキ属ハンノキ亜属に同定された（第 8 表）。

解剖学的特徴等を以下に記す。

・ハンノキ属ハンノキ亜属 *Alnus subgen. Alnus* カバノキ科

散孔材。道管は単独または 2～4 個が放射方向に複合して散在し、

年輪界に向かって径を漸減させる。道管の穿孔板は階段穿孔板、壁孔は対列状となる。放射組織は同性、単列、1～20 細胞高。横断面において集合放射組織が確認できる。

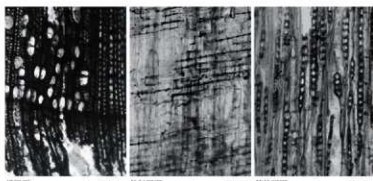
D 考察

室町時代～江戸時代初頭とされる、確認調査 249 トレンチ P71 の木柱は、広葉樹のハンノキ亜属であった。ハンノキ亜属は、河畔や湿地に生育する落葉高木であり、木材は比較的重硬な部類に入る。本地域では、河畔林として普通に見られる樹木であることから、周囲に生育し、入手が容易な樹木を柱材として利用した可能性がある。

なお、伊東・山田 [2012] のデータベースによれば、中世の柱材にハンノキ亜属が利用された例は、砂山中道下遺跡（旧加治川村）で報告された例がある。

第 8 表 樹種同定結果

試料 No.	グリッド・地点	遺構	遺種	時期	樹種
17	確認調査 249 トレンチ	P71	木柱	室町～江戸期	ハンノキ属ハンノキ亜属



横断面 0.1mm 放射断面 0.1mm 接線断面 0.1mm
ハンノキ属ハンノキ亜属 確認調査 249 トレンチ P71 出土木柱 (試料 No.17)

第 9 図 寺裏遺跡の木材

第4節 放射性炭素年代測定

A 試 料

試料は、SE23の最下層(9)から出土した炭化物(試料No.12)、SE41の最下層(5)から出土した炭化物(試料No.14)、SD25の3層から出土した木片(試料No.15)、SX38の2層から出土した木片(試料No.16)、249トレンチのP71から出土した木柱(試料No.17)の計5点である。

B 方 法

1) 化学処理

試料の付着物を取り除いた後、酸-アルカリ-酸(AAA: Acid Alkali Acid)処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常1mol/ℓ(1M)の塩酸(HCl)を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム(NaOH)水溶液を用い、0.001Mから1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1Mに達した時には「AAA」、1M未満の場合は「AaA」と結果表に記載する。

化学処理後の試料を燃焼させ、二酸化炭素(CO₂)を発生させ、真空ラインで二酸化炭素を精製する。精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト(C)を生成させる。グラファイトを内径1mmのコールドハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

2) 測定

加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置を使用し、¹⁴Cの計数、¹³C濃度(¹³C/¹²C)、¹⁴C濃度(¹⁴C/¹²C)の測定を行う。測定では、米国国立標準局(NIST)から提供されたシュウ酸(HOX II)を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

3) 算 出

- (1) $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の¹³C濃度(¹³C/¹²C)を測定し、基準試料からのずれを千分偏差(‰)で表した値である。
- (2) ¹⁴C年代(Libby Age: yrBP)は、過去の大気中¹⁴C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年(0yrBP)として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期(5568年)を使用する(Stuiver and Polach, 1977)。¹⁴C年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を結果表に示す。¹⁴C年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、¹⁴C年代の誤差($\pm 1\sigma$)は、試料の¹⁴C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

(3) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の¹⁴C濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の¹⁴C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、¹⁴C年代に対応する較正曲線上の暦年較正年代であり、1標準偏差(1 σ =68.3%)あるいは2標準偏差(2 σ =95.4%)で表示される。グラフの縦軸が¹⁴C年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下1桁を丸めない¹⁴C年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal20 データベース(Reimer et al., 2020)を用い、OxCalv4.4 較正プログラム(Bronk/Ramsey, 2009)を使用する。暦年較正年代は、¹⁴C年代に基づいて較正(calibrate)された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」・「cal BP」という単位で表される。

第9表 測定試料及び処理

試料番号	試料の詳細	試料	前処理・調整	測定法
12	RE-19 SE23 最下層	炭化物	酸-アルカリ-酸処理 (AAA)	AMS
14	RF-16 SE41 最下層	炭化物	酸-アルカリ-酸処理 (AAA)	AMS
15	RF-16 SD25 3層	木片	酸-アルカリ-酸処理 (AAA)	AMS
16	RC-22・23 SX38 2層	木片	酸-アルカリ-酸処理 (AaA)	AMS
17	249T P71	木柱	酸-アルカリ-酸処理 (AAA)	AMS

※AMS (Accelerator Mass Spectrometry) は加速器質量分析法

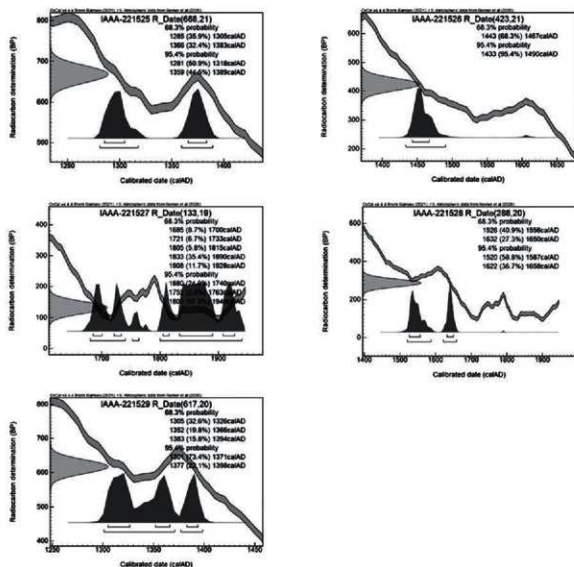
C 結 果

加速器質量分析法 (AMS: Accelerator Mass Spectrometry) によって得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行い、放射性炭素 (^{14}C) 年代および暦年代 (較正年代) を算出した。第 10 表にこれらの結果を示し、第 10 図に暦年較正結果 (較正曲線) を示す。

第 10 表 測定結果

試料番号 (IAAA)	測定 No.	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (年 BP)	^{14}C 年代 (年 BP)	暦年代 (西暦)	
					1 σ (68.3%確率)	2 σ (95.4%確率)
12	221825	-23.61 \pm 0.15	668 \pm 21	670 \pm 20	1285-1305 cal AD (35.9%)	1281-1318 cal AD (50.9%)
					1366-1383 cal AD (32.4%)	1359-1389 cal AD (44.5%)
					1443-1467 cal AD (68.3%)	1433-1490 cal AD (95.4%)
15	221827	-25.07 \pm 0.16	133 \pm 19	130 \pm 20	1685-1700 cal AD (8.7%) *	1680-1740 cal AD (24.9%) *
					1721-1733 cal AD (6.7%) *	1752-1763 cal AD (2.6%) *
					1805-1815 cal AD (5.8%) *	1800-1940 cal AD (67.9%) *
					1832-1890 cal AD (38.4%) *	
					1908-1928 cal AD (11.7%) *	
16	221828	-23.19 \pm 0.20	286 \pm 20	290 \pm 20	1526-1556 cal AD (40.9%)	1520-1587 cal AD (58.8%)
					1632-1650 cal AD (27.3%)	1622-1658 cal AD (36.7%)
17	221829	-26.16 \pm 0.18	617 \pm 20	620 \pm 20	1305-1326 cal AD (32.6%)	1301-1371 cal AD (73.4%)
					1352-1366 cal AD (19.8%)	1377-1398 cal AD (32.1%)
					1383-1394 cal AD (15.8%)	

BP: Before Present (Present), BC: 紀元前, AD: 紀元

* 試料の ^{14}C 年代に対応する較正年代が、当該較正曲線で較正可能な範囲を超える新しい年代となる可能性がある。

第 10 図 暦年較正年代図

D 所 見

寺裏遺跡で出土した遺構の構築年代を検討する目的で、加速器質量分析法 (AMS) による放射性炭素年代測定を行った。その結果、SE23の最下層 (9) から出土した炭化物 (試料 No.12) は、補正 ^{14}C 年代が 670 ± 20 年 BP、 2σ の暦年較正值は $1281 \text{ cal AD} \sim 1318 \text{ cal AD}$ (50.9%)、 $1359 \text{ cal AD} \sim 1389 \text{ cal AD}$ (44.5%) であった。SE41の最下層 (5) から出土した炭化物 (試料 No.14) は、補正 ^{14}C 年代が 420 ± 20 年 BP、 2σ の暦年較正值は $1433 \text{ cal AD} \sim 1490 \text{ cal AD}$ (95.4%) であった。SD25の3層から出土した木片 (試料 No.15) は、補正 ^{14}C 年代が 130 ± 20 年 BP、 2σ の暦年較正值は $1680 \text{ cal AD} \sim 1740 \text{ cal AD}$ (24.9%)、 $1752 \text{ cal AD} \sim 1763 \text{ cal AD}$ (2.6%)、 $1800 \text{ cal AD} \sim 1940 \text{ cal AD}$ (67.9%) であった。SX38の2層から出土した木片 (試料 No.16) は、補正 ^{14}C 年代が 290 ± 20 年 BP、 2σ の暦年較正值は $1520 \text{ cal AD} \sim 1587 \text{ cal AD}$ (58.8%)、 $1622 \text{ cal AD} \sim 1658 \text{ cal AD}$ (36.7%) であった。249 トレンチ P71 から出土した木柱 (試料 No.17) は、補正 ^{14}C 年代が 620 ± 20 年 BP、 2σ の暦年較正值は $1301 \text{ cal AD} \sim 1371 \text{ cal AD}$ (73.4%)、 $1377 \text{ cal AD} \sim 1398 \text{ cal AD}$ (22.1%) であった。

第5節 プラント・オパール分析

A 試 料

試料は、調査区北側西壁の SN2 の1層 (耕作土 (畦畔たるみ部) : 試料 No.1、畦畔盛土 : 試料 No.2) の2点、SD1 の1層・2層 (ともに埋土 : 試料 No.3・4) の2点、北区東可部の SN5 の1層 (耕作土 : 試料 No.5)・2層 (耕作土 (畦畔たるみ部) : 試料 No.6)・3層 (畦畔盛土 : 試料 No.7) の3点、SD8 の2・3・5層 (いずれも埋土 : 試料 No.8・9・10) の3点の計10試料である。

B 方 法

プラント・オパール分析は、ガラスビーズ法 [藤原 1976] を用いて、次の手順で行った。

- 1) 土壌サンプルの表面約 5mm を除去後、新鮮な部分の土壌約 10cm^3 を採量する。
- 2) 採量した試料を 105°C で 24 時間乾燥 (絶乾) する。
- 3) 試料約 1g に直径約 $40\mu\text{m}$ のガラスビーズを約 0.02g 添加する。
- 4) 電気炉灰化法 ($550^\circ\text{C} \cdot 6$ 時間) により脱有機物処理を行う。
- 5) 超音波水中照射 ($300\text{W} \cdot 42\text{kHz} \cdot 10$ 分間) により分散する。
- 6) 沈底法により $20\mu\text{m}$ 以下の微粒子を除去する。
- 7) 封入剤 (オイキット) 中に分散してプレパラートを作製する。

検鏡は、おもにイネ科植物の機細胞 (葉身にのみ形成される) に由来するプラント・オパールを同定の対象とし、400 倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が 500 以上になるまで行った。これはほぼプレパラート 1 枚分の精査に相当する。検鏡結果は、計数値を試料 1g 中のプラント・オパール個数 (試料 1g あたりのガラスビーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスビーズの個数の比率を乗じて求める) に換算して示した。また、おもな分類群については、この値に試料の仮比重 (ここでは 1.0 と仮定) と各植物の換算係数 (機細胞珪酸体 1 個あたりの植物体乾重、単位: 10^{-5}g) を乗じて、単位面積で層厚 1cm あたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の葉茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる。各分類群の換算係数は、イネ (赤米) は 2.94 (種実重は 1.03)、ヨシ属 (ヨシ) は 6.31、スキ属 (スキ) は 1.24、メダケ節は 1.16、ネザサ節は 0.48、チマキザサ節は 0.75、ミヤコザサ節は 0.30 である (杉山 2000)。

C 結 果

(1) 分類群

検出されたプラント・オパールの分類群は以下のとおりである。これらについて定量を行い、その結果を第11表、第11図に示した。また、主要な分類群の顕微鏡写真を第12図に示す。

[イネ科]

イネ、キビ族型、ヨシ属、ススキ属型

[イネ科・タケ亜科]

メダケ節型（メダケ属メダケ節・ヤダケ属など）、チマキザサ節型（ササ属チマキザサ節・チシマザサ節など）、ミヤコザサ節型（ササ属ミヤコザサ節など）、その他タケ亜科

[イネ科-その他]

未分類等

(樹木起源)

その他

[プラント・オパール以外]

海綿骨針

第11表 寺裏遺跡におけるプラント・オパール分析結果

検出密度 (単位: ×100個/g)		調査区北側西壁		調査区北側西壁		調査区北側東壁			調査区北側東壁		
地点・試料	学名	SN2-1層	SN2-1層	SD1-1層	SD1-2層	SN5-1層	SN5-2層	SN5-3層	SD8-2層	SD8-3層	SD8-5層
イネ科	Gramineae										
イネ	<i>Oryza sativa</i>	27	5	7	11	21			12		7
キビ族型	Panicaceae type	4							4		
ヨシ属	<i>Phragmites</i>	23	3	18	26	48	11		34	43	20
ススキ属型	<i>Miscanthus type</i>	4	3	4	3	3			7	8	3
タケ亜科	Bambusoideae										
メダケ節型	<i>Pteridaceae</i> sect. <i>Alpinocolanum</i>	4		4	5				3		3
チマキザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.	23	8	30	32	7			3		8
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Craxioidi</i>	4	5	7	3	3	3		4		5
その他	Others	4	3	7	5	3					3
その他のイネ科	Others										
未分類等	Others	35	27	26	26	41	19	41	36	27	23
樹木起源	Arboresal										
その他	Others									4	
海綿骨針	Spongiae	4		4				3	3		
総数	Total	128	64	103	111	126	33	91	111	60	70
おこな分類群の推定生産量 (単位: kg/m ² ・cm) : 試料の仮比重を1.0と仮定して算出											
イネ	<i>Oryza sativa</i>	0.79	0.16	0.21	0.32	0.62			0.35		0.21
ヨシ属	<i>Phragmites</i>	1.45	0.19	1.14	1.64	3.03	0.69		2.15	2.71	0.88
ススキ属型	<i>Miscanthus type</i>	0.05	0.04	0.05	0.04	0.04			0.09	0.10	0.09
メダケ節型	<i>Pteridaceae</i> sect. <i>Alpinocolanum</i>	0.05		0.05	0.06				0.03		0.03
チマキザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.	0.17	0.06	0.23	0.24	0.05			0.02		0.06
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Craxioidi</i>	0.01	0.02	0.02	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.02

(2) プラント・オパールの検出状況

以下に、プラント・オパールの検出状況を記す。なお、植物珪酸体の生産量は植物種によって相違することから、検出密度の評価は分類群によって異なる。

1) 北区西壁

SN2の1層のうちの耕作土(畦畔たるに部)では、イネが比較的高い密度で検出されている。また、ヨシ属も比較的高い密度である。他の分類群では、キビ族型、ススキ属型、メダケ節型、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型が検出されている。チマキザサ節型がやや高い密度である以外は、いずれも低い密度である。プラント・オパール以外に海綿骨針が微量で検出されている。同畦畔盛土では、イネ、ヨシ属、ススキ属型、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型が検出されているが、いずれも低密度である。

SD1の1層(埋土)と2層(埋土)は、どちらも同様のプラント・オパール組成である。すなわち、イネ、ヨシ属、ススキ属型、メダケ節型、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型が検出されている。ヨシ属とチマキザサ節型がやや

高い密度である以外は、いずれも低密度である。なお、1層ではプラント・オパールの他に、海綿骨針が微量で検出されている。

2) 北区東壁

SN5の1層(耕作土)では、イネが比較的高い密度である。また、ヨシ属は高い密度である。他には、ススキ属型、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型が検出されているが、いずれも低い密度である。同2層(耕作土(畦畔たるみ部))では、ヨシ属とミヤコザサ節型が少量検出されている。プラント・オパール以外に、海綿骨針が微量で検出されている。同3層(畦畔盛土)では、ヨシ属が高い密度である。他にススキ属型、メダケ節型、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型が少量検出されている。海綿骨針が微量で認められる。

SD8の2層(埋土)では、ヨシ属が高い密度である。イネが検出されているがやや低い密度である。他には、キビ族型、ススキ属型、ミヤコザサ節型、樹木起源(その他)が検出されているが、いずれも低い密度である。3層(埋土)では、ヨシ属がやや低い密度で検出されており、他にススキ属型、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型が少量検出されている。5層(埋土)では、ヨシ属がやや高い密度で検出されている。イネが検出されているが低い密度である。他にススキ属型、メダケ節型、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型が検出されているが、いずれも低密度である。

D 考 察

(1) 稲作の可能性について

プラント・オパール分析において稲作跡の探査や検証を行う際には、通常、イネのプラント・オパールが試料1gあたり5,000個以上の密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している(杉山2000)。ただし、最近の調査では密度が3,000個/g程度あるいはそれ未満であっても水田遺構が検出された事例が報告されていることから、ここでは判断の基準を3,000個/gとして検討を行う。

北区西壁のSN2の1層では、耕作土(畦畔たるみ部)と畦畔盛土でイネが検出されている。前者ではプラント・オパール密度が2,700個/gであり、稲作跡の判断基準値に近い値である。このことから、当該層が水田耕作土であることがプラント・オパール分析からも追認される。また、SD1の1層と2層からもイネが少量ながら検出されていることから、SD1は水田に伴う溝であったと判断される。

北区東壁のSN5の1層では、イネが2,100個/gの密度で検出されている。発掘調査において水田遺構が確認されていることから、プラント・オパール分析においても当該層で稲作が行われていたことが確認される。なお、プラント・オパール密度が低いことの要因として、1) 稲作が行われた期間が短かった、2) 稲の生産性が低かった、3) 試料採取箇所が畦畔など耕作面でなかった、4) 土層の堆積速度が速かった、5) 洪水等で耕作土の一部が流出した、などが考えられる。SD8の2層と5層からもイネが少量検出されていることから、SD1同様、SD8も水田に伴う溝であったと考えられる。

(2) プラント・オパール分析から推定される植生と環境

ヨシ属やマコモ属は湿地あるいは湿ったところに生育し、ススキ属やタケ亜科は比較的乾いたところに生育する。そこで、これらの植物の産出状況を検討することで、堆積当時の環境(乾燥・湿潤)を推定することができる。これらを参考にして、稲作の可能性と周辺環境について検討する。

北区SN2の1層、SD1の1層と2層、北区東壁のSN5の1層と3層、SD8の2層と5層では、ヨシ属が高い密度ないしは比較的高い密度であり、主な分類群の推定生産量とみるといずれもヨシ属が優勢となっている。このことから、当該層の時期の調査地近辺は、湿地もしくは湿地に近い環境であったと推定される。なお、やや離れたところの乾いた場所にはササ類(おもにチマキザサ節)が生育していたと推定される。

第七章 総 括

第1節 寺裏遺跡の時代

寺裏遺跡では出土遺物と層位から、遺構の時期を以下の2つに分けた。

① 室町時代から江戸時代初期の遺構

層位的に、IVa層を遺構確認面とし、IIIa層に被覆されている遺構である。

SE13、SE29、SE41、SD1、SD8、SN2については、珠洲VI期〔吉岡1994〕と考えられる珠洲焼、古瀬戸後期様式の瀬戸・美濃焼が出土している。SN5、SA46は、遺物は出土していないものの、SD1、SN2と一体の遺構と考えられるため同時期と判断した。

SK24・SX38については、肥前系陶器が出土している。SK24出土の陶器皿は細片のため時期不明であるが、SX38で出土した陶器椀が肥前I-1期及びII期、陶器皿が肥前I-2期〔九州近世陶磁学会編2000〕と考えられるため、16世紀末～17世紀初頭、安土・桃山時代から江戸時代初期に相当する時期に比定される。

これらの遺構は遺物の時期差が認められるが、発掘調査では層位を分けることが困難であったため、室町時代から江戸時代初期という幅のある表現で一括してとらえた。

SE12、SE14、SE20、SD11、SK32、SB15、SB66の遺構は、遺物は出土していないため時期を明確にできないが、IVa層を遺構確認面とし、層位的にIIIa層に被覆されている点から、同様の時代とした。

なお、SD8では13世紀末～14世紀初頭と考えられる、珠洲IV1期の片口鉢が1層から出土しているが、埋没過程での流れ込みと考えた。

② 江戸時代中期以降の遺構

SE23、SD25、SD30、P27については、肥前系磁器椀や同染付椀が出土している点から、江戸時代中期以降の遺構と考えられる。層位的に見た場合、これらの遺構はIIIa・b層を遺構確認面としている。IVa層から掘りこまれている①の遺構とは時期差が明確であり、出土遺物の時期とも矛盾しない。

SD17、SD19、P35、P36については、珠洲焼、瀬戸・美濃焼、唐津焼などが出土し、遺物の点では①か②に該当するが、層位的に見た場合にIIIa・b層が遺構確認面であるため、遺物は流れ込みととらえ、この時代の遺構と判断した。

出土遺物については、一定数が出土した珠洲焼と瀬戸・美濃焼、肥前系陶器には時期差がみられる。すなわち、珠洲焼は吉岡氏の編年では片口鉢はIV1期（13世紀末～14世紀初頭）及びV期（14世紀末～15世紀前半）、VI期（15世紀後半）であり、壺R種はV期以前（～15世紀半ば）と考えられる。瀬戸・美濃焼の小壺・袴腰型香炉は古瀬戸後期様式（14世紀末～15世紀末）である。肥前系陶器は、肥前I-1・I-2期（16世紀末～17世紀初頭）とII期（17世紀前半）に相当する。この場合、15世紀末～16世紀後半の遺物が希薄である。県内では珠洲焼の衰退（15～16世紀）に前後して越前焼が上越から下越まで流通する〔加藤2019〕が、寺裏遺跡では越前焼が1点出土するのみである。これらから、寺裏遺跡は室町時代～江戸時代初期に断続的に営まれた遺跡であると考えられる。また、流れこみと考えられるものの、珠洲IV1期の遺物が出土しているため、調査区周辺に鎌倉時代の遺構が存在している可能性も否定できない。

第2節 寺裏遺跡の位置づけ

次に、寺裏遺跡の性格について、周辺の旧地形や自然科学分析の結果を踏まえて考察する。

遺跡の性格 今回の調査で検出された建物跡はSB15とSB66の2棟のみであり、調査区外へ延びるため、その規模や性格は不明である。ただし、礎基数の井戸が確認された点から、近傍に集落があったと想定される。確認調査においては、試掘坑168Tで直径18cmの柱根が出土している点からも、集落の中心は今回の調査地の北東側にあった可能性がある。また、水田跡と考えられる耕作関連遺構や溝跡が検出され、プラント・オーバー分析からイネが一定数確認されていることから、当遺跡は稲作を行っていた農村の跡であると考えられる。ただし、出土品からはこの集落の生業を示すような遺物は確認されなかった。また、井戸覆土の種実同定では、イネだけでなくウリのような食用植物や、繊維を利用するアサなどが検出された。畑跡が検出されていないため栽培の有無は不明だが、様々な植物を利用していた様子がうかがえる。

遺跡の存続時期 この農村の存続時期については前節で述べたように、室町時代から江戸時代初期にかけて断続的に営まれたものである。ただし、鎌倉時代末期の遺物も存在することから、室町時代以前にも集落が営まれていた可能性は否定できない。江戸時代中期以降とした遺構は井戸1基、溝3条、掘立柱建物や櫓を構成しない単独のピット3基であり、この時期には集落としては機能していなかったと考えられる。

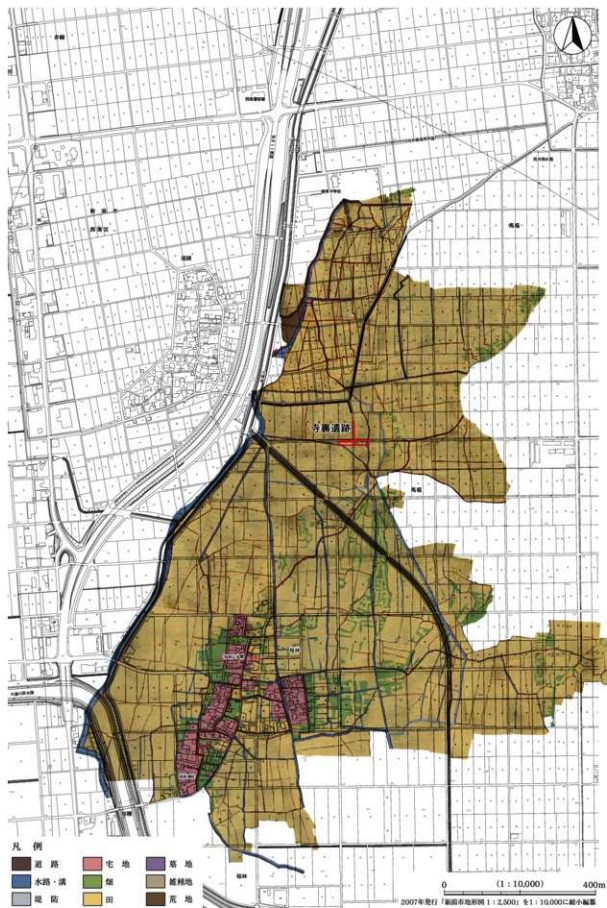
江戸時代中期以降の古地図（第II章第4図）を参照すると、周辺の村落名は概ね現在の集落に比定できる。当遺跡の周囲には北から時計回りに河井・馬廬・並木・桜林・高橋・湯頭などの集落が描かれ、いずれも現在まで残っている村である。ところが、これらの地名に囲まれた部分にほかの村名は描かれていない。このことから、江戸時代中期以降、寺裏遺跡に相当する場所には（絵図に描かれるだけの）村は存在していなかったと考えられる。

自然科学分析では、放射性炭素年代測定法での 2σ の数値で、層位と出土遺物から室町時代としたSE41で西暦1433-1490年、江戸時代初期としたSX38で1520-1587年・1622-1658年というおおよそ整合する結果が得られた。また、確認調査249T出土の木柱は1301-1371年・1379-1398年という数値を示した。¹⁴Cから得られる年代は伐採時またはそれ以前の年代を示すことを考えると、近接する試掘調査168Tで出土した珠洲V・VI期（1380-1470）の片口鉢に対して、矛盾の無い結果と言える。一方、江戸時代中期以降としたSE23では大きく遡る1281-1318年・1359-1389年という数値が、SD25では1680-1940年の極めて最近の年代が出ている。これらの自然科学分析の結果は、遺跡の時代が室町時代及び江戸時代初期ということを支しつつ、その前後の鎌倉時代や江戸時代中期以降にも何らかの活動があったことを否定しないものである。

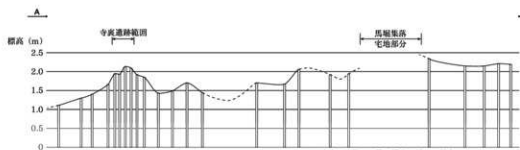
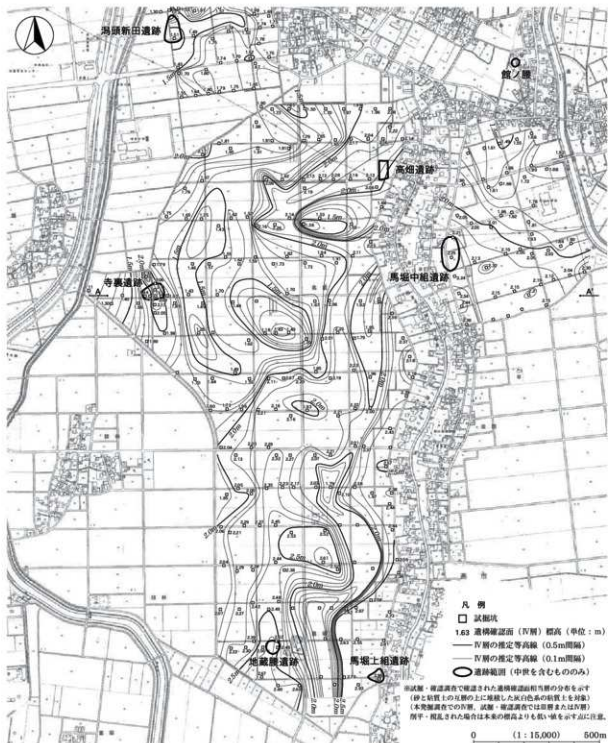
遺跡の立地 明治20年代の更正図をもとに、当時の土地利用を色別で示したものが第13図である。周辺は多くが黄色の水田で示されているが、寺裏遺跡南西の桜林集落から遺跡近傍まで、畑地が散在している範囲を確認できる。水利を考えると、畑地の散在する範囲は、周囲の水田よりも小高い地形だったと推測できるが、寺裏遺跡に相当する部分は水田として描かれている。（なお、第13図の調査区南西端に描かれている南東から西に向かう水路は、その形状から、江戸時代中期以降の溝状遺構としたSD30である可能性がある。）

また、遺跡周辺の試掘・確認調査で、寺裏遺跡の遺構確認面であるIV層（Ⅱa・Ⅱb層）が確認された標高を図示したものが、第14図である。寺裏遺跡に相当する部分は、自然堤防状の細長い高まりに位置している。既知の遺跡（地蔵殿・馬廬上組・馬廬中組）の立地も、おおむねIV層が2.0m以上の範囲に相当している。これらの点から、寺裏遺跡は桜林集落から北東に延びる帯状の微高地に位置していたが、明治20年代にはすでに水田として利用されていたと推測できる。桜林集落や寺裏遺跡の西には飛落川が南から北へと流れているため、この微高地は飛落川によって形成された自然堤防に相当すると考えられる。

写真図版1の1948年の米軍撮影の空中写真では、遺跡周囲の水田が畦畔で囲まれた単一色であるのに対して、遺跡の南東や南西、桜林集落の南側には直線状の溝が水田内に多数見られる。これは堀上田の溝と考えられる。



第13図 寺裏遺跡周辺の旧土地利用図



第14図 寺裏遺跡周辺のIV層分布図

堀上田は低湿な土地の水田を水害から守るため、耕作面積が小さくなるものの、田地の一部を掘削して溝状となし、その掘削土を盛土として耕地を嵩上げするものである。この堀上田が写っている範囲は周囲より低い土地だったと見なせる。寺裏遺跡の位置は堀上田が見られず、撮影当ても小高かったと推測できる。

以上から、寺裏遺跡は自然堤防上に立地する遺跡と考えられる。この微高地は、地盤沈下によるものか、堆積作用によるものかは不明だが、遺跡の形成当時と比べ、次第に周囲との比高差が小さくなり、微高地としての面影は残しつつも水田として利用されてきたと推測する。最終的に昭和の耕地整理を経て、現在の平坦な地形へ変化していった。その過程の一部が明治期の更正図や、戦後の米軍撮影の空中写真に写っているのだと判断した。

まとめ 今回の発掘調査で確認した遺構・遺物から、寺裏遺跡は室町時代～江戸時代初期に断続的に営まれた集落跡と考えられる。また、旧土地利用図や米軍写真、試掘・確認調査の結果から、本遺跡は遺跡南方の桜林集落から南北に延びる飛落川の自然堤防上に立地すると考えられる。

ただし、寺裏遺跡の消長は周囲の集落とは異なっている。文献上では、中世から馬堀や漆山、和納といった地名が登場し、これらの村は現在まで続いている。桜林は江戸中期以降に馬堀の枝郷として成立し、同じく現在まで続いている。ところが寺裏遺跡は、桜林と同じ自然堤防上の遺跡と考えられ、和納や馬堀と同時期には営まれていた村であるにも関わらず、江戸時代以降に姿を消してしまう。

中世から近世にかけて、文献や絵図に登場し現在まで継続する集落がある一方で、立地はほとんど変わらないにも関わらず、姿を消した遺跡の存在が今明らかになった。周囲の集落と異なる経緯をたどった理由は現段階では不明である。今後同種の調査事例が増加し、現在の我々の生活環境がどのように形成され、その過程で自然環境の変化や歴史的な事象が村落や居住域の変遷とどう相関し合ったのかを明らかにするため、本遺跡の調査成果がその一助となれば幸いである。

引用・参考文献

- ア 赤沢貞真はか 1987 『第二章 国人と守護 第一節 南北朝の動乱』『新潟県史』通史編二 新潟県
- 池 享はか 1987 『第四章 戦国の世 第一節 上杉謙信』『新潟県史』通史編二 新潟県
- 石川智紀はか 2008 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第179集 日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書XXV 中部北道跡 桜林道跡II』新潟県教育委員会
- 遠藤藤雄はか 2016 『島瀬瀬道跡 第5次調査 - 県営ほ場整備事業（経営体育成型）巻東町地区に伴う島瀬瀬道跡第5次発掘調査報告書-』新潟県教育委員会
- 大橋康二 1988 『考古学ライブラリー 55 肥前陶磁』ニュー・サイエンス社
- 荻野正博はか 1986 『第六章 荘園と武士 第二節 荘園と国衙領』『新潟県史』通史編一 新潟県
- 小田由美子はか 2006 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第169集 一般国道8号見附バイパス関係発掘調査報告書 坂井道跡』新潟県教育委員会
- カ 加藤 学はか 2006 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第159集 北陸新幹線関係発掘調査報告書IV 用言寺道跡I』新潟県教育委員会
- 加藤由美子 2019 『第6章 中世 第2節 遺物 第5項 中世陶器』『新潟県の考古学III』新潟県考古学会
- 金子 達 1994 『第二編 古代・中世 第二章 武持の時代』『巻町史』通史編上 巻町
- 亀井 功・本間則久 1994 『第三編 近世 第二章 農水産業の発達 第二節 新田開発の進展』『巻町史』通史編上 巻町
- 鴨井幸彦 2018 『新潟平野の地盤と防災』一般社団法人北陸地城づくり協会
- 川上貞雄はか 1984 『馬場屋敷道跡等発掘調査報告書』白根市教育委員会
- 川上貞雄はか 1997 『和納館道跡 発掘調査報告書』岩室村教育委員会
- 九州近世陶磁学会編 2000 『九州陶磁の編年 -九州近世陶磁学会10周年記念-』
- 小山正忠・竹原秀雄 1967 『新版標準土色帖』日本色研事業株式会社
- サ 坂井秀弥 1990 『IV章 三和村の旧地割と開発』『法花寺道跡(庚寺)他発掘調査報告書-三和村の道跡と開発史-』中頸城郡三和村教育委員会
- 佐藤賢次・中村義隆 1994 『第三編 近世 第一章 幕藩体制確立のもとに』『巻町史』通史編上 巻町
- 佐藤賢次・亀井 功 2003 『近世 第二章 近世の吉田の村々』『吉田町史通史編上巻』吉田町
- 佐藤友子はか 2012 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第238集 一般国道8号白根バイパス関係発掘調査報告書 小坂居付道跡』
- 品田高志はか 2001 『柏崎市埋蔵文化財調査報告書第38集 -新潟県柏崎市・柏崎町道跡発掘調査報告書- 柏崎町』柏崎市教育委員会
- 鈴木俊成はか 2008 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第178集 日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書XXIV 西部道跡V』新潟県教育委員会
- タ 高橋 保はか 2006 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第157集 日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書XIII 住吉道跡』新潟県教育委員会
- 田村 裕はか 1987 『第一章 鎌倉武士と荘園 第一節 鎌倉武士』『新潟県史』通史編二 新潟県
- 立木宏明はか 2013 『峰岡城山道跡 第2次調査 -城山屋内体育施設造成工事に伴う峰岡城山道跡第2次発掘調査報告書-』
- 立木宏明はか 2019 『赤館砂山道跡 第5次調査 -商業施設建設に伴う赤館砂山道跡第3次発掘調査報告書-』新潟県教育委員会
- 立木宏明はか 2021 『細池寺道上道跡X 第29・31次調査 -県営ほ場整備事業（担い手育成型）両新地区に伴う細池寺道上道跡第13・14次発掘調査報告書-』新潟県教育委員会
- ナ 新潟市国際文化歴史文化課 2007 『新・新潟市歴史双書2 新潟市の道跡』新潟市
- 新潟市史編さん委員会 1994 『新潟市史』資料編1 原始 古代 中世 新潟市
- 新潟市史編さん委員会 1995 『新潟市史』通史編1 原始 古代 中世 近世(上) 新潟市
- 新潟県史編さん委員会 1987 『新潟県史』通史編2 中世 新潟県
- ハ 本間敏則はか 2000a 『考古編 第1章 吉田町周辺の地形と道跡』『吉田町史』資料編1 吉田町
- 本間敏則はか 2000b 『考古編 第3章 道跡各節』『吉田町史』資料編1 吉田町

- 本間克成ほか 2003 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第126集 一般国道8号白根バイパス関係発掘調査報告書 浦通遺跡』新潟県教育委員会
- マ 前山精明ほか 2000 『考古編 第4章 吉田町周辺の遺跡』『吉田町史』資料編1 吉田町
巻町史編さん委員会 1988 『中世』『巻町史』資料編2 古代・中世・近世(1) 巻町
- 水沢幸一 1997 『中条町埋蔵文化財調査報告書 第13集 奥山荘城館遺跡調査報告書 第5集 史跡奥山荘城館遺跡「江上館跡」の環境整備事業に伴う発掘調査報告書 新潟県北蒲原郡中条町 江上館跡V』
- 水沢幸一 2012 『付編2 新潟市馬場屋敷遺跡 下層出土遺物(土器・陶磁器)について』『胎内市埋蔵文化財調査報告書 第23集 新潟県胎内市 市内遺跡V 下町・坊城遺跡16次 下町・坊城遺跡17次 駒込遺跡確認調査』胎内市教育委員会
- ヤ 山田邦明ほか 1987 『第二章 国人と守護 第二節 守護と国人』『新潟県史』通史編二 新潟県
吉岡康暢 1994 『中世須臾器の研究』吉川弘文館
- 第IV章**
- ア 伊東隆夫・山田昌久(編) 2012 『木の考古学 出土木製品用材データベース』海青社 444p
- カ 笠原安夫 1985 『日本雑草図説』養賢堂 494p
笠原安夫 1988 『作物および田畑雑草種類』『弥生文化の研究』第2巻 生業 雄山閣出版 131-139p
- サ 島地 謙・伊東隆夫 1982 『図説木材組織』地球社 176p
杉山真二 2000 『植物珪酸体(プラント・オパール)』『考古学と植物学』同成社 189-213p
杉山真二・藤原宏志 1986 『機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定 -古環境推定の基礎資料として-』『考古学と自然科学』19 69-84p
- ナ 中村俊夫 2000 『放射性炭素年代測定法の基礎』『日本先史時代の14C年代編集委員会編『日本先史時代の14C年代』日本第四紀学会 3-20p
- ハ 藤原宏志 1976 『プラント・オパール分析法の基礎的研究(1) -数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法-』『考古学と自然科学』9 15-29p
藤原宏志・杉山真二 1984 『プラント・オパール分析法の基礎的研究(5) -プラント・オパール分析による水田址の調査-』『考古学と自然科学』17 73-85p
- マ 南木睦彦 1991 『栽培植物』『古墳時代の研究』第4巻 生産と流通 I 雄山閣出版株式会社 165-174p
南木睦彦 1992 『低湿地遺跡の種実』『月刊考古学ジャーナル』No.355 ニューサイエンス社 18-22p
南木睦彦 1993 『葉・果実・種子』『日本第四紀学会編 第四紀試料分析法』東京大学出版会 276-283p
- B Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates, Radiocarbon, 51 (1), 337-360.
- R Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Haffidason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J. (2013) IntCal 13 and Marine 13 Radiocarbon Age Calibration Curves, 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55 (4), 1869-1887.
- W Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (編) (1998) 広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト、伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩(日本語監修)、海青社、122p。[Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification]、

別表1 遺構計画表 ()内は位置

国庫 No.	遺構 No.	遺構 類別	遺構 番号	ゾナコード	遺構関係	時代	建設 部位	柱礎の寸法		規模 (m)				平面	断面	壁土	基礎状況	出土遺物	備考			
								長	幅	上層	下層	柱礎 長	柱礎 幅							深度	埋高 埋込高 (m)	
8	4	SE	12	8H16		室町~江戸初期	Ea層	N-39°E	1.42	1.31	0.62	0.63	1.59	0.79	円形	基状	10	プロック状				
8	4	SE	13	8H15	8E21	室町~江戸初期	Ea層	N-74°W	1.30	1.06	0.51	0.54	1.05	1.30	円形	基状	10	プロック状	瓦、土器、土			
8	5	SE	14	8H18		室町~江戸初期	Ea層	N-88°W	0.93	0.92	0.56	0.63	1.35	1.06	円形	基状	7	プロック状	レンズ、 土器			
8	5	SE	20	8F11-12-16-17	<SD22	室町~江戸初期	Ea層	N-14°W	1.10	0.94	0.55	0.46	1.50	1.00	円形	基状	7	プロック状				
9	5	SE	23	8E19		江戸中期以降	Ea層	N-39°W	1.00	0.89	1.09	0.92	1.41	1.07	円形	基状	9	プロック状	土器、土	AMS測定 14 埋配		
9	6	SE	29	8K35, 9H4-5-9-10, 9C1-6		室町~江戸初期	Ea層	N-96°E	上層 4.08 中層 2.00	2.56	3.84	2.46	1.70	0.72	楕円形	基状	8	レンズ、 プロック状	土器、土			
10	6	SE	41	9D1	<SD25	室町~江戸初期	Ea層	N-2°W	1.00	0.92	0.62	0.63	1.56	0.76	円形	基状	5	プロック状	土器、土	AMS測定 15 埋配		
10	6	SK	24	8E18-19		室町~江戸初期	Ea層	N-3°W	0.70	0.59			0.58	1.73	楕円形	基状	3	プロック状				
10	7	SK	32	9C6		室町~江戸初期	Ea層	N-86°W	0.95	0.48	0.72	0.32	0.08	2.14	円形	変状	2	レンズ状				
6	7	SD	1	4F1-2-6-7-11-12-16-17-22, 5A6		室町~江戸初期	Ea層	N-20°W	0.66	0.90			0.50	0.70	2.16	-	台形状	3	レンズ状			
6	7	SD	8	6F6-11-12-16-17-22, 6F2	<SD5	室町~江戸初期	Ea層	N-4°W	0.68	1.20			0.20	0.64	1.68	-	台形状	4	レンズ状	土器、土		
6-7, 7-9	7-9	SD	9	6F1-2, 6F1-5-6-7-12-17-22, 7F2-7-12-17-22, 8F7-12-13-18	<SD11-43>	江戸中期以降	Ea層	N-11°W		1.24			0.70	0.40~ 0.78	1.96	-	台形状	5	レンズ状	土器、土		
6	7	SD	11	6F6-11-16-17-22, 7F7-12	<SD9	室町~江戸初期	Ea層	N-15°W	0.43				1.50	0.14	2.22	-	変状	3	レンズ状			
10	8	SD	16	8G12-13-17-18-23-24, 8G3-4	<SD44	江戸中期以降	Ea層	N-19°W	0.66				1.50	0.14	2.25	-	変状	3	レンズ状			
10	8	SD	17	8F15-20-25, 8G11-16-21	<SD44	室町~江戸初期	Eb層	N-3°W	0.60	1.70			0.10	0.50	1.95	-	台形状	4	レンズ状	土器、土		
10	8	SD	19	8F14-15-20-25, 8F5	<SD44	江戸中期以降	Eb層	N-4°W	0.60	1.30			0.96	0.22	2.78	-	変状	3	レンズ状	土器、土		
8-9	SD	22	8F1-12-16-17-21-22, 9F2-3-7-8-13	<SE20		江戸中期以降	Ea層	N-14° N-23°W	0.50				0.5	0.22		-	楕円形	円形	2	レンズ上	土器、土	
10	6-8	SD	25	8E20-25, 8F16-21-9E5, 9F1-2-6-7-11-12-13	<SE41	江戸中期以降	Ea層	N-4°W N-32°W	0.74				0.76	1.50	0.76	-	台形状	3	レンズ状	土器、土	AMS測定 17-19 埋配	
11	9	SD	30	8H10, 8C0, 8C16-17-18-21-22, 9C3-8-13	<SX38	江戸中期以降	Ea層	N-43°W	0.15	1.38			0.53	0.58	1.61	-	台形状	3	レンズ状	土器、土		
11	9	SD	34	9H6-7-11-12		江戸中期以降	Ea層	N-6°W	0.34	1.15			0.43	1.80	-	台形状	3	レンズ状	土器、土			
10	9	SD	43	8F13-14-18-19-23-24, 9F3-4-9-14	<SD9	江戸中期以降	Eb層	N-10°W	0.96				0.34	0.22	2.10	-	変状	2	レンズ状			
10	8	SD	44	8F19-20, 8G16-17	<SD16-17	室町~江戸初期	Ea層	N-19°W	0.40	0.64			0.43	0.12	2.30	-	変状	1	レンズ状			
11	10	SK	38	8C18-19-22-23-24-25, 8C2-3-4	<SD30	室町~江戸初期	Ea層	N-87°E	4.56	3.20			3.06	0.30	1.80	楕円形	台形状	5	本平状	土器、土	AMS測定 16 埋配	
6	10	SN	2	8F5-7-11-12-16-17-21-22, 4F1-2-6-7-12-17	<SD1, SA66>	室町~江戸初期	Ea層						0.20	2.23	-	円筒状	1	プロック状	土器、土			

別表 No.	写真 No.	製品 No.	出仕位置	種別	部材	仕様	法線 (cm)		塗料	内面	成形・文様・調整はさみ	残存率	備考
							口徑	底厚					
17	13	32	S359	6P17	Ⅰ 歐洲輪	白口鉢	歐洲	歐洲 (10YV6/1)	歐洲青藍	彫し目	口鉢部分方皿、口口鉢部分口鉢部	2/26	
17	13	33	S359	6P17	Ⅱ 歐洲輪	白口鉢	歐洲	歐洲 (2AY6/1)			底部中央		
17	13	34	S359	6P17	Ⅲ 歐洲輪	白口鉢	歐洲	歐洲 (2AY6/1)			底部中央		
17	13	35	S359	7P12	Ⅱ 歐洲輪	白口鉢	歐洲	歐洲 (5V4/1)			底部中央		
17	13	36	S359	7P17	Ⅱ 歐洲輪	白口鉢	歐洲	歐洲 (2AY6/1)			底部中央		
17	13	37	S359	8P19	Ⅱ 歐洲輪	白口鉢	歐洲	歐洲 (10YV6/1)			底部下腹		

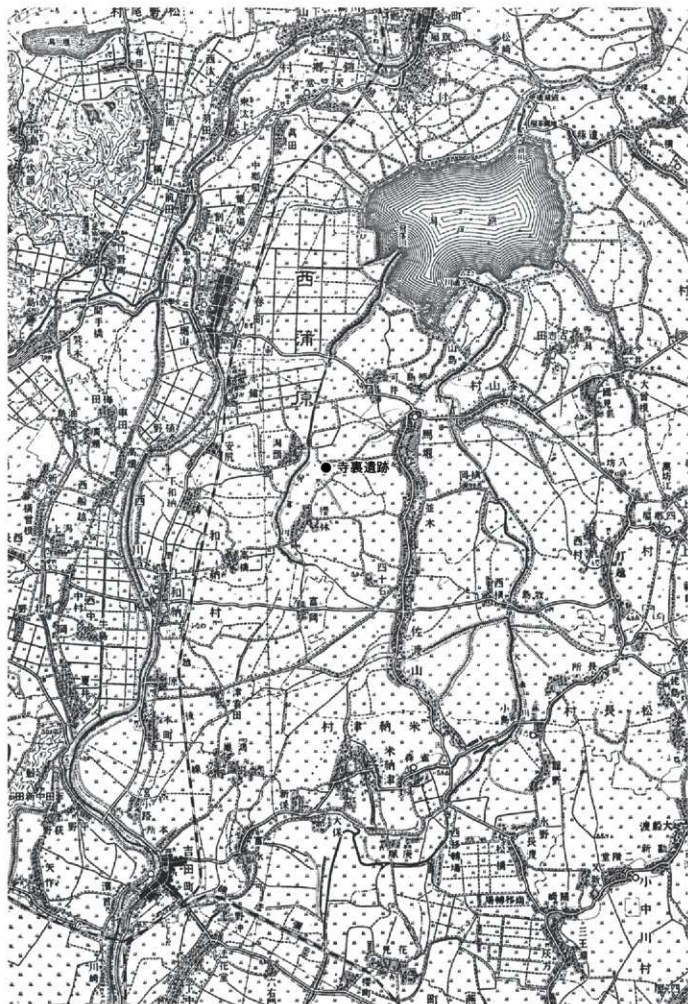
別表 3 石製品観察表

別表 No.	写真 No.	製品 No.	出仕位置	種別	時期	石種	石粒	同転方向	分量数	備考
17	13	38	S541	9P11	Ⅰ 中世	G11	上白	29	8.5	2410 花崗岩 反時計回り 6 分重 8 溝
17	13	39	S541	9P11	Ⅱ 中世	G11	上白	29	9.8	2009 花崗岩 反時計回り 6 分重 8 溝
17	13	40	S541	9P11	Ⅲ 中世	G11	上白	30	244	花崗岩
17	13	41	S541	9P11	Ⅳ 中世	G11	上白	29	948	花崗岩 反時計回り 不明
18	14	42	SD19	9P15	Ⅰ 近世	砥石		9	4.5	4.1 248 砥石
18	14	43	SK38	8C24	Ⅰ 近世前期	砥石		7.8	4.8	1.6 53 砥石

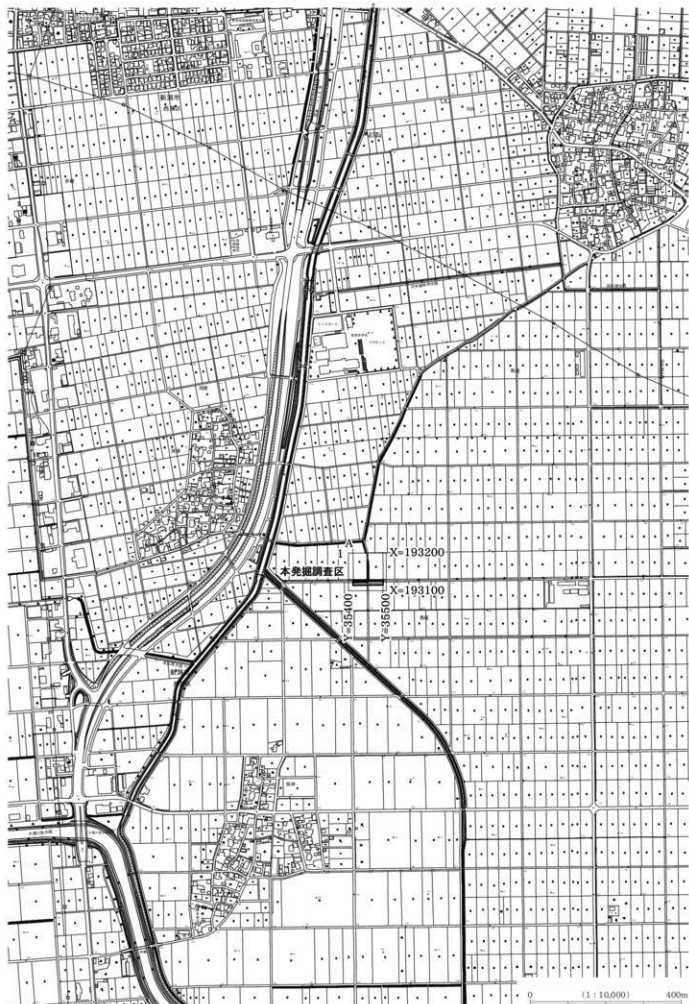
別表 4 木製品観察表

別表 No.	写真 No.	製品 No.	出仕位置	時期	塗料	法線 (cm)	長さ	幅	厚さ (指)	部材	木取り	備考
18	14	44	SB15	P13	8111	中世	木柱	69.5	8.5	7.7	芯材	
18	14	45	SB13	8125	中世	曲物	板	9	9.1	6.5	榫目	
18	14	46	SD29	9B5	中世	部材		17.3	5.4	6	榫目	
18	14	47	SD34	9B11	12	部材		45.5	4.5	3.3		
18	14	48	SD34	9B11	12	部材		69.8	1.5	1.7	丸木	

图 版

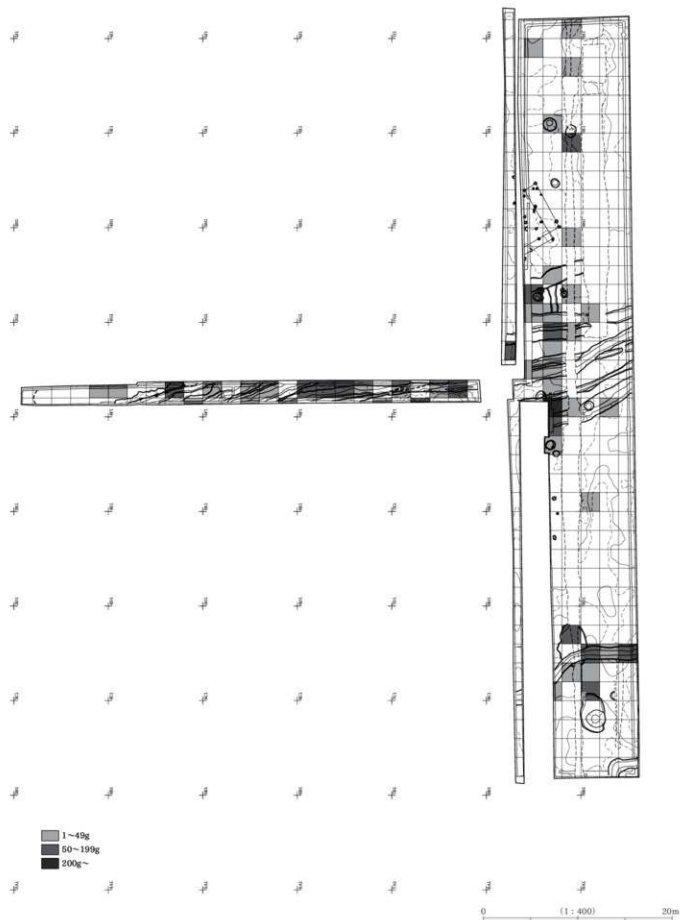


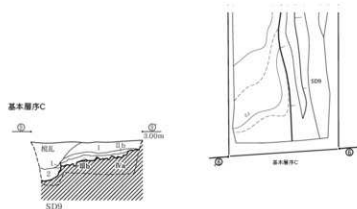
明治44年陸軍測地部測図・大正6年修正 五万分一地形図「奈良」





土層内遺跡小グリッド設定様式図





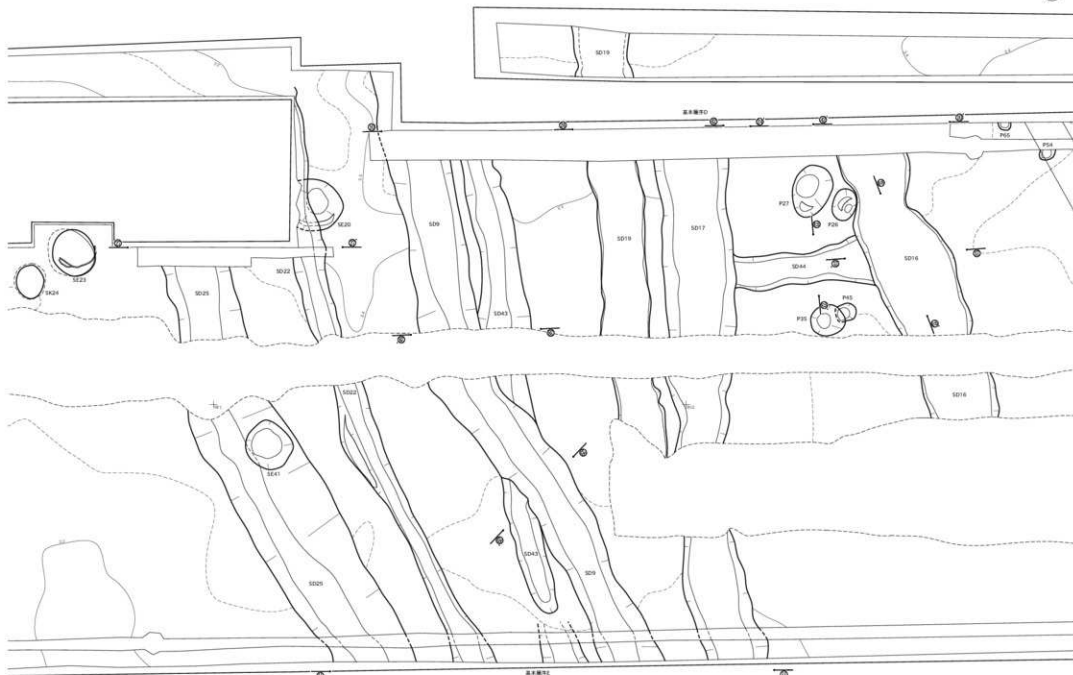
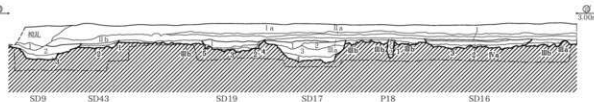
基本層序C

- 5199 (後壁セクション)
 1 黒灰土質シルト (2.0YR4/1) 粘粒中あり しまりあり 埋没し、壁・開口部ロップ部に多く含む
 2 黒灰土質シルト (1.0YR4/1) 粘粒中あり しまり中あり 可成り多量含む
 3 黒黄褐色シルト (2.0YR4/2) 粘粒中あり しまりあり 粘長粘粒含む

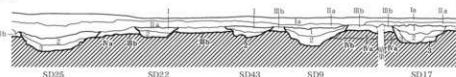
基本層序D

- 1a 黒色 (2.0Y4/1) シルト 粘粒中あり しまり中あり 表土、遺存瓦葺屋根本間部の上、未分層粘粒多量を含む
 1b 黒色 (2.0Y4/1) シルト 粘粒中あり しまりあり 左側黒褐色シルトをトップ層に多く含む 遺留土
 2a 黒黄褐色土質シルト (1.0YR4/1) 粘粒中あり しまりあり 埋没部上、遺留土層部との境界
 2b 黒黄褐色シルト (1.0YR4/1) 粘粒中あり しまりあり 埋没部上、遺留土層部との境界
 3a 黒色 (2.0Y4/1) 粘土質シルト 粘粒中あり しまり中あり 遺留土層部との境界 上部(2)F中層以降の遺構線画
 3b 黒色 (2.0Y4/1) 粘土質シルト 粘粒中あり しまり中あり 遺留土層部との境界 上部(2)F中層以降の遺構線画
 4a 黒黄褐色シルト (2.0Y4/2) 粘粒中あり しまり中あり 埋没部上に付く 下部粘粒多くなる 上面遺構線画 基盤層
 4b 黒黄褐色砂質シルト (1.0YR6/2) 粘粒中あり しまり中あり 埋没部上に付く

基本層序D

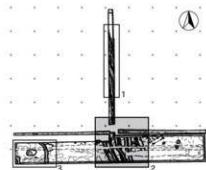


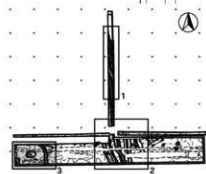
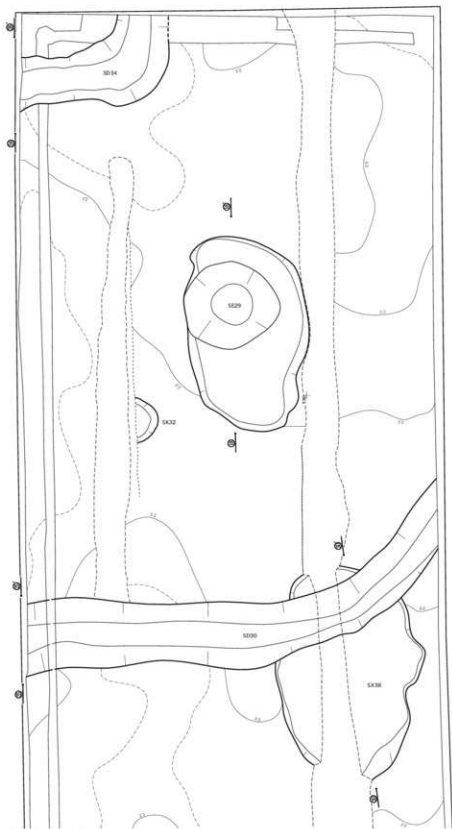
基本層序E

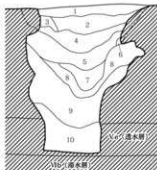
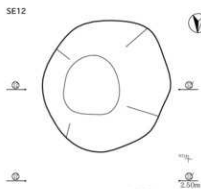


※上層位記は基本層序Dの2号埋没部画と参照

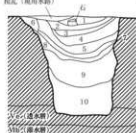
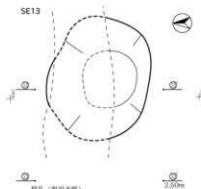
0 (1:80) 4m



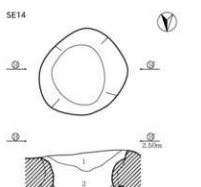




- SE12**
- 1 におい・黄褐色 (10YR7/4) 粘土質シルト 粘り強い しまり強い 互層ブロックを顕状に多量含む。
 - 2 黄褐色 (10YR5/2) シルト 粘りややあり しまりあり 砂質で、 ϕ 1mmの炭化物と腐食
 - 3 納物と互層ブロックを少量含む。
 - 4 灰褐色 (2.5Y3/2) 粘土質シルト 粘りあり しまりあり やや砂質で、粘質と砂質のシルトが
 - 5 中に混在
 - 6 黄褐色 (2.5Y7/2) シルト 粘りあり しまりあり ϕ 1~3mmの炭化物と腐食納物少量。
 - 7 互層ブロックを少量含む。
 - 8 黄褐色 (10YR5/2) 粘土質シルト 粘り強い しまり強い 互層を主体とし、粘り強い
 - 9 黄褐色 (2.5Y4/2) 粘土質シルト 粘りあり しまりあり ϕ 1~2mm炭化物を少量、互層ブロッ
 - 10 灰褐色 (2.5Y3/2) シルト 粘りややあり ϕ 1~5mm炭化物と互層を中量含む
 - 11 黄褐色 (2.5Y7/1) シルト 粘り強い しまり強い 砂質で、 ϕ 1mmの炭化物と
 - 12 互層を少量、腐食納物を中量含む
 - 13 灰オリーブ色 (5Y4/2) 粘土質シルト 粘りあり しまりあり ϕ 1mmの炭化物と腐食納物少量、互
 - 14 互層ブロックを少量含む。
 - 15 暗オリーブ色 (5Y4/4) 砂 粘りなし しまりややあり ϕ 1mmの炭化物を微量、腐食納
 - 16 物と互層ブロックを少量含む。

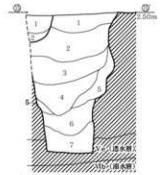
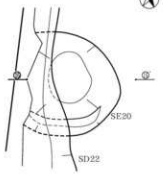


- SE13**
- 1 灰褐色 (2.5Y7/2) シルト 粘りややあり しまりややあり 砂質で、 ϕ 1~3mmの炭
 - 2 化物と互層ブロックを少量含む。
 - 3 におい・黄褐色 (10YR7/4) 粘土質シルト 粘り強い しまりあり ϕ 1mmの炭化物少量、互層ブロッ
 - 4 クを中量含む。
 - 5 黄褐色 (10YR4/1) 粘土質シルト 粘り強い しまり強い ϕ 1mmの炭化物少量、互層ブロッ
 - 6 クを顕状に多量含む。
 - 7 黄褐色 (10Y3/1) 粘土質シルト 粘りあり しまりあり やや砂質で、粘質と砂質のシルト
 - 8 がタテ横に混在
 - 9 灰褐色 (10YR4/2) シルト 粘りややあり しまりあり やや砂質で、粘質と砂質のシ
 - 10 ルトがタテ横に混在
 - 11 明褐色 (7.5Y7/2) 粘土質シルト 粘り強い しまりあり ϕ 1mmの炭化物ブロック状に中量
 - 12 化物と互層ブロックを少量含む。
 - 13 におい・黄褐色 (10YR7/4) シルト 粘りややあり しまりややあり 砂質で、 ϕ 1~2mmの炭
 - 14 化物と互層ブロックを少量含む。
 - 15 灰褐色 (10YR5/2) 粘土質シルト 粘り強い しまり強い 互層ブロックを多量含む
 - 16 におい・黄褐色 (10YR5/2) 粘土質シルト 粘りあり しまりあり ϕ 1mmの炭化物を少量、互層ブロッ
 - 17 クを中量含む、本層位以上
 - 18 黄褐色 (2.5Y7/3) シルト 粘りややあり しまりややあり 砂質で、 ϕ 1~3mmの炭
 - 19 化物と腐食納物と互層ブロックを少量含む。



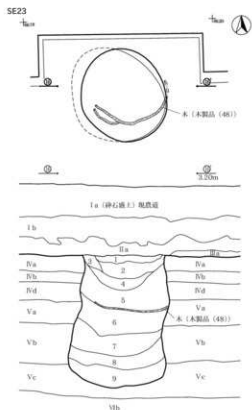
- SE14**
- 1 灰褐色 (7.5Y6/2) 粘土質シルト 粘りあり しまり強い 互層ブロックを顕状に多量含む。
 - 2 黄褐色 (10YR6/1) 粘土質シルト 粘りあり しまり強い ϕ 1mmの炭化物を微量、互層ブロッ
 - 3 クを中量含む。
 - 4 黄褐色 (10YR5/2) シルト 粘りあり しまりあり やや砂質で、 ϕ 1mmの炭化物と
 - 5 腐食納物と互層ブロックを少量含む。
 - 6 におい・黄褐色 (10YR5/4) シルト 粘りややあり しまりややあり やや砂質で、 ϕ 1~3mm
 - 7 の炭化物と互層ブロックを少量含む。
 - 8 暗オリーブ色 (5Y4/4) 粘土質シルト 粘り強い しまりあり ϕ 1~2mm炭化物多く含む。
 - 9 黄褐色 (2.5Y3/2) シルト 粘りややあり しまりややあり 砂質で、 ϕ 1~3mmの炭
 - 10 化物と互層ブロックを少量含む。

SE20 - SD22



- SE20**
- 1 灰褐色 (2.5Y6/1) 粘土質シルト 粘り強い しまり強い 互層ブロックを顕状に多量含む。
 - 2 黄褐色 (10YR5/1) 粘土質シルト 粘りあり しまりあり 互層ブロックを顕状に中量含む。
 - 3 黄褐色 (2.5Y7/2) 粘土質シルト 粘り強い しまり強い 互層ブロックを多量、 ϕ 1mmの炭化物を微量多量含む。
 - 4 黄褐色 (10YR5/1) 粘土質シルト 粘りあり しまりあり 互層ブロックを中量、腐食納物を中量含む。
 - 5 灰褐色 (5Y6/1) シルト 粘りあり しまりあり やや砂質、互層ブロックを中量、 ϕ 1~2mmの炭
 - 6 化物を少量含む。
 - 7 灰褐色 (2.5Y7/2) 粘土質シルト 粘り強い しまりあり 互層ブロックを中量、 ϕ 1~2mm炭化物多く含む。
 - 8 黄褐色 (2.5Y7/2) シルト 粘りややあり しまりややあり 砂質で、互層ブロックと ϕ 1~2mmの炭
 - 9 化物を少量含む。

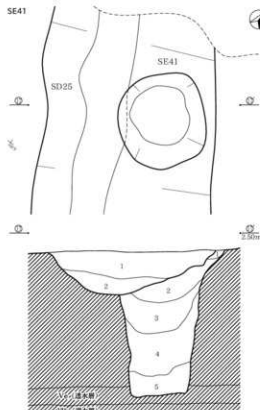
- SD22**
- 1 明褐色 (7.5Y7/1) 粘土質シルト 粘り強い しまりあり 互層ブロックを顕状に少量含む。
 - 2 黄褐色 (10YR5/1) 粘土質シルト 粘りあり しまりあり ϕ 1~2mm炭化物を少量、互層ブロックを中量含む。



- SE23**
- 1 黄褐色 (2.5YR5/3) シルト 粘状あり しまり強い
 - 2 黄褐色 (2.5YR7/2) シルト 粘状強い しまりあり
 - 3 灰褐色 (2.5YR6/2) シルト 粘状-しまり強い
 - 4 灰オリーブ色 (5YR6/2) シルト 粘状-しまりあり
 - 5 灰色 (5Y5/1) シルト 粘状-しまりあり
 - 6 黄褐色 (2.5YR5/1) シルト 粘状-しまりあり
 - 7 オリーブ褐色 (2.5YR5/2) シルト 粘状-しまりややあり
 - 8 灰褐色 (2.5Y7/2) シルト 粘状-しまりややあり
 - 9 暗黄褐色 (2.5YR5/2) 砂質シルト 粘状ややあり しまりあり

基本地層

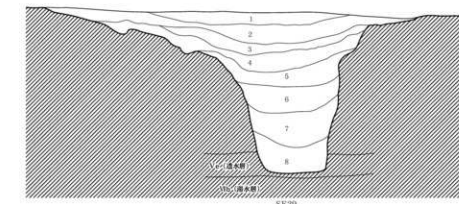
- 1a** 黄褐色 (2.5YR4/1) シルト 粘状あり しまりあり 現地土層作上 未分解動物骨多数を含む
- 1b** 灰黄褐色 (10YR6/2) シルト 粘状あり しまりあり 古層 灰黄色シルトをブロック状に多く含む
- 1a** 黄褐色 (10YR4/1) 粘土質シルト 粘状あり しまり強い 灰黄色砂土
- 1b** 灰褐色 (2.5Y3/1) 粘土質シルト 粘状ややあり しまりややあり 日本田原作上 中野～江戸初期の遺物
- 2a** 暗黄褐色 (5P07/1) 粘土質シルト 粘状強い しまり強い 陶器を散状に含む 土器遺構層遺留 基盤層
- 2b** 黄褐色 (5P06/1) 砂質シルト 粘状ややあり しまりあり やや砂質で、陶器を散状に含む
- 3a** 灰褐色 (10Y7/1) 粘土質シルト 粘状あり しまりあり
- 3b** 黄褐色 (5Y7/1) シルト 粘状ややあり しまりあり やや砂質で、粘質と砂質のシルトが9割を占める
- 4** 灰オリーブ色 (10YR4/2) 粘土質シルト 粘状あり しまりあり 粘質と砂質のシルトが7割を占める
- 5** 灰褐色 (5Y4/2) 砂 粘状なし しまりややあり 砂層が主体の遺水層
- 6** 灰色 (5Y5/1) 粘土質シルト 粘状強い しまり強い 礫水層



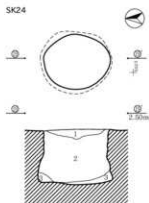
- SE41**
- 1 黄褐色 (2.5YR/1) 粘土質シルト 粘状強い しまりあり 古層ブロックを散状に多数含む
 - 2 黄褐色 (2.5YR/1) 粘土質シルト 粘状あり しまりあり $\phi 1\text{mm}$ の炭化物散在、古層ブロックを中量含む 右(西)集約地土
 - 3 灰色 (5Y5/1) 粘土質シルト 粘状あり しまりあり $\phi 1\sim 3\text{mm}$ の炭化物少量、古層ブロックを散状に中量含む
 - 4 灰黄褐色 (10YR5/2) シルト 粘状あり しまりあり $\phi 1\text{mm}$ の炭化物散在、古層ブロックを散状に中量含む
 - 5 黄褐色 (2.5YR4/1) シルト 粘状ややあり しまりややあり 砂質で、 $\phi 1\sim 3\text{mm}$ の炭化物・炭素顆粒と古層ブロックを少量含む

- SD25**
- 1 灰黄褐色 (10YR6/2) 粘土質シルト 粘状強い しまりあり $\phi 1\text{mm}$ の炭化物散在、古層ブロックを散状に中量含む
 - 2 黄褐色 (2.5Y7/2) 砂質シルト 粘状強い しまりあり $\phi 1\text{mm}$ の炭化物散在、古層ブロックを少量含む
 - 3 黄褐色 (2.5YR/1) 粘土質シルト 粘状あり しまりあり $\phi 1\sim 2\text{mm}$ の炭化物散在、古層ブロックを散状に中量含む

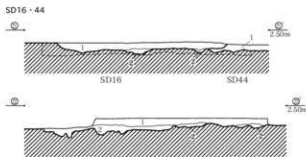
SE29



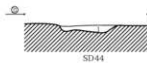
- SE29**
- 1 濃い黄褐色 (10YR5/2) 粘土質シルト 粘状あり しまり強い $\phi 1\sim 2\text{mm}$ の炭化物少量、古層ブロックを中量含む
 - 2 灰黄褐色 (10YR4/2) 砂質シルト 粘状ややあり しまりあり 砂質で、 $\phi 1\text{mm}$ の炭化物散在含む
 - 3 濃い黄褐色 (10YR7/4) 粘土質シルト 粘状強い しまり強い 粘状強く、古層ブロックを散状に多数含む
 - 4 暗黄褐色 (5P07/1) 粘土質シルト 粘状あり しまりあり やや砂質で、 $\phi 1\sim 2\text{mm}$ の炭化物少量含む
 - 5 灰黄褐色 (10YR6/1) 粘土質シルト 粘状あり しまりあり やや砂質で、 $\phi 1\text{mm}$ の炭化物散在含む
 - 6 灰色 (5Y5/1) 粘土質シルト 粘状あり しまりあり $\phi 1\sim 3\text{mm}$ の炭化物散在、古層ブロックを散状に中量含む
 - 7 灰黄褐色 (10YR5/2) シルト 粘状あり しまりあり $\phi 1\text{mm}$ の炭化物・炭素顆粒を少量、古層ブロックを散状に中量含む
 - 8 黄褐色 (10YR4/1) 砂 粘状なし しまりややあり $\phi 1\sim 3\text{mm}$ の炭化物・炭素顆粒と古層ブロックを少量含む



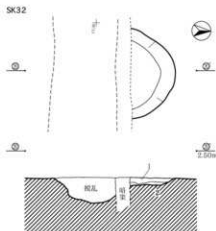
SK24
 1 に近い黄褐色 (10YR7/2) 粘土質シルト 粘り強い、しりり強い、互層ブロックを縦状に少量含む
 2 黄灰色 (2.5Y5/1) 砂 粘りややあり、しりりややあり、やや砂質で、互層ブロックと ϕ 1~3mmの炭化物少量含む
 3 黄灰色 (2.5Y5/1) 粘土質シルト 粘り強い、しりりあり、灰色砂質シルトと黄灰色粘質シルトをラミナ状に含む



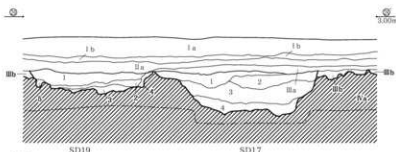
SD16
 1 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘土質シルト 粘り強い、しりりあり、互層ブロックを縦状に中量、 ϕ 1~2mmの炭化物を少量含む
 2 黄灰色 (10YR6/1) 粘土質シルト 粘り強い、しりりあり、互層ブロックを縦状に少量、 ϕ 1mmの炭化物を微量含む



SD44
 1 黄灰色 (10YR5/1) 粘土質シルト 粘り強い、しりりあり、 ϕ 1mmの炭化物、互層ブロックを縦状に少量含む

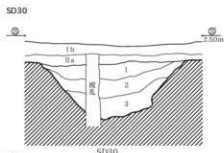


SK32
 1 灰黄褐色 (10YR5/2) 粘土質シルト 粘り強い、しりり強い、 ϕ 1~2mm炭化物を少量、互層ブロックを縦状に少量含む
 2 黄灰色 (10YR5/3) 粘土質シルト 粘り強い、しりり強い、互層ブロックを縦状に少量含む

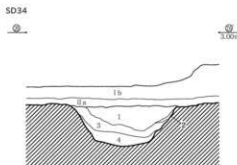


SD17
 1 黄灰色 (2.5Y7/3) 粘土質シルト 粘り強い、しりり強い、粘り強く、互層を少量含む
 2 灰色 (10Y5/2) 粘土質シルト 粘り強い、しりりあり、互層ブロックを縦状に中量、 ϕ 1mmの炭化物を微量含む
 3 黄灰色 (2.5Y6/1) 粘土質シルト 粘り強い、しりり強い、粘り強く、互層を縦状に少量含む
 4 黄灰色 (2.5Y7/2) 粘土質シルト 粘り強い、しりり強い、粘り強く、互層を縦状に少量含む

SD19
 1 灰黄色 (2.5YR/2) 粘土質シルト 粘り強い、しりり強い、互層ブロックを中量、 ϕ 1~2mmの炭化物を少量含む
 2 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 粘土質シルト 粘り強い、しりりあり、互層ブロックを少量、 ϕ 1~2mmの炭化物を微量含む
 3 黄灰色 (10YR4/1) 粘土質シルト 粘りややあり、しりりあり、やや砂質、 ϕ 1~2mmの炭化物と灰色土ブロックを少量含む
 4 黄灰色 (2.5Y5/1) 粘土質シルト 粘り強い、しりりあり、互層ブロックを少量、 ϕ 1~2mmの炭化物を少量含む
 5 灰白色 (10YR7/1) 粘土質シルト 粘り強い、しりり強い、互層ブロックを少量含む

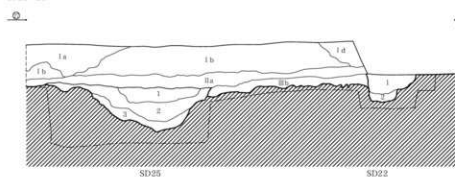


SD30
 1 黄灰色 (10YR6/1) 粘土質シルト 粘り強い、しりり強い、互層ブロックを縦状に中量含む
 2 黄灰色 (2.5Y7/2) 粘土質シルト 粘り強い、しりりあり、 ϕ 1~2mm炭化物を微量、互層ブロックを少量含む
 3 黄灰色 (10Y6/1) 粘土質シルト 粘り強い、しりり強い、互層ブロックを縦状に中量含む
 4 灰色 (10Y5/1) 粘土質シルト 粘り強い、しりりややあり、 ϕ 1~3mm炭化物を少量、互層ブロックを少量含む



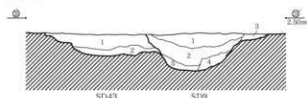
SD34
 1 黄褐色 (7.5YR5/2) 粘土質シルト 粘り強い、しりり強い、互層ブロックを縦状に中量含む
 2 黄灰色 (7.5YR6/1) 粘土質シルト 粘り強い、しりり強い、互層ブロックを縦状に中量含む
 3 暗黄褐色 (7.5YR7/1) 粘土質シルト 粘り強い、しりりあり、 ϕ 1~2mm炭化物を少量、互層ブロックを少量含む
 4 黄褐色 (10YR2/4) 粘土 本所に ϕ 3~3.5cmの楕円状の器の残骸が認められた状態で出土

SD22・25



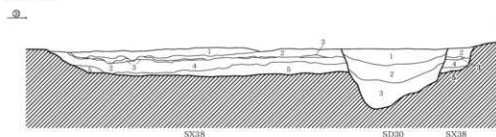
- SD25**
 1 灰褐色 (10YR6/2) 粘土質シルト 粘性強い しまりあり φ1mmの炭化物微塵。瓦割ブロックを散状に中層含む。
 2 灰褐色 (2.5Y7/2) 粘土質シルト 粘性強い しまり強い φ1mmの炭化物微塵。瓦割ブロックを多数含む。
 3 灰褐色 (2.5Y5/1) 粘土質シルト 粘性あり しまり強い φ1~2mmの炭化物微塵。瓦割ブロックを散状に中層含む。
- SD22**
 1 明褐色 (7.5Y7/1) 粘土質シルト 粘性強い しまりあり 瓦割ブロックを散状に少量含む。
 2 褐色 (10YR5/1) 粘土質シルト 粘性あり しまりあり φ1~2mm炭化物を少量。瓦割ブ
 ロックを中層含む。

SD9・43

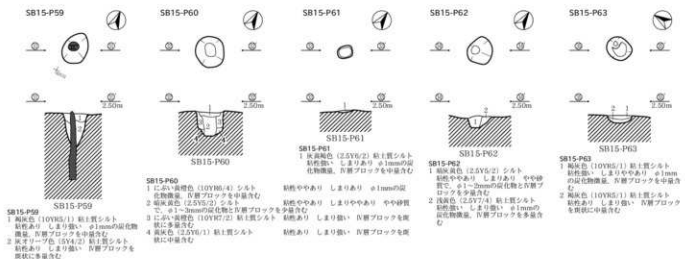


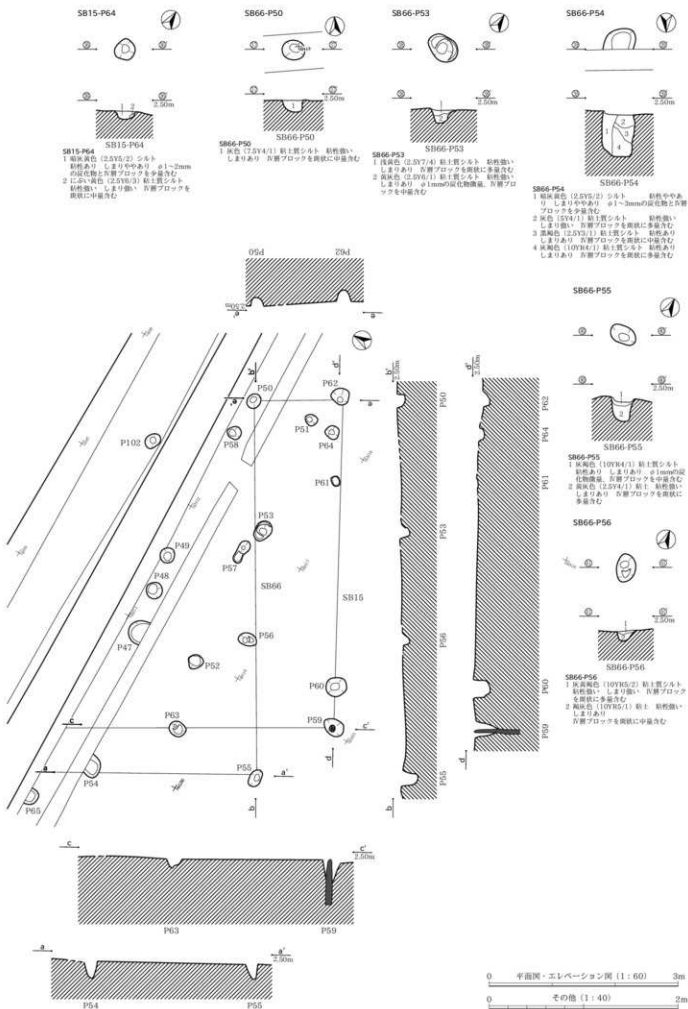
- SD9**
 1 灰褐色 (2.5Y6/2) 粘土質シルト 粘性強い しまり強い 瓦割ブロックを中層 φ1~2mmの炭化物を少量含む。
 2 暗灰褐色 (2.5Y4/2) 粘土質シルト 粘性強い しまり強い 瓦割ブロックを少量 φ1~2mmの炭化物を微塵含む。
 3 褐色 (10YR4/1) 粘土質シルト 粘性やや中あり しまりあり やや砂質 φ1~2mm炭化物と土器土ブロックを少量含む。
 4 灰褐色 (2.5Y5/1) 粘土質シルト 粘性強い しまり強い 瓦割ブロックを多数 φ1~2mmの炭化物を少量含む。
 5 灰褐色 (10YR7/1) 粘土質シルト 粘性強い しまり強い 瓦割ブロックを多数含む。
- SD43**
 1 灰褐色 (10YR5/1) 粘土質シルト 粘性あり しまりあり φ1mmの炭化物微塵。瓦割ブロックを散状に中層含む。
 2 灰褐色 (10YR5/2) 粘土質シルト 粘性あり しまり強い 瓦割ブロックを散状に中層含む。

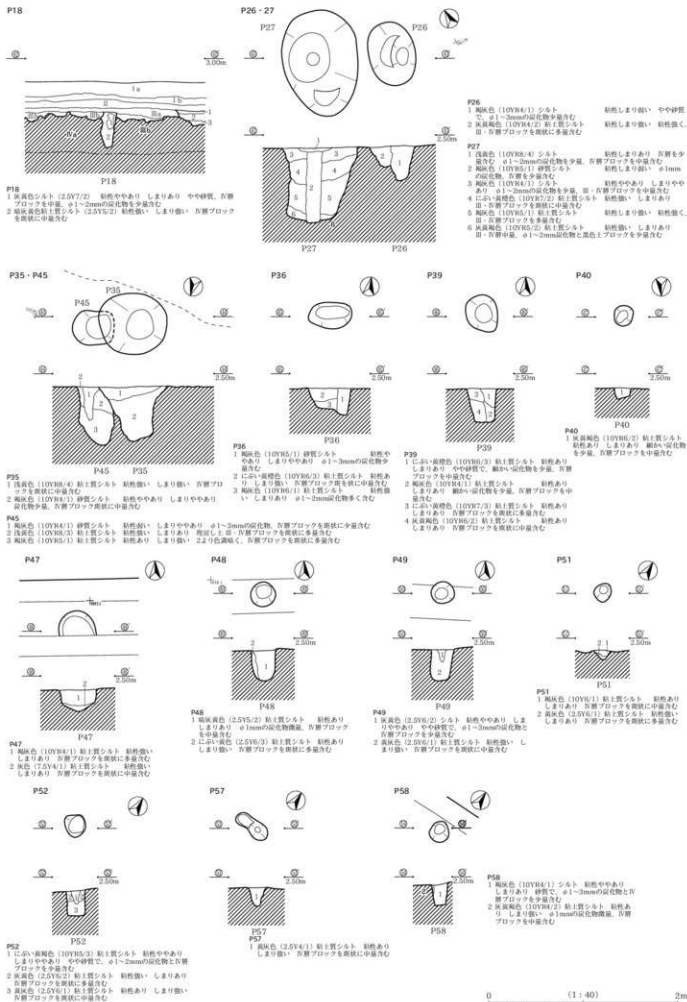
SX38・SD30

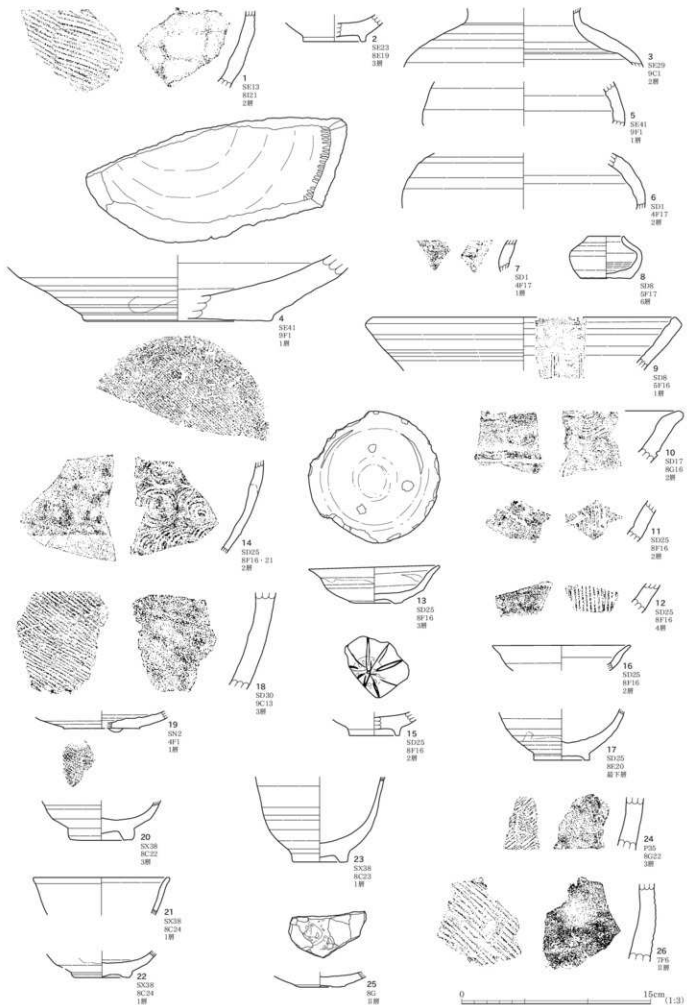


- SX38**
 1 明褐色 (7.5Y7/1) 粘土質シルト 粘性強い しまりあり 瓦割ブロックを散状に少量含む。
 2 土色(褐色) (10YR7/2) 粘土質シルト 粘性あり しまりあり φ1~2mmの炭化物を少量。瓦割ブロックを中層含む。
 3 暗褐色 (10YR5/4) 硬底 断面に厚さ1~3cmの硬皮が巻かれたれら状態で見え。
 4 土色(褐色) (10YR6/3) 砂質シルト 粘性やや中あり しまりあり 砂質で、細かい炭化物を少量。瓦割ブロックを中層含む。
- SD30**
 1 灰褐色 (10YR5/1) 粘土質シルト 粘性あり しまり強い 瓦割ブロック散状に中層含む。
 2 褐色 (2.5Y7/2) 粘土質シルト 粘性強い しまりあり φ1~2mm炭化物を少量。瓦割ブ
 ロックを多数含む。
 3 灰色 (10YR1) 粘土質シルト 粘性あり しまり強い 瓦割ブロック散状に中層含む。

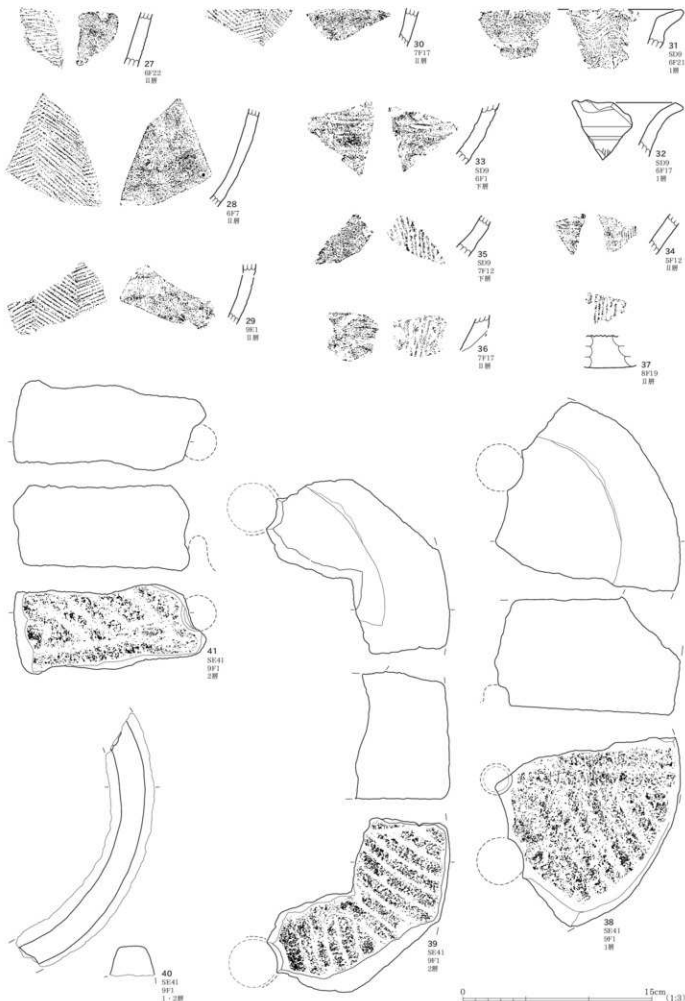


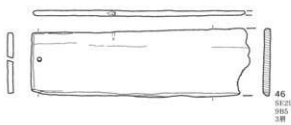
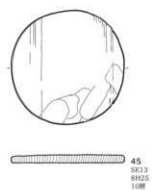
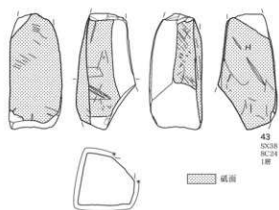
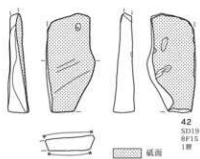




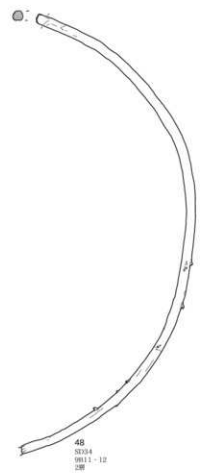
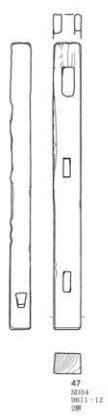
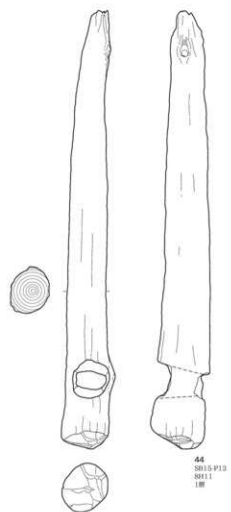


0 15cm (1:3)

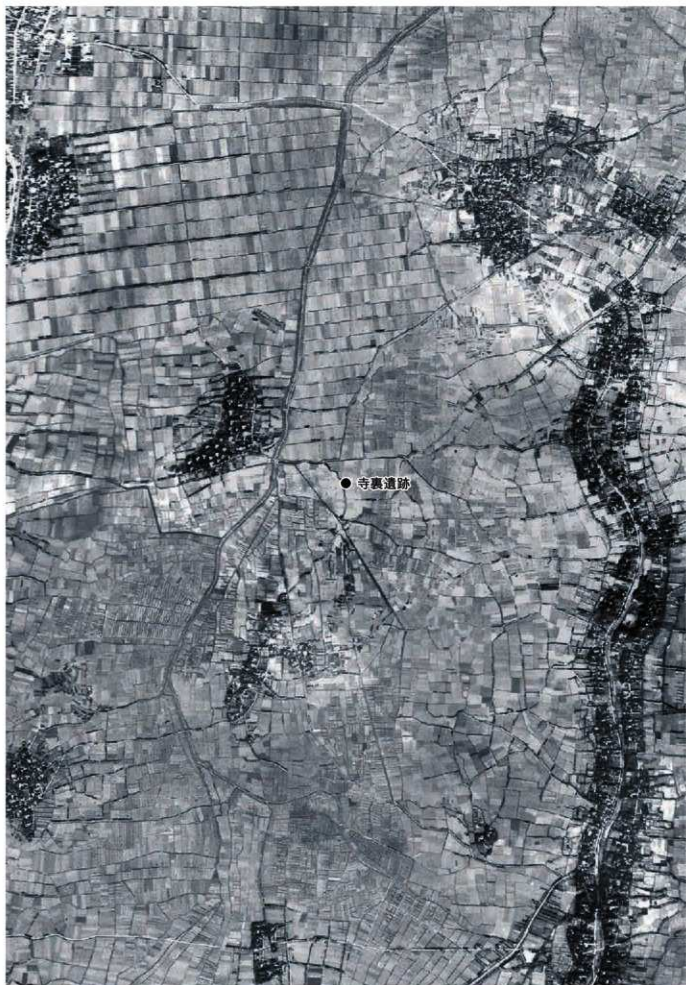




0 (42・43・45・46) 15cm (1:3)



0 (44・47・48) 30cm (1:6)





寺裏遺跡遠景・弥彦山を望む（東上空から）



寺裏遺跡全景（東上空から）



調査前現況（南から）



調査前現況（西から）



基本層序 A 調査区北側（東から）



基本層序 B 調査区北側（西から）



基本層序 C 調査区北側（北から）



基本層序 D 調査区南側（南から）



基本層序 E 調査区南側（北から）



基本層序 E 調査区南側（北から）



SE12 上部断面 (北から)



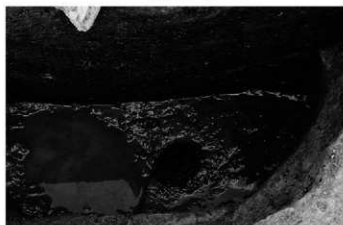
SE12 上部完掘 (北から)



SE12 下部断面 (北から)



SE13 上部断面 (西から)



SE13 曲げ物底板 (45) 出土状況 (西から)



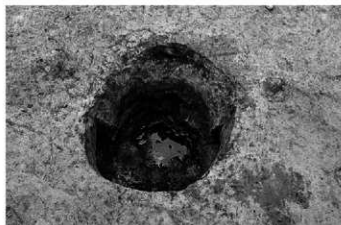
SE13 上部完掘 (北から)



SE13 下部断面 (西から)



SE14 上部断面 (東から)



SE14 上部完掘 (西から)



SE14 下部断面 (北から)



SE20 上部断面 (南から)



SE20 上部完掘 (東から)



SE20 下部断面 (南から)



SE23 上部断面 (南から)



SE23 杵木出土状況 (北から)



SE23 下部断面 (南から)



SE29 珠洲焼壺 (3) 出土状況 (南東から)



SE29 木製部材 (46) 出土状況 (南東から)



SE29 上部完掘 (南西から)



SE41 上部断面、SD25 土層断面 (南から)



SE41 石白 (38~40) 出土状況 (南から)



SE41 下部断面 (南から)



SK24 土層断面 (西から)



SK24 完掘 (西から)



SK32 土層断面 (東から)



SK32 完掘 (北から)



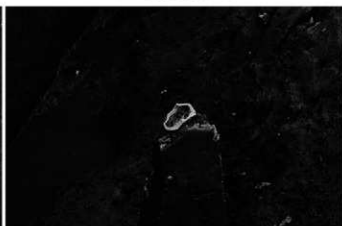
SD1 土層断面 (南東から)



SD1 完掘 (北西から)



SD8 土層断面 (南から)



SD8 瀬戸・美濃焼小壺 (8) 出土状況 (南から)



SD8 完掘 (南東から)



SD9・11 完掘 (南から)



SD16 土層断面 (南から)



SD16・44 完掘 (北から)



SD17 土層断面 (北から)



SD19 土層断面 (南から)



SD17・19 完掘 (北から)



SD22 土層断面 (南から)



SD22・25 完掘 (北から)



SD25 唐津焼皿 (13) 出土状況 (南から)



SD25 完掘 (南から)



SD30 土層断面 (北から)



SD30 完掘 (北から)



SD34 土層断面 (北から)



SD34 樹皮検出状況 (東から)



SD34 完掘 (北から)



SD43 土層断面 (北から)



SD9・22・43 完掘 (北から)



SX38 土層断面 (北から)



SX38 唐津焼碗 (23) 出土状況 (南から)



SX38 完掘 (南から)



SN2 完掘 (西から)



SN5 完掘 (東から)



SA46 完掘 (南東から)



SB15-66 完掘 (東から)



SB15-P59 断面 (南から)



P18 土層断面 (南から)



P27 土層断面 (南から)



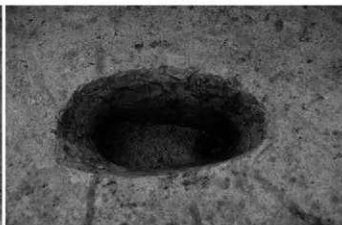
P26・27 完掘 (南から)



P35・45 土層断面 (北から)



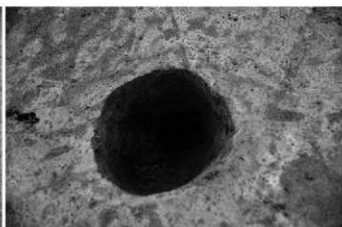
P35・45 完掘 (南から)



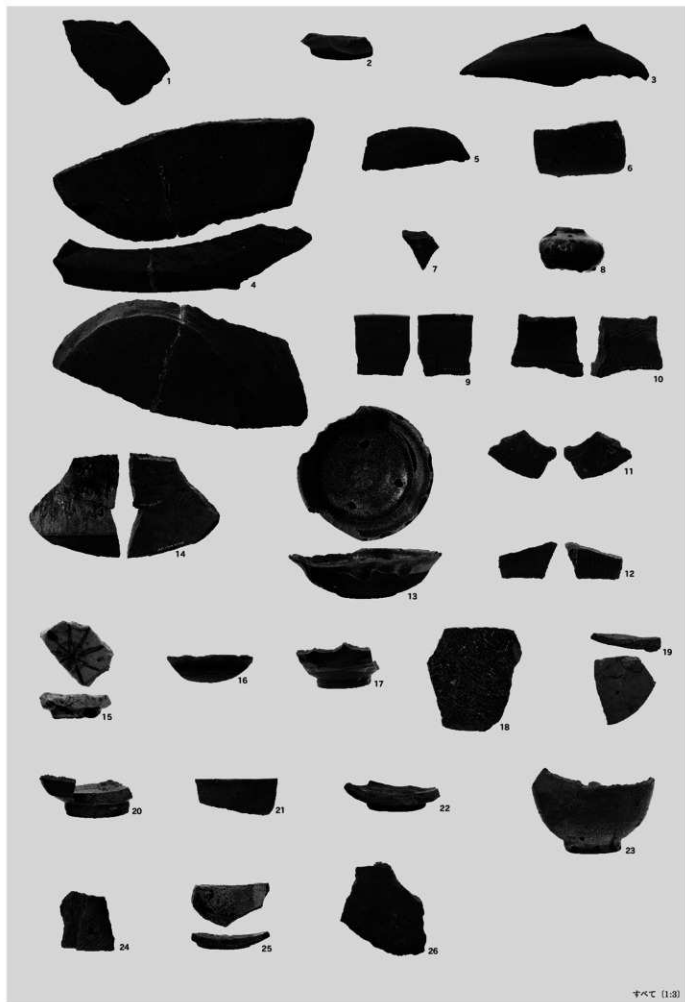
P36 完掘 (南から)

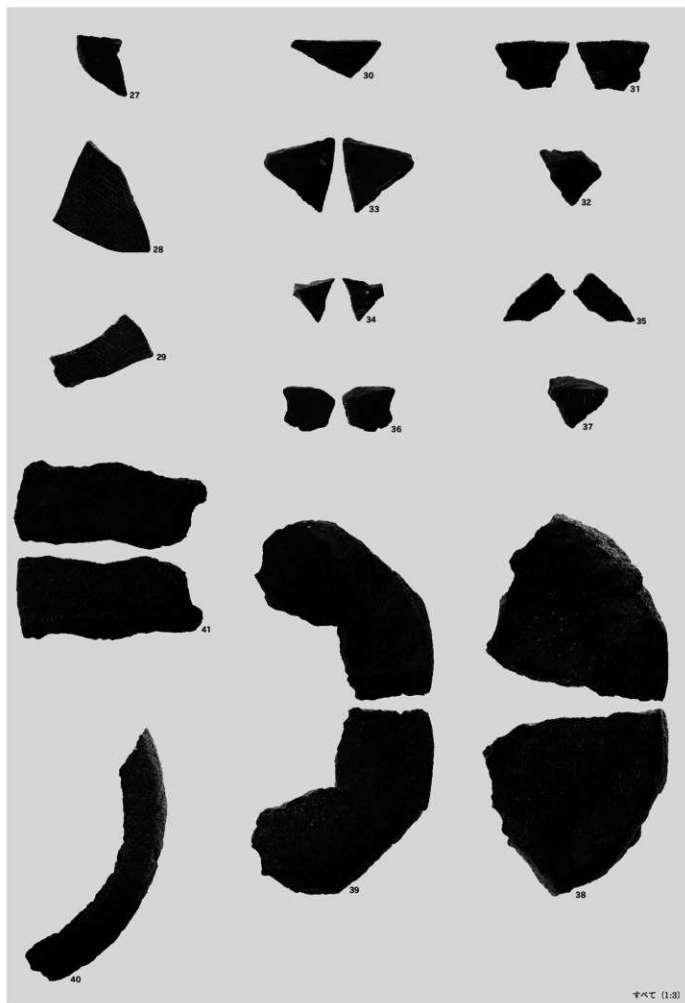


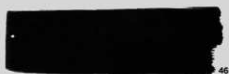
P39 完掘 (南から)



P40 完掘 (南から)







報告書抄録

ふりがな	てらうらいせき だいさんじちようき							
書名	寺裏遺跡 第3次調査							
副書名	一経営体育成基盤整備事業（馬場地区）に伴う寺裏遺跡第3次発掘調査報告書一							
シリーズ名	新潟市埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号								
編者名	長谷川眞志（新潟市文化財センター）、遠藤恭雄（新潟市文化スポーツ部歴史文化課）、武部高亮（株式会社ノガミ）、株式会社古環境研究所							
編集機関	新潟市文化スポーツ部歴史文化課 文化財センター							
所在地	〒950-1122 新潟市西区木場2748番地1 TEL 025-378-0480							
発行年月日	2024年3月22日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
寺裏遺跡	新潟県新潟市 西蒲区馬場字 寺裏2876ほか	15108	810	37° 44' 23"	138° 54' 08"	20220720～ 20221031	948.76	県営ほ場整備事業に伴う 本発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
寺裏遺跡	集落遺跡	室町時代～ 江戸時代初期		井戸・土坑・溝・性格 不明遺構・耕作関連遺 構・掘立柱建物・柱列・ 掘立柱建物・柱穴		珠洲焼（壺・甕・播鉢・片口鉢）・ 瀬戸・美濃焼（小壺・香炉・皿）・ 肥前系陶器（皿・椀・壺・甕）・ 石臼・砥石・木製品・木柱		
要約	<p>寺裏遺跡は飛落川右岸の自然堤防上に立地し、標高約2.2～2.6mを測る。周辺は水田として利用される平坦な地形である。調査は経営体育成基盤整備事業（馬場地区）に伴い令和4年に実施した。発掘調査面積は948.76㎡である。調査の結果、井戸・土坑・掘立柱建物などが見つかり、室町時代～江戸時代にかけて断続的に営まれた集落の存在が明らかになった。溝や耕作関連遺構も確認されているため、水田耕作を行っていた小規模な集落であると考えられる。遺物は室町時代～江戸時代初期の珠洲焼・肥前系陶器（唐津焼）が多くを占める。遺跡周辺の現集落が中世～近世に出現して現在まで続く一方、寺裏遺跡は江戸時代中期から明治、昭和の地図・航空写真で確認できず、同時期に存在する集落同士でも異なる経緯をたどっていることが明らかになった。</p>							

寺裏遺跡 第3次発掘調査報告書

一経営体育成基盤整備事業（馬場地区）に伴う寺裏遺跡第3次発掘調査報告書一

2024年3月21日印刷

2024年3月22日発行

編集 新潟市歴史文化課文化財センター
〒950-1122 新潟県新潟市西区木場2748番地1
TEL 025 (378) 0480

発行 新潟市教育委員会
〒951-8554 新潟県新潟市中央区古町通7番町1010番地
古町ルフル4階
TEL 025 (228) 1000

印刷・製本 株式会社ハイングラフ
〒950-2022 新潟市西区小針1丁目11番8号
TEL 025 (233) 0321